

祝美（いわいのび）

―大正期皇室御慶事の品々

祝美（いわいのび）

——大正期皇室御慶事の品々

平成19年9月29日(土)～平成20年3月9日(日)

第1期　9月29日(土)～10月28日(日)
第2期　11月3日(土)～12月9日(日)
第3期　12月15日(土)～1月27日(日)
第4期　2月2日(土)～3月9日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館



目次

3…ごあいさつ

4…大正時代の御慶事と美術品制作

7…東京美術学校の依嘱製作による品々

10…図版・解説

大正4年　大礼（即位の礼）……10
大正期御慶事の献上品に見られる彫金家の変遷……18
画帖……30
大正5年　立太子礼……34
大正8年　皇太子成年式……39
大正11年　雍仁親王成年式・大正14年　宣仁親王成年式……44
大正13年　皇太子御結婚……48
御慶事を飾った彫塑
―高村光雲・山崎朝雲の木彫作品を中心に―……52
富岡鉄斎と山元春挙
―大正六年に帝室技芸員になった二人の画家―……67
大正十三年　皇太子御結婚奉祝献上品
「御飾棚」「御飾品」および「御屏風」について……70
大正14年　大正天皇大婚二十五年（銀婚式）……113
もうひとつの飾棚と棚飾品―大婚二十五年奉祝献品……121

125…資料―御成婚奉祝献品　「御飾棚」及び「御飾品」

129…作品目録

v…List of Works

iii…Auspicious Events of the Taisho Era and Art Production

ii…Foreword

凡例

一、本図録は、平成十九年九月二十九日（土）から平成二十年三月九日（日）までを会期とする展覧会「祝美―大正期皇室御慶事の品々」の解説図録である。

一、図録に掲載する番号は、本図録の構成上の図版番号である。作品の展示は四期に分けて展示替を行い、会期別に展示番号を付けたため、本図録掲載の各作品の展示会期及び展示番号については、各作品図版のキャプションに続けて別に記した。

一、図録中、作品の寸法は、原則として縦（D／奥行）×横（W／幅）×高（H）で表示している。単位はcmである。

一、本展覧会で展示する作品のうち、図版番号5の作品は御物で、侍従職所管品である。他は全て、三の丸尚蔵館の所蔵作品である。

一、本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室主任研究官・太田彩が行い、学芸室員が協力した。また、巻頭の概説は太田と研究員・五味聖が執筆し、各コラム及び作品解説は太田、五味と研究員・岡本隆志が分担執筆した。

一、図録掲載の写真は、便利堂、及び（株）コニカミノルタホールディングスの撮影による。また、P72～73・78・79・80・88～91・106～109のモノクロ図版は、現状において撮影ができない等の事情により『御成婚奉祝献品図録』より複写転載した。

ごあいさつ

皇室の御慶事は、国民の慶びでもあり、様々なかたちでその慶びが表されてきました。美術工芸品の表現もそのひとつで、御慶事に相応しい意匠が選ばれ、華やかで美しい作品が多いことが特色です。

近代以降において、皇室御慶事が多く、その時々に慶祝の意をこめた優れた美術工芸品が制作されて献上されているのが大正時代です。大正時代は、わずか十五年の短い間に、大正四年の大礼、同五年の立太子礼、同八年の皇太子（昭和天皇）成年式、同十三年の皇太子御結婚、同十四年の大正天皇銀婚式のほか、同十一年の雍仁親王の成年式と秩父宮創立等の御慶事が相次ぎました。これらの際には、明治期に行われ始めていた様々な奉祝の在り方が次第に整って盛大に行われるようになっており、祝意をこめた様々な美術工芸品の制作が、最も充実した時期でもありました。また、明治期以降、海外との交流を重ねつつあった皇室ですが、大正十年の皇太子御外遊等によって、皇室の存在が各国においても強く意識されるようになり、海外からお祝いの品が増えるのもこの大正期です。

今回の展覧会では、こうした大正期御慶事の際に奉祝のために制作され、献上された美術品の数々を通して、それらの意匠的特徴、これらに関わった人々と時代の特徴等を紹介します。これまでに、あまり注目されてこなかった大正期の美術について、質の高さと面白さを再認識いただければ幸いです。

平成十九年九月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第45回　祝美ー大正期皇室御慶事の品々）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	八稜鏡形鳳凰文ボンボニエール		一点	大正4年（1915）	p. 12
2	入目籠形ボンボニエール		一点		p. 12
3	柏葉筥形ボンボニエール		一点		p. 12
4	挿華（桜・橘）		一点		p. 12
6	鳳置物	海野美盛（二代）	一点	大正5年（1916）	p. 14
7	双鶏置物	戸島光孚	一点	大正5年（1916）	p. 15
8	双鶴置物	塚田秀鏡、黒川義勝	一点	大正4年（1915）	p. 15
9	斎田豊作図花瓶		一対	大正4年（1915）	p. 16
10	丹鳳朝陽図花瓶	海野勝珉	一対	大正4年（1915）	p. 16
11	鳳凰図花瓶	海野美盛（二代）、 海野清	一対	大正6年（1917）	p. 17
12	萬歳楽置物	高村光雲、山崎朝雲	一点	大正5年（1916）	p. 20
13	網代蔦蒔絵棚	大垣昌訓	一基	大正3年（1914）	p. 21
14	東京名勝図・萬歳楽図衝立	島田佳矣（図案）ほか	一基	大正4年（1915）	p. 22-27
15	花鳥之図	今尾景年	六曲一双	大正4年（1915）	p. 28-29
16	画帖		二帖	大正4年（1915）	p. 30-31
17	画帖		一帖	大正3年（1914）	p. 32
18	書画帖		四帖	大正4年（1915）	p. 33
19	六花形鴛鴦文ボンボニエール		一点	大正5年（1916）	p. 34
20	蓬莱雲鶴蒔絵書棚	六角紫水ほか	一基	大正6年（1917）	p. 35
21	晴天鶴	山元春挙	三幅対	大正5年（1916）	p. 36-37
22	諫鼓鶏置物	鈴木盛久、 平田重光ほか	一点	大正初期（20世紀）	p. 37
23	木彫人形「鷺」		一点	大正初期（20世紀）	p. 38
24	山水図花瓶	海野勝珉	一対	明治末期～大正初期（20世紀）	p. 38
25	八稜鏡形鶴文ボンボニエール		一点	大正8年（1919）	p. 39
26	丸形松喰鶴文ボンボニエール		一点	大正8年（1919）	p. 39
27	歌蒔絵文台・重硯箱	神坂雪佳（図案）、江馬長閑（文台）、神坂祐吉（硯箱）	一具	大正8年（1919）	p. 40
28	鹿置物	高村光雲	一点	大正9年（1920）	p. 41
29	双鶴に桜梅桃李図	結城素明	三幅対	大正8年（1919）	p. 42-43
30	住吉神像置物	天岡均一	一点	大正8年（1919）	p. 43
31	箱形雲鶴文ボンボニエール		一点	大正11年（1922）	p. 45

32	箱形松唐草文ボンボニエール		一点	大正11年（1922）	p. 45
33	箱形梅花散文ボンボニエール		一点	大正14年（1925）	p. 45
34	丸形梅花散文ボンボニエール		一点	大正14年（1925）	p. 45
35	菊花蒔絵文台・硯箱	船橋舟珉	一具	大正11年（1922）	p. 46
36	猿置物	高村光雲	一点	大正12年（1923）	p. 47
37	六角箱形松鶴文ボンボニエール		一点	大正13年（1924）	p. 50
38	卵形亀甲文ボンボニエール		一点	大正13年（1924）	p. 50
39	松樹鷹置物	高村光雲	一点	大正13年（1924）	p. 51
40	白馬節会置物	山崎朝雲	一点	大正13年（1924）	p. 54
41	加茂競馬置物	山崎朝雲	一点	大正13年（1924）	p. 55
42	アテナ像	ジュール・クータン	一点	19世紀末～20世紀初頭	p. 56
43	両殿下御坐像	吉田白嶺	一対	大正13年（1924）	p. 57
44	奉祝御成婚花電車絵図	島田佳矣ほか	一帖	大正13年（1924）	p. 58-59
45	画帖「瑞彩」	富岡鉄斎ほか	三帖	大正13年（1924）	p. 60-64
46	孔雀図	広瀬東畝	対幅	明治41年（1908）	p. 65
47	武陵桃源・瀛洲神境	富岡鉄斎	対幅	大正12年（1923）	p. 66
48	和暖	竹内栖鳳	六曲一双より右隻	大正13年（1924）	p. 68-69
49-1	御飾棚　鳳凰菊文様蒔絵	島田佳矣ほか	一基	昭和3年(1928)	p. 74
49-2	彫金花瓶　鶴 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	伊藤正見	一点	昭和3年(1928)	p. 75
49-3	鍛金飾壷　五芝ノ意 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	黒川義勝	一点	昭和3年(1928)	p. 75
49-4	七宝飾皿　胡俗楽苑 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	稲葉七穂	一面	昭和3年(1928)	p. 76
49-5	磁器花瓶　花鳥文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	板谷波山	一点	昭和3年(1928)	p. 76
49-6	木彫置物　養蚕天女 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	高村光雲	一点	昭和3年(1928)	p. 77
49-7	鋳金置物　龍 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	大島如雲	一点	昭和3年(1928)	p. 77
49-8	鋳金飾壷　銀象嵌文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	津田大壽	一点	昭和3年(1928)	p. 78
49-9	蒔絵短冊色紙筥　岩濤文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	迎田秋悦	一具	昭和3年(1928)	p. 79
49-10	七宝香合　宝相華文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	安藤重兵衛	一点	昭和3年(1928)	p. 79
49-11	蒔絵香盆　岩に浪 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	戸島光孚	一枚	昭和3年(1928)	p. 79
49-12	彫金写真立　桜・菊 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	清水亀蔵、鈴木美彦	一対	昭和3年(1928)	p. 80
49-13	鋳金花瓶　千鳥文 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	香取秀真	一点	昭和3年(1928)	p. 80
49-14	蒔絵硯筥　菊文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	赤塚自得	一合	昭和3年(1928)	p. 81
49-15	蒔絵手筥　瑞鳥霊獣文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	六角紫水	一合	昭和3年(1928)	p. 81
49-16	玳瑁装身具　鴛鴦菊花文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	森田佳鳳(図案)・ 江崎榮造(製作)	一具	昭和3年(1928)	p. 82

49-17	彫金洋式文房具 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	千頭庸哉(図案)・ 山川孝次(製作)	一具	昭和3年(1928)	p. 83
49-18	螺鈿軸盆　藤花菖蒲文様 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	豊川楊溪	一点	昭和3年(1928)	p. 83
49-19	現代風俗絵巻 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	松岡映丘ほか	一巻	昭和3年(1928)	p. 84-86
49-20	染織繍組器褥 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	山鹿清華	一式のうち	昭和3年(1928)	p. 87
49-21	二曲御屏風　各種工芸扇面色紙 （鳳凰菊文蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	島田佳矣ほか	二曲一双	昭和3年(1928)	p. 88-91
50-1	御飾棚　鶴桐文様蒔絵	島田佳矣ほか	一基		p. 92
50-2	鍛金飾壷　唐華文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	藤本萬作	一点	昭和3年（1928）	p. 93
50-3	磁器花瓶　果実文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	中村秋塘	一点	昭和3年（1928）	p. 93
50-4	木彫置物　童 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	山崎朝雲	一点	昭和3年（1928）	p. 94
50-5	鋳金花瓶　南天燭文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	佐々木象堂	一点	昭和3年（1928）	p. 94
50-6	磁器飾壷　錦彩花卉 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	伊東陶山（二代）	一点	昭和3年（1928）	p. 95
50-7	七宝飾壷　唐花文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	安藤重壽	一点	昭和3年（1928）	p. 95
50-8	蒔絵硯筥　梅花芦手絵 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	植松包美	一合	昭和3年（1928）	p. 96
50-9	蒔絵色紙短冊筥　若松に雲雀、菊に鶉 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	由木尾雪雄	一具	昭和3年（1928）	p. 96
50-10	牙彫置物　唐子遊 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	和田光石	一点	昭和3年（1928）	p. 97
50-11	錦綾帖　染織百五種 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	龍村平蔵	一帖	昭和3年（1928）	p. 97-99
50-12	彫金帖鎮　兎 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	桂　光春	一点	昭和3年（1928）	p. 100
50-13	彫金花瓶　群蝶 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	船越春珉	一点	昭和3年（1928）	p. 100
50-14	刺繍写真立　春・秋 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	渡邊松華、黒田橘邨	一対	昭和3年（1928）	p. 101
50-15	磁器香炉　宝相華文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	石野龍山	一点	昭和3年（1928）	p. 101
50-16	堆朱香合　双鳥 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	堆朱楊成（二十代）	一合	昭和3年（1928）	p. 101
50-17	蒔絵香盆　撫子花文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	鶴田和三郎（二代）	一枚	昭和3年（1928）	p. 101
50-18	裁縫筥並ニ道具 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	島田佳矣、 木内半古ほか	一具	昭和3年（1928）	p. 102
50-19	化粧筥並ニ道具 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	島田佳矣、 岩城倉之助ほか	一具	昭和3年（1928）	p. 103
50-20	洋式文房具 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	島田佳矣ほか	一具	昭和3年（1928）	p. 104
50-21	蒔絵手筥　菊花に鶺鴒文様 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	辻村松華	一合	昭和3年（1928）	p. 104
50-22	染織繍組器褥 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	山鹿清華	一式のうち	昭和3年（1928）	p. 105
50-23	二曲御屏風　各種工芸扇面色紙 （鶴桐文様蒔絵飾棚附属棚飾品のうち）	島田佳矣ほか	二曲一双	昭和3年（1928）	p. 106-109
51	太陽の暦石の文鎮		一点	1923頃	p. 110
52	宝相華文胡蘆瓶		一対	中国・明時代（15～16世紀）	p. 110
53	切子硝子花瓶	ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場	一点	1923頃	p. 111
54	赤切子硝子花盛器	ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場、ユベール・フアルジュ（デザイン）	一点	1923頃	p. 111

55	玻璃飾壷	オレフォッシュ・ガラス工場、エードヴァルド・ハルド（デザイン）	一点	1923頃	p. 112
56	菊銀杏文花瓶	国立セーブル製陶所、C・ピアン（絵付デザイン）	一対	1908	p. 112
57	双鶴置物形ボンボニエール		一点		p. 113
58	菊花形鳳凰文ボンボニエール		一点		p. 113
59	朝陽鳴鳳之図	小室翠雲	六曲一双	大正14年（1925）	p. 114-115
60	鳳凰之図	結城素明	対幅	大正14年（1925）	p. 116
61	琵琶湖・富士図	山元春挙	対幅	大正14年（1925）	p. 117
62	智仁勇	山元春挙	対幅	大正14年（1925）	p. 118-119
63	ゴブラン織暖炉前衝立	国立ゴブラン製作所	一基	1918	p. 120

大正時代の御慶事と美術品制作

今回の展覧会では、大正時代、それも皇室御慶事に焦点をあて、その奉祝のために制作された美術品を通して、制作活動の様子、意匠や技術の在り方などを紹介するものである。わずか十五年の大正時代ではあるが、経済的には日露戦役後の国内の好景気、産業の発展を背景に、制度的には東京遷都以後、様々な政治制度、そして皇室の立場や制度が整い、軌道に乗った時代で、大正三年の第一次世界大戦勃発、七年からの米騒動などの事件も少なくはなかったが、人々は自由と発展の過渡期の中で、活気を帯びていた時代であったとも言える。

そうした大正時代、皇室は数々の御慶事に恵まれた。今回の展覧会では、その中でも大正天皇と三皇子に関わる御慶事を取り上げてその様子を紹介し、伝統的ながら華麗で工夫が凝らされた様々なお祝いの品を紹介している。これらは皇族間でやりとりされた品もあるが、その多くは献上によるものである。献上される品には、各地域の特産品も多く、装飾品として献上された書画、置物、花瓶などの美術品が一体どれくらいあったのか、その詳細を把握することは困難であるし、現存する品はそのほんの一部であろうと考えられる。とは言え、現存作品のその優秀性、また調査していくうちに分かり得てきたその他の制作品の様子からは、様々な興味深いことが看取される。今回は展示スペースの問題や作品の保存状態から、現存作品の総てを紹介しきれなかったが、それでも、それらの中から質の高い作品を特に選んで紹介したことで、御慶事のお祝いの品々を通して、大正時代の美術について、その意匠的特徴、作家の動向や制作活動についての一側面は十分に窺い知ることができよう。今後、調査をさらに進めていく中で、より一層、それぞれに焦点を絞って作品の紹介もできるのではないかと考えているが、今回はその概説的な企画として、大正時代をあらためて見直す一つの機会となればと思う。

大正天皇と御一家

大正天皇は、明治十二年（一八七九）八月三十一日、明治天皇の第三皇子としてご誕生。名を嘉仁（よしひと）、ご幼少時のご称号を明宮（はるのみや）といわれる。幼少の頃から病弱であったと言われ、その健康が懸念される中、明治二十二年十一月三日に立太子礼が行われた。三十三年五月十日、九条節子妃（貞明皇后）と御結婚、親王二十二歳、節子妃十七歳であった。この後、皇太子は次第に健康を回復され、地方への行啓に意欲的に臨まれた。九州に始まり、信越、北関東、近畿、山陰、さらに韓国、東北、北海道とほぼ全国にわたる行啓の中で、皇太子は多くの人々に接し、会話を交わされた。明治天皇がごく限られた人としか話さず、現人神のように感じられていたのとは異なり、皇太子時代の大正天皇のこうした様子は、人々に皇室に親しみを抱かせることとなった。

また、御結婚の後、翌三十四年四月二十九日には裕仁（ひろひと）親王（昭和天皇）がご誕生、さらに三十五年六月二十五日には第二皇子・雍仁（やすひと）親王（秩父宮）、三十八年一月三日には第三皇子・宣仁（のぶひと）親王（高松宮）がご誕生になった。妃殿下や皇子との時間も大切になさり、子煩悩であったとも言われている。天皇に即位されて後の大正四年十二月二日には、第四皇子・崇仁（たかひと）親王（三笠宮）がご誕生になり、四人の皇子に恵まれた天皇であった。

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御。直ちに新しい年号が「大正」と定められ、皇位につかれた大正天皇は、大正四年十一月十日に即位の礼を行われた。しかし、間もなく再び体調を崩されるようになり、十年十月には宮内省から病状の悪化を発表。御外遊から戻られた裕仁親王が摂政となられて天皇の政務を代行した。その後、沼津や葉山の御用邸で御静養されたが病状は回復せず、大正十五年十二月二十五日、崩御。四十八歳であった。

貞明皇后は、明治十七年六月二十五日、五摂家の家柄、公爵九条道孝の四女としてご誕生、名を節子（さだこ）といわれる。生後七日目に、多摩郡高円寺村の豪農・大河原家に里子に出され、約四年間、そこで伸び伸びと元気に過ごされた。九条家に戻って後、華族女学校に入学、才知に優れ、明るい性格はクラスの人気者となったという。嘉仁親王の妃となることが内定したのは三十二年、そして翌年の御結婚を迎えた。

結婚後は、夫君に良く尽くされ、夫婦仲は睦まじかったという。様々なことへの配慮が行き届く方で、親王方への細かな心配りは、様々な逸話から窺えるが、国民のためにも、救癩、養蚕、燈台員の援護などを中心に、諸事業に力を尽くされた。そして、昭和に入って皇太后となられて後も、気丈で積極的な人柄は変わることなく、皇太后という立場で皇室を支えられた。昭和二十六年五月十七日、狭心症にての突然の崩御、六十七歳であった。

こうした大正天皇御夫妻の間に誕生された四人の親王は、それぞれにご聡明で、兄弟仲も良く、互いに御自分の立場で様々な方面に尽くされた。またそれぞれに海外への外遊、留学を経験され、見聞を広げられ、国際的な視野も養われた。

大正天皇とその御一家が現在の皇室、そしてわが国に残されたものは決して少なくない。この時期の美術品制作活動にもその一面がある。とりわけ、貞明皇后の熱心な度重なる展覧会への行啓は、作家達の意欲を高めた。人々が親しみを抱き始めた天皇と皇后、



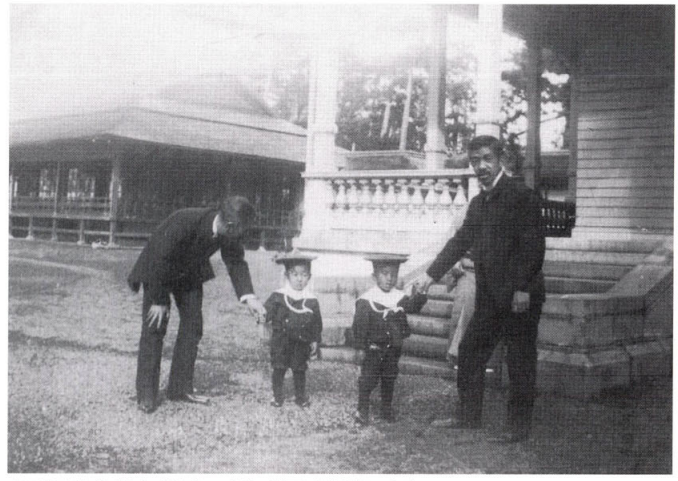
大正天皇



貞明皇后



貞明皇后と裕仁親王、雍仁親王、宣仁親王（大正14年5月）



大正天皇と裕仁親王、雍仁親王（明治37年）

そしてたくましい皇子方の御慶事に対して、祝意を込めた美術品の制作は、自然と作家達も意気込み、優品を生んだのである。

御慶事の品に見る美術品の様相

大正時代の美術界は、西洋の影響と日本の伝統との間で、多くの作家がそれぞれにその在り方を主張して様々な作風を示し、多彩な展開を繰り広げた。モダニズム、個人主義、リアリズム、アール・デコ、新南画や新古典主義、そして大正ロマンなど、この時期の美術の多様さは、こうした様々な言葉が用いられることにも表れていよう。そうした時代にあって、今回の展覧会で紹介する品々は、皇室御慶事という特殊な制作目的を持っている。その特殊性により、意匠には伝統性が強く要求され、制作者はむしろ意匠を制約されているのである。しかし、その制約された意匠の中で、独自の作風を活かして創造性が看取される作品、高い技術力を発揮した作品が生まれている。こうした点には、あまりこれまで評価されてこなかったこの時代の美術の一側面も窺えよう。明治期に活躍した作家から、次第に世代交代が始まり、絵画、工芸のいずれも意欲溢れる新しい作家たちが活躍し始める時期である。

今回の展覧会で紹介した作品をこれまでに調査する中で、大型の作品が多いということのほかに、多くの作家たちが関わって作り上げられた作品が多いことに、改めて感心させられた。これはいわゆる工業生産的な単純な分業化ということではない。結集力、統合力の表現美である。意匠の図案を担当する者、技術力をいかしてそれぞれに制作を担当する者、それらを統合してまとめる者が、それぞれに大きな力を発揮して一つの作品を作り上げているのである。その最たる作品は、大正十三年の皇太子御結婚を記念して制作が企てられ、四年余りもの歳月を費やし、実に百三十名を越える作家が関わって完成した「御成婚奉祝献品　御飾棚及び御飾品」（図版番号49及び50）である。また「東京名勝図・萬歳楽図衝立」（図版番号14）はそれに類する大作であるし、当時を代表する画家たちの作品が集められた「瑞彩」をはじめとする各画帖も然りである。その他の作品でも、特に置物や花瓶については、複数の作家の共同制作であるものがあるだけでなく、またそれぞれに意匠を凝らした台が附属し、それを担当した別の作家がいた。これらは、台を含めて、一つの装飾品として制作されている。台も作品の重要な要素なのである。さらに絵画作品では、画帖も含めて、表具の裂や隅金具、収納の箱に及ぶまで、その装飾美が考慮されて制作されている。そうした総合美も、御慶事制作品の大きな特色であろう。

明治期以来、多くの博覧会、展覧会が開催されることによって、様々な作家たちが評価の場を得、チャンスを得た。また東京美術学校や京都市美術学校のような美術教育の場が広く門戸を開けて、才能ある者を受け入れ、育てたことも大きい。そして、こうした作家たちをまとめて、その製作を企画し指示した、全体のまとめ役、コーディネーターが活躍した。御慶事制作品について、その大きな役割を果たしたのが、東京美術学校の校長を長く務めた正木直彦（一八六二～一九四〇）である。正木は、その生涯を美術教育と美術行政に捧げ、また美術の識者としても幅広く活躍した。奈良県尋常中学校の校長を務めた後、帝国奈良博物館の学芸委員を経、文部大臣秘書官など、文部行政に携わり、第五代の東京美術学校長に就任、明治三十四年八月から昭和七年三月までの実に三十一年余りもの長い間、その任を務めた。今回の出品作に、東京美術学校に依嘱されて制作された作品が多いことも大きな特徴であるが、そこに正木が果たした役割は多大なものがあった（東京美術学校への依嘱制作についての詳細は、次頁以下の別稿を参照）。そして、意匠を担当した島田佳矣がその下で実際の制作にあたって取りまとめをしたが、他にも渡辺香涯、神坂雪佳、千頭庸哉等、そうした意匠家の存在と活躍も、大正期のこうした作品制作の大きな特徴であろう。

もう一つ、今回の展覧会に際し注目しておきたいのは、御慶事という、日本の、そして皇室の伝統に重きをおいて制作せざるを得ない美術品の中にも、洗練された作家の感覚、技量の高さを見ることが出来るということである。

出品作の中で、その意外性に驚いたのは、小室翠雲の描いた「朝陽鳴鳳之図」という六曲一双の屏風である（図版番号59）。翠雲はこの時代を代表する南画の大家である。翠雲と言えば、墨画淡彩の情趣漂う画面を想像する（例えば32頁の画帖の一図）が、この屏風は鮮やかな着色画。しかし、右隻下部には、確かに「翠雲小室貞謹写」と記されている。画面の岩や霊芝には南画で培われた翠雲らしさも見られ、また鮮やかな色彩は、南蘋画も学んだということを考えれば頷けるところではあるが、落款印章や伝来が無ければ、誰もこれが翠雲による作品とは想像しないであろう。画題を依頼主から指定されたのか、翠雲が選んだものなのか、いずれにしても皇室の御慶事ならではの、翠雲の異色作例である。

また、山元春挙の「晴天鶴」（図版番号21）は、立太子礼の折の御題が画題となって制作された御下命品であるが、春挙が得意とした遠近感が実に効果的に用いられて、富士を中心に山と海の雄大な日本の風土を感じさせる構図となっている。それに加えて、日本画の伝統である大和絵を意識してであろうか、大和絵で用いられる群青による霞の存在を、上下の空と海にその一部の描写のように取り入れ、松の緑、富士の雪や波頭の白、朝陽の赤という大和絵の伝統的な色彩感をも取り入れ、しかし写実性を失わない、実に春挙の洗練された感覚や上手さが光る作品である。

皇室御慶事は、美術品の制作システムに変化を与え、多くの作家の個性と意欲を引き出したばかりでなく、美術品制作に関わる様々な作家たちの新たな一面を引き出した意味でも、大正期の美術界に与えた影響は少なくない。あらためて、祝いの美のその豪華さを楽しむと共に、作家たちの伝統の中での創造的な意匠や技術表現の工夫などを見直すことで、近代日本美術における皇室御慶事の意義深さを知ることができよう。

（太田彩／当館学芸室主任研究官）

東京美術学校の依嘱製作による品々

大正期は十五年という短い時代ではあったが、大礼をはじめ立太子礼や御結婚などの御慶事が続き、これを祝う数多くの美術品が製作されることとなった。当代の著名作家がこぞって製作に関与するなかで、大きな部分を担っていたのが東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部、以下美校に略す）である。

美校は、明治二十二年の開校後まもなくして美術教育の一環として生徒の実習を補うために、また学校経営の一助とするために、校外から依頼を受けて美術品製作を手がけるようになった。これらの依嘱製作事業は昭和十七年頃まで続けられ、主要なものだけでも四百六十件を数えるという。最も早い時期に行われたものとして著名なものは、現在も皇居前広場に聳える「楠公銅像」で、明治二十三年の別子銅山二百年祭を記念して、皇室への献上品として住友家が製作を美校へ依頼したものである。完成は明治三十三年のことであり、美校の教官の共同製作による一大事業であった。「楠公銅像」に始まる依嘱事業の初期の各作品が世に高い評価を受けたことで、以降、美校は様々な事業を展開させていくことになる。特に第五代校長正木直彦（明治三十四年八月～昭和七年三月在職）の時代には、事業の件数も増加し、その内容も幅広いものとなった。宮内省から初めて直接に美校へ美術品製作が依嘱されたのは、大正三年である。これは大正四年十一月に行われた大礼を契機としており、翌年十一月の立太子礼に際しても重要な品が依嘱されている。宮内省からの依嘱はこの後、昭和七年頃まで続くこととなる。美校が受けた事業を依嘱者別にみると、官公庁およびその付属機関が依嘱した百五十四件のうち、宮内省の依嘱が最も多く、五十四件を数えるという。その件数や内容の規模からしても、大正から昭和初期にかけての美校の依嘱製作は、皇室の御慶事に関連した事業が主要な位置にあったことがうかがえる。当時、美校の製品はその価格や技術の面で信用度が高く、各方面から数多くの依嘱を請け負っており、宮内省もまた、この時期、大礼で用いる調度品や皇族方が交わされたお祝いの品、外部への御下賜品など、主要な美術品製作を美校に頼っていたのである。外部からの献上品製作を含め、これらの皇室に関連した依嘱事業の多くは正木校長が自ら監督し、その采配の下に進められたことが、正木の記した『十三松堂日記』（昭和四十年、中央公論美術出版）から読み取る事が出来る。そこには、依嘱先とのやりとりや作品内容の決定から製作担当者の割り振り、意匠の細部変更まで、正木が製作に深く関わっていたことが記されている。昭和七年に正木が退官した後、宮内省からの依嘱が皆無になった事実からも、宮内省との関係において正木の存在が大きかった事がうかがえよう。今回の展覧会では、御慶事を奉祝して外部から献上された品のほか、宮内省が製作を依頼したものも含めて、美校の依嘱製作による作品を十三件紹介している。同校の教官が個々に担当した作品も多いが、校内ばかりでなく外部の作家にも製作を依頼して絵画や彫刻、工芸の各分野を多彩に組み合わせた、大掛かりな作品をいくつも生み出している。以下、展覧会の内容に沿って、具体的な作例をいくつか紹介する。

大正四年に行われた大礼に際し、宮内省東宮職から依嘱された作品として「双鶴置物」（図版番号8）がある。本作は皇太子（昭和天皇）から大正天皇へ贈られた。漆塗りの洲浜台の上に、銀製の双鶴が寄り添うもので、こうした置物としては大型な作品である。作者として彫金家で大正二年に帝室技芸員に任命された塚田秀鏡と、鍛金家黒川義勝の名前が記される。塚田、黒川はともに美校の教官ではないが、宮内省から美校へ製作が依嘱された後、正木校長が塚田らにさらに製作を依頼したものである。美校の依嘱製作ではこのように校外へさらに外注した例も数多く見受けられ、実際の製作は校内だけではなく、校外の関係者にも拡げられていた。大礼に際しては、大饗の出席者へ賜物として挿華やボンボニエールが配られるが、大正大礼の折には美校の依嘱製作によって製作されたものが含まれている。数が多いため、実際の製作は校外の貴金属商等に外注されたと考えられるが、ボンボニエールのうち入日籠形のもの（図版番号2）は、美校の依嘱製作の関係資料に写真が残されており、意匠考案には美校の教官が関与していたと考えられる。

また、大礼の折の外部からの献上品として「鳳置物」（図版番号6）がある。これは華族会から美校が依嘱を受け、当時、美校の教授であった二代海野美盛が製作を担当した。完成は大正五年七月のことである。作品の伝来などによれば、献上当時は、鳳と鸞との対で製作され、鳳は大正天皇に鸞は貞明皇后に献上された。現在、鸞は所在不明で鳳のみが当館に引き継がれている。蝋形鋳造した部材に彫刻や象嵌を施し、ネジ固定で最終的に組み上げられた作品で、尾羽に孔雀石を嵌め、色金を象嵌する等、色彩豊かに仕上げられている。海野の自筆による説明書によれば、十五名がこの製作に関わったという。鋳物に彫金を施す手法は製作を率いた海野の最も得意としたものであった。

大礼に引き続いて翌年行われた立太子礼に際しても、宮内省東宮職から書棚、料紙箱、硯箱の製作が依嘱された。これは皇太子からの贈進品として製作された品である。このうち「蓬萊雲鶴蒔絵書棚」（図版番号20）が当館に伝えられている。この棚の形式や文様は正倉院宝物の中から範を得ており、棚の表面には正倉院宝物では金銀泥絵で描かれた文様を

アレンジして黒漆地に研出蒔絵で表現し、棚の内部には桜楓樹の文様を螺鈿や平文などの漆芸技法で表すなど、古美術の研究成果を反映させた新しい試みが示されている。意匠の素案は大村西崖、図案は吉川霊華と渡辺香涯による。実際の製作を主に担当したのは六角紫水である。六角は明治三十一年の美校騒動により助教授の立場を辞して岡倉天心とともに美校を去っていたが、宮内省からこの依嘱製作を受けた大正五年十月に美校の嘱託（調漆担当）となっており、おそらくはこの棚の製作を担当したことが、六角が美校に戻る契機となったのではないかと考えられる。

この他、大正期に宮内省から美校へ依嘱された美術品製作のなかで、高村光雲が担当した作品が注目される。高村は、日本近代彫刻の祖として大きな足跡を残した彫刻家であり、美校においては開校後まもなく彫刻科雇に、明治二十三年には教授となって、大正十五年に退官するまでの永きにわたり、同校で後進の指導にあたった。特に明治二十年代に動物を主題に木彫による写実表現に取り組んだことが知られ、これらの動物彫刻に見られる近代的表現に高い評価が与えられている。同二十六年にシカゴ万国博覧会に出品された「老猿」は高村の代表作として名高い。今回紹介している三点の作品は、いずれも皇族方のお祝いの品として製作されたものである。「鹿置物」（図版番号28）は皇太子の成年式の折に、また「猿置物」（図版番号36）は雍仁親王の成年式に際して、それぞれ皇太子、雍仁親王から贈られた品である。「松樹鷹置物」（図版番号39）は皇太子御結婚の折にお祝いの品として大正天皇貞明皇后から御拝領された品である。これら三点は、吉祥の動物を主題としており、高村の動物彫刻に対する高い評価に基づき、宮内省から依頼された作品と考えられる。モデル観察による写実表現がここにも見て取る事ができ、高村の大正期の意欲作として位置づけられよう。

次にこれら美校の依嘱製作事業のなかでも特に重要な作品である、美校の教官を中心とした当時の著名作家たちによる合作を紹介する。皇室への献上品として、作家を数多く集めた画帖や屏風などの合作が製作された例として明治期の作品を見ると、明治二十七年の大婚二十五年の献上品にいくつか認められるが、各作品に参加した作家は例えば日本画のみ、あるいは金工のみなど、ひとつの分野に限られる。これに対して美校の合作は、さまざまな材質、技法を包括した作品であり、その製作には各分野を代表する作家らが参加していることに特色がある。このように大がかりな合作の場合、その全体の構想を練り、各部の意匠を考案し、製作を総括した意匠考案者または監修者の存在は大きい。美校の場合、正木校長との連携のもとにこれらの作品を生み出した意匠考案者として二人の教官の名前が挙げられる。一人は島田佳矣（一八七〇～一九六二）、もう一人は渡辺香涯（一八七四～一九六一）である。まず島田は、明治二十二年に美校に入学、図案の分野で唯一帝室技芸員に任命された岸光景に個人的に教えを受け、古美術の研究を深めた。同二十七年に絵画科を卒業、一時は美校を離れたが、同三十五年に図案科教授として迎えられた。その後、昭和七年まで三十年の間、図案指導にあたるとともに、さまざまな作品の図案を手がけた。島田の意匠は一貫して伝統的な和様を基本としており、全体に調和の取れた穏やかな構成にまとめていることに特徴がある。島田が手がけた合作の意匠として最も早い時期の作例に、美校が製作し明治三十七年に完成、セントルイス万国博覧会に出品された「飾棚」、その翌年に製作された十八名の作家による作品を貼り交ぜた小屏風「綵観」（東京芸術大学大学美術館所蔵）がある。「綵観」の製作に参加した作家はいずれも帝室技芸員あるいはその候補者、または美校の教官である。その後、明治四十年に華族会から献上された「桑木地飾棚」（挿図1）もまた、美校が依嘱製作した作品である。当時の帝室技芸員、全二十五名による合作で、その意匠は岸光景と島田の共同の考案による。こうした明治期の著名作家による合作の成果が、大正期の献上作品の製作につなげられていくようである。

大正期に島田が意匠を手がけた作品として、まずは大礼の折に東京市から献上された「東京名勝図・萬歳楽図衝立」（図版番号15）がある。これは表面中央に東京市の当時の地図を嵌め、その周囲の木地に東京市在住の彫刻家、工芸家によるさまざまな素材と技法による東京市十五区の扇面名勝図を嵌入したもので、その裏面は全面に金無地の綴織地に萬歳楽の舞姿が刺繍で表されている。扇面名勝図の図案が一部、東京芸術大学に伝えられている（『資料は繋ぐ-名作と下絵・連作』芸大コレクション展、東京芸術大学大学美術館、二〇〇五年）。各図案には、製作担当者自身による下図と思われるものが含まれる一方、製作者ではなく下図のみ関わった人物の名前も記されている。このことからも、島田は全体の構想に関わり、各扇面の図案は各担当者にも一部任されていたことが分かる。

そして島田の代表作が大正十三年皇太子御結婚の折に文武官一同から献上された「御飾棚」「御飾品」および「御屏風」（図版番号49・50）である。今回、この全容を当館では初めて実作品で紹介している。東京芸術大学に残る依嘱関係資料では、飾棚は正木校長自身が依嘱者となり、美校へ製作を依嘱している。棚飾品と屏風は依嘱関係資料では美校の依嘱製作ではないが、全体の構成、棚飾品の各部意匠は島田による。御結婚の前年十二月に献上内容が決定してから昭和三年月の完成までおよそ五年の歳月を費やし、実に百三十五名にものぼる作家が関わった作品である。この一大事業については、『御成婚奉祝献品図録』（昭和四年）序文の一文「当代我邦美術工芸の最高品を製作奉献せんことを念としたり」にその意図が集約されている（125-128頁の資料参照）。飾棚は緻密な文様のもとに、蒔絵螺鈿が施され、その大きさも他に例をみない規模を誇るものである。各棚飾品は、同じ作家の他の作例と比べて献上を強く意識した伝統的な意匠でまとめられているが、全てが飾り付けられた際には、作品として全体が完結しており、日本近代工芸の中でも、紛れもなくひとつの頂点として位置づけられよう。

もう一人の図案担当者渡辺は、島田が大作を手がける一方で、宮内省関連の様々な依嘱製作を手がけていたことが依嘱関係資料から確認される。渡辺は明治三十年に美校を卒業



（挿図1）「桑木地飾棚」　明治40年　当館蔵



（挿図2）「白鹿置物」　大正15年　当館蔵

し、大正六年から美校の嘱託となり同九年から昭和八年まで教授として工芸部の絵画授業を担当した。当館の作品の中でも、「蓬莱雲鶴蒔絵書棚」（図版番号20）の意匠、東西の画壇から七十三名が参加した画帖「瑞彩」（図版番号45）の装丁と外箱の意匠、大正十四年の大婚二十五年に際して三井家から献上された「白鹿置物」（挿図2）、昭和三年に行われた大礼の洲浜と挿華の意匠を担当している。特に画帖「瑞彩」については、意匠ばかりでなく、その見返しにほどこされた砂子や切箔による装飾を自らが行っている。また、大正十四年の大婚二十五年の折には文武官一同より、画帖（四冊）と画巻（四巻）およびこれを飾る棚が一対、これに付属の置物、文房具が製作された。当時の姿は、現在では昭和四年に刊行された『大婚二十五年奉祝献品図録』（東京美術学校文庫）においてのみ確認されるだけだが（121頁参照）、この意匠にもまた、渡辺が関わっていた事が『十三松堂日記』に示唆されている。

　このように島田、渡辺の二人の図案を中心に数多くの献上品が製作された。これらは慶祝の品であるため、総じて吉祥意の題材が取り上げられ、伝統性を重視した堅実な意匠により、調和のとれた構成にまとめられているのが特徴である。特に、作家たちがそれぞれ得意とする手法による作品を集めて合作とした画帖や屏風、棚と棚飾品などは、技巧が尽くされ、その完成度は非常に高い。これらの合作事業の規模として頂点にあるものが大正十三年の皇太子御結婚の奉祝献上の「御飾棚」「御飾品」と「御屏風」であり、以降この規模の合作が製作されることはなかった。美校は美術教育の機関でありながら、その依嘱製作事業によって大正から昭和初期まで皇室の御慶事に関わることで、博覧会や官展などの展覧会出品作とはまた別に位置づけられる、合作という記念碑的な作品を生み出したのである。

（五味聖／当館学芸室研究員）

大正4年　大礼（即位の礼）

明治四十五年七月三十日、明治天皇が崩御され、三十二歳の皇太子嘉仁（よしひと）親王が践祚されて「大正」と改元、大正時代が幕開けした。大正の即位の礼と大嘗祭は、当初、諒闇明けの翌二年秋に「大礼使」が設置されて準備が始まり、三年秋に予定された。しかし、その年の四月に昭憲皇太后が崩御されたため、その諒闇を待って、四年春に改めて準備が始まり、十一月十日に即位の礼が挙行された。そして同月十四日に大嘗祭、十六日及び十七日に大饗が行われている。これら一連の儀式は、明治期に定められた登極令に従って、京都で行われた。そのため、大正天皇は、十一月六日、御召列車で東京駅を御出発、名古屋で一泊の後、翌七日に京都に御着。御召列車が停車した各駅、そして通過の線路沿いには、多くの人々が立ち並び、奉迎したという。京都御所で大嘗祭を終えた天皇は、続いて伊勢神宮、神武天皇陵などを参拝され、大饗等の二十日余りに及ぶ諸行事をこなされて東京へ戻られた。

この天皇の御即位の儀式は、国にとっても、皇室にとっても、最大、最高の盛典、御慶事である。大正天皇の大礼にあたり、日本国中が慶びに沸いたという。各地には奉祝のためのモニュメント等の造り物やイルミネーションが飾られた。また、都市部では華やかな装飾の花電車が走り、仮装して市中を練り歩く者、祝杯を挙げて音楽に歌に興じる者が絶えなかったという。各地で提灯行列や旗行列が見られ、奉祝の意が表された。そして、十一月十日に行われた紫宸殿の儀で、高御座に登座された天皇が勅語を朗読された後、内閣総理大臣・大隈重信が国民を代表して寿詞を奏上する。「帝国臣民ニ代リ、恭シク大礼ヲ賀シ、千万歳ノ寿ヲ上ツル」と締めくくり、午後三時三十分に万歳を三唱。この時刻、全国で一斉に万歳三唱、花火が上がり、汽船や工場の汽笛、寺院の鐘などが一斉に鳴らされたという。まさに、国を挙げてのお祝いであった。

こうした大礼にあたり、その奉祝の意を込めて制作、献上される美術工芸品は、相当数にのぼる。それらの中には、皇族間で贈られる記念の品のほか、政府高官や旧大名の家柄等の高位の人々による品、財閥をはじめとした会社や組織、団体等からの品、道府県や市からの品、そして様々な個人からの献上の品がある。献上の品々は、『大礼記録』（内閣書記官室記録課、大正八年三月）だけでも、東京府の一二三件を筆頭に全国各道府県より一五五四件と記録されている。（ただし、これらの中には特産の食料品や生産品も含まれているので、美術工芸品になるとその数は少なくなる。）宮内省は、これら献上品の受付を赤坂離宮（現迎賓館）にて行い、大礼後の十二月二十二日には、大正天皇が赤坂離宮内の四室の部屋に並べられた献上品の数々をご覧になった。その中の主な品には、次のようなものが含まれていた。（表記は前掲『大礼記録』のままとし、内容を抜粋）

①内閣、鉄道院、会計検査院等高等官竝ニ判任官代
表内閣総理大臣・大隈重信より
卓子（天皇陛下へ）一脚、机（皇后陛下へ）一脚

②麝香間祇候総代　公爵・徳川家達より
金蒔絵硯箱（天皇陛下へ）一箇、黒塗蒔絵御書棚（皇后陛下へ）一箇

③錦鶏間祇候一同より
錦織蜀甲模様卓被（天皇陛下、皇后陛下へ）各一枚

④外務次官幣原喜重郎外二百六十五名より
青銅製丹頂鶴　一番

⑤内務省及造神宮使廳等　内務大臣・一木喜徳郎より
銃劔（天皇陛下へ）一口、棚（皇后陛下へ）一脚

⑥在職官吏一同総代　大蔵大臣・武富時敏より
刺繍二曲屏風　一雙

⑦陸軍代表者　陸軍大臣・岡市之助より
金装金螺太刀　一口

⑧司法省所管官吏及待遇官吏竝附属吏一同より
刀　一振

⑨文部本省竝ニ直轄各部高等官判任官一同総代　文部次官・福原鐐二郎より
蒔絵菊模様御文臺　一脚、同　御料紙函　一合、
同　御硯箱　一合

⑩農商務省竝ニ所管官衙職員総代農商務次官　上山萬之助
銀製置物　一箇

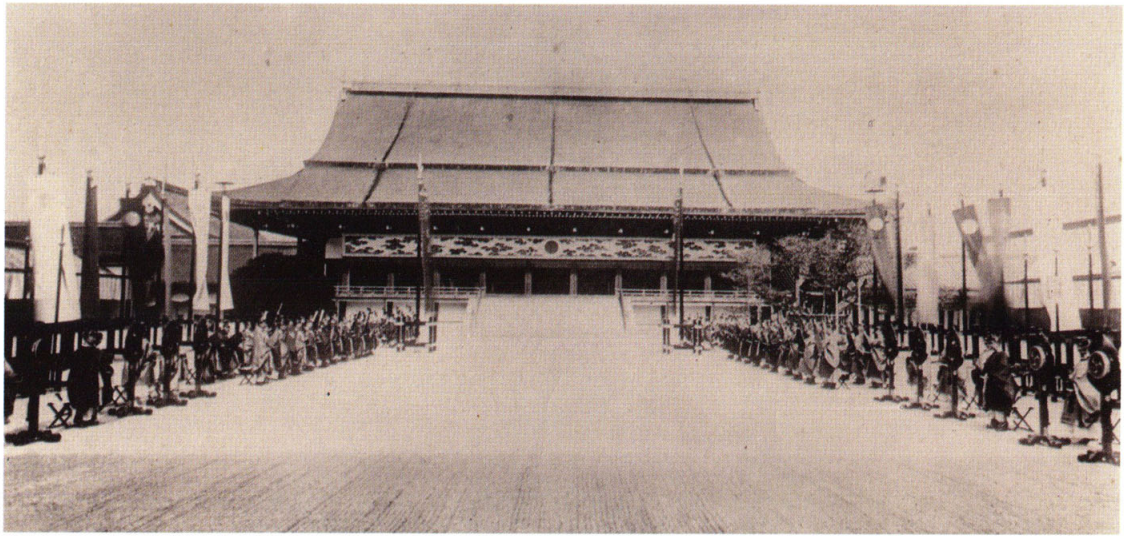
⑪貴族院議員総代　貴族院議長・徳川家達外一名
萬歳楽置物　銅鋳造（天皇陛下へ）一箇、久米舞置物　木彫彩色（皇后陛下へ）一箇

⑫衆議院議員総代　衆議院議長・島田三郎外一名
朧銀製菊慈童置物（両陛下へ）一筒

これらの内、⑧（図版番号5）と⑪の内の一点（図版番号12）は現存し、今回の展覧会で紹介している。この二点の作品を通して考えても、それぞれの作品が依頼主の祝意の想いに応え、作家が丹誠込めて仕上げた力作であったと推察されよう。

宮城前を京都に向けて出発される





即位の礼当日の紫宸殿の様子



饗宴場



大正天皇の御座



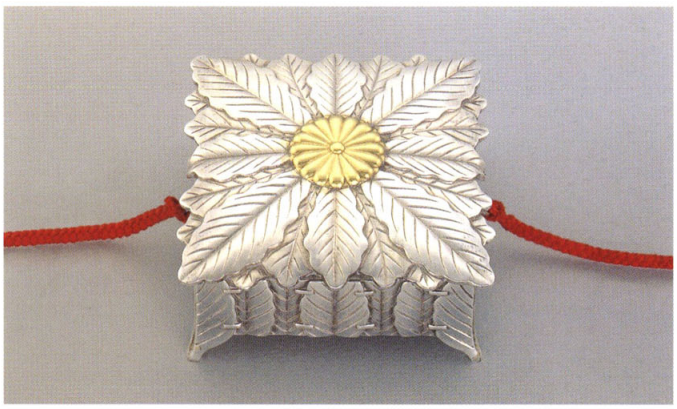
2　入目籠形ボンボニエール
銀製　径6.6、高2.9　大饗第1日目　　<展示　第1期-2>



1　八稜鏡形鳳凰文ボンボニエール
銀製　径6.4、高2.5　　<展示　第1期-1>



4　挿華（桜・橘）
銀製　高20.5、幅11.5　　<展示　第1期-4>



3　柏葉筥形ボンボニエール
銀製　6.1×6.05、高2.9　大饗第2日目　　<展示　第1期-3>

皇室の御慶事の引き出物として、明治期以来、定着した銀製ボンボニエールは、御即位の諸儀式においても、すでになくてはならない重要な品であった。また、挿華は洲浜と共に、平安時代以来、大嘗祭において飾られてきたもので、現在に至る形式のものは、江戸時代半ばの桜町天皇の時期に再興されたものである。これら、挿華と洲浜の制作は、大正、昭和、平成と、東京美術学校、そして東京芸術大学が依嘱を受けて制作している。

大正期の洲浜と挿華は、当時、東京美術学校の嘱託であった平田宗幸（1851～1920）が担当し、銀製洲浜2基と、この洲浜に飾り置く銀製松桐挿華4本が制作された。同時に、他の皇族への賜物用と考えられる銀製桜橘合作挿華（図版番号4）を54本、また銀製網代目籠形菓子器（図版番号2）436個が、この年に同校に依嘱制作されている。

同上部分

5　御物　金装螺鈿御飾太刀拵

島田佳矣（意匠）、清水亀蔵（金具彫金）ほか　1腰　大正9年（1920）
金ほか、彫金、木製漆塗、蒔絵、螺鈿　全長101.5

司法省所管官員一同より。刀身は子爵本多忠敬旧蔵の備前長船真永（嘉元三年銘）の太刀が選ばれた。正倉院の御剣等を参照して意匠が考案されている。当初、金具の彫金は岡部覚弥（1873～1918）が担当する予定であったが、制作途中に岡部が没したため清水亀蔵（南山、1875～1948）が引き継ぐこととなった。本作制作の功績により、清水は東京美術学校教授に迎えられることとなる。　<展示　第1期-5>



6　鳳置物

海野美盛（二代）　1点　大正5年（1916）
銀ほか、彫金　（像）38.5×51.5×70.5、（台）48.5×48.5×13.1

華族会一同より。東京美術学校への依嘱制作品で、当初は大正天皇への鳳と、貞明皇后への鸞の一対で製作され、献上された。鳳本体は36個のパーツに分けて蝋型鋳造し、海野美盛の監督のもと15名が分担して彫金した。　<展示　第1期-6>

7　双鶏置物

戸島光孚　1点　大正5年（1916）
木製漆塗、蒔絵
（像）39.6×83.5×59.5、（台）53.7×97.4×51.0

堂上華族より。蒔絵は、京都の蒔絵師戸島光孚（1882～1956）が担当した。下図は山元春挙、彫刻は国安稲香の制作による。　<展示　第1期-8>





8　双鶴置物

塚田秀鏡・黒川義勝　1点　大正4年（1915）
銀ほか、鍛造、彫金
鶴（大）19.2×49.5×82.8、鶴（小）17.0×47.5×51.7

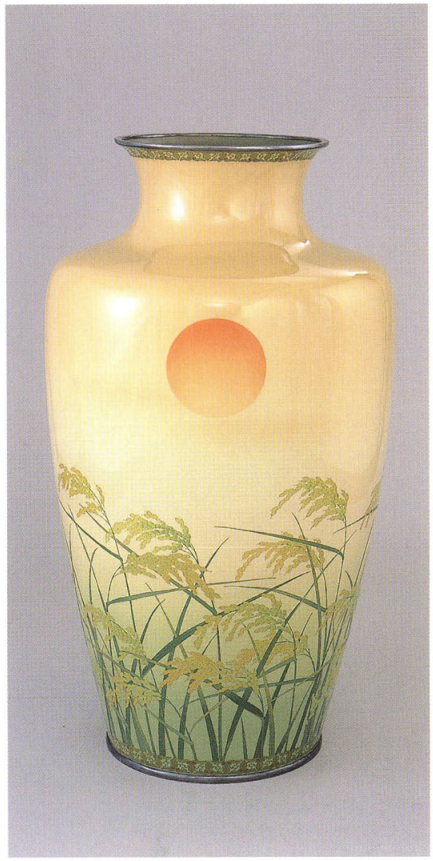
東宮職から東京美術学校へ依嘱されたもので、皇太子（昭和天皇）から大正天皇に贈られた品。彫金を担当した帝室技芸員・塚田秀鏡（1848～1918）のなかでも大作のうちの一つに数えられる。　<展示　第1期-7>

9　斎田豊作図花瓶

一対　大正4年（1915）
七宝　各D.36.0、H.61.0

愛知県献上。大正大礼の大嘗祭の悠紀地方斎田が、愛知県碧海郡六ッ美村（現、岡崎市）の水田であったことに因む作品である。　<展示　第1期-11>







10　丹鳳朝陽図花瓶

海野勝珉　一対　大正4年（1915）
銀ほか、彫金　各D.20.7、H.41.0

古くから瑞祥を示す伝統的な図様、朝陽に鳳凰、桐を表した品格の高い作品である。明治期彫金界の第一人者であり、帝室技芸員としても活躍した海野勝珉（1844～1915）の最晩年の力作である。男爵藤田平太郎よりの献上。

<展示　第1期-9>



11　鳳凰図花瓶

海野美盛（二代）・海野 清　一対　大正6年（1917）
銀ほか、彫金　各D.19.3、H.41.2

当時は正倉院御物と呼ばれ、皇室の、そしてわが国の美術工芸品の中で最も評価の高かった正倉院宝物の意匠をアレンジして、大礼奉祝品に相応しく格調高い品となっている。制作者の海野美盛（二代、1864～1919）は勝珉の甥、海野清（1884～1956）は勝珉の四男にあたる。公爵島津忠重よりの献上品。　<展示　第1期-10>

コラム

大正期御慶事の献上品に見られる彫金家の変遷

大正期に入ると彫金の世界では主要作家の世代交代が進行する。実際に当時の献上品を確認していくだけでも、その変遷の一端を垣間見ることができる。まず、大正四年（一九一五）の大礼に際して、早くもその変化が現れ始める。本展出品作のなかでは、海野勝珉「丹鳳朝陽図花瓶」（図版番号10）、塚田秀鏡・黒川義勝「双鶴置物」（図版番号8）、海野美盛（二代）「鳳置物」（図版番号6）など、明治期に活躍した名工の優品、大作が筆頭に挙げられる。これらの作品には、明治という時代の包含する厳めしさ、華々しさがまだ濃厚に残っており、大正大礼の時点では、工芸作品は未だ明治の直接的な延長に位置していた。他方、線彫を主体として鳳凰を洗練された図様で表した、海野美盛（二代）「鳳凰図花瓶」（図版番号11）には、共同製作者として海野勝珉の四男であった海野清の名前が見られ、その後の彫金界を担う新しい世代が登場していることが注目される。また、「東京名勝図・萬歳楽図衝立」（図版番号14）に嵌入された各種工芸家による扇面でも、彫金では香川勝廣、塚田秀鏡のほかに、病没した海野勝珉の代役で仕事を引き継いだ海野清が製作に参加している。高肉象嵌による古色蒼然とした重厚さをそなえた香川と塚田の作品に比べ、ここでも均質な線彫により平滑で抑制された表現を見せる海野の作風が対照的で、新旧両者が自らの彫金技術の特徴を競い合う格好となった。なお、全十五名の扇面製作者のうち彫金家の三名は最も多く、製作当時、他の工芸分野に比べて彫金の位置付けが高かったことが理解される。

大礼に際して司法省所管官員一同より献上された「金装螺鈿御飾太刀拵」（図版番号5）は、清水南山（本名・亀蔵）というそれまで中央の工芸界では無名に近かった一人の彫金家の運命を大きく変えることとなった作品である。この太刀拵の製作は、もともと彫金部分を岡部覚弥が担当する予定であったが、岡部が急死したことを受けて、東京美術学校校長正木直彦の英断で清水に白羽の矢が立った。清水が筆写した完成図に付属する、正木執筆の「金荘螺鈿御飾太刀製作記事」（広島県立美術館所蔵）によれば、本作は大正四年八月に設計が着手され、同八年十月に起工、同九年一月に完成した。刀身は子爵本多忠敬の旧蔵品で、嘉元三年（一三〇五）の銘がある備前長船真長の作であった。拵の意匠設計は同校教授島田佳矣が担当し、正倉院宝物の御剣、広橋家、菊亭家、九条家に伝来する数種の飾太刀など、いくつかの過去の名作が参酌された。高彫がほどこされた菊唐草文様の金具は清水の手になるもので、堅実な彫技から生み出された格調高い出来映えを示す。本作の業績を認められて、清水は東京美術学校教授に迎えられ、昭和九年（一九三四）には彫金家としては最後の帝室技芸員に選ばれた。また、昭和三年の昭和大礼の際に使用された御剣の太刀拵の製作でも清水は再び腕を振るい、名実ともに彫金界の第一人者となった。

大正大礼に際して、前記の清水南山の太刀拵と同時期に製作されたのが、内務省および内務省所管府県官公吏一同より献上された「太刀拵」（挿図1）である。こちらは『御大礼奉祝献上品図録』（内務省秘書課発行、大正九年）によれば、大正五年三月より意匠設計に着手、同六年一月から製作を開始し、同八年十二月に完成した。意匠設計は荻野仲三郎が顧問を務め、井上清が監督した。彫金は東京美術学校出身の佐藤美崇と鈴木美彦が担当しており、桐唐草鳳凰文様の彫刻がほどこされた。刀身は鎌倉時代の粟田口国安の作、拵の形式は金装の御所作兵庫鎖太刀であった。近代の刀装製作といえば、明治天皇の御下命による加納夏雄、香川勝廣の作例が傑出したものとして知られるが（当館第四十一回展図録『明治の彫金―海野勝珉とその周辺』を参照）、廃刀令以後数十年の年月を経てすでに刀装の需要が大幅に減少していた時代に、このような記念の大作を依頼された彫金家の精神的重圧は想像を絶するものであっただろう。しかし、その過酷なプレッシャーを克服して、彼らは大正時代を代表する太刀拵を完成させたのである。

大正五年の立太子礼には海野勝珉「山水図花瓶」（図版番号24）が献上されたが、海野はすでにその前年に他界していたので、実際にはそれ以前の製作品が選ばれている。この一事が象徴するように、大正期前半は明治期に活躍した名工が次々と姿を消してゆく、時代の大きな節目であった。明治後期における彫金界の指導者的存在であった海野勝珉は大正四年に、そして香川勝廣が同六年、その後を追うように塚田秀鏡が同七年に相次いで没した。前述「金装螺鈿御飾太刀拵」（図版番号5）の製作を担当するはずであった岡部覚弥は、本来ならば勝珉らの後継者となり彫金界を担う立場を嘱望されていたが、同七年の四十六歳での急逝はあまりにも突然のことであった。残る最後の大家であった海野美盛（二代）も翌八年に亡くなり、海外の万国博覧会を舞台に日本の彫金技術の高さをアピールした巨匠たちの時代は幕を閉じた。それ以降、大正期後半に挙行された御慶事の献上品は次の世代の彫金家たちが製作することになる。

そのほか、当館所蔵作品のうち本展出品作以外で大

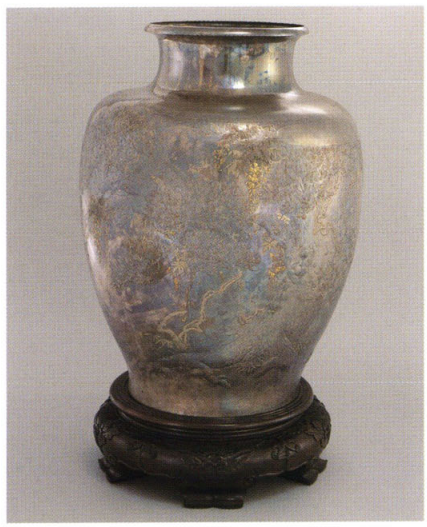
正期の御慶事に際して献上された彫金作品として、大正十三年の皇太子御結婚の際に宮内省高等官一同から献上された「置時計」（挿図2）、同十四年の大正天皇大婚二十五年に皇族方御一同より献上された「銀製大花瓶」（挿図3）がある。「置時計」は清水南山、「銀製大花瓶」は山口一照が、それぞれ彫金部分を担当した。清水は各部分の装飾で刀装製作で発揮した精緻な高彫の技術を示し、香川勝廣の弟子である山口は師譲りの豪壮な絵画的表現を花瓶上に展開し、明治の技を大正へと伝えている。



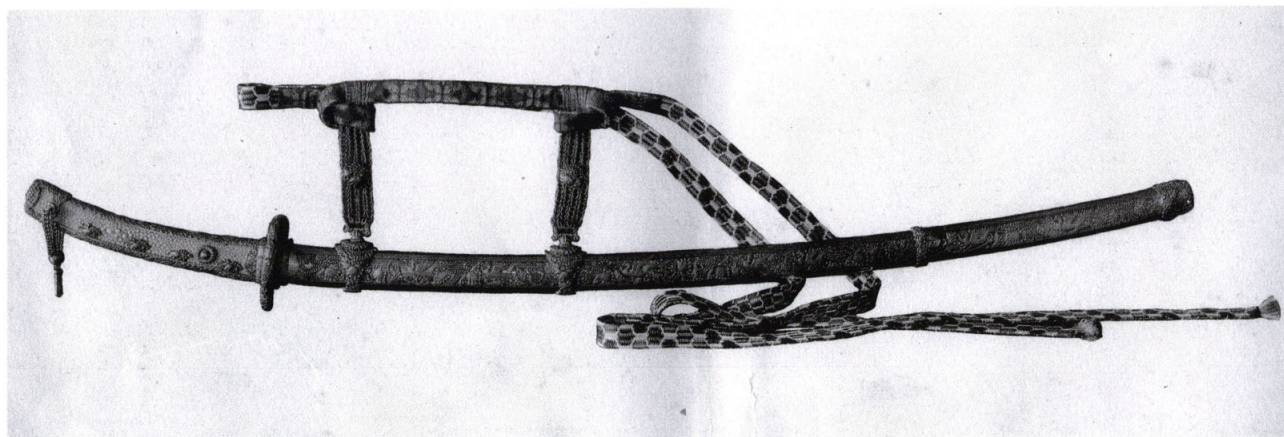
（挿図2）「置時計」清水南山、六角紫水ほか

最後に、大正期御慶事の献上品を掉尾を飾るものとして、大正十三年の皇太子御結婚、そして同十四年の大婚二十五年に製作された棚飾品は外せないものである（72～124頁を参照）。新しい世代の主要な彫金家が多数製作に参加しており、昭和の彫金へとつながる重要な作品である。棚飾品のなかには、海野清、伊藤正見、山川孝次、桂光春、船越春珉ら大正～昭和期に活躍した彫金家が含まれ、単独の作品ばかりでなく画冊の装飾金具などにも彫金が活かされている。皇太子御成婚の棚飾品には、前述した太刀拵を製作した清水南山、鈴木美彦の二名も、「彫金写真立　桜・菊」（図版番号49-12）で製作に加わっている。これらの作品には、大正大礼の献上品に見られた明治の大作主義の影響はもはやなく、昭和初期へかけて興った工芸製作の時代相の変化が反映されているのである。

（岡本）



（挿図3）「銀製大花瓶」山口一照



（挿図1）「太刀拵」佐藤美崇、鈴木美彦ほか（『御大礼奉祝献上品図録』より）



12　萬歳楽置物

高村光雲・山崎朝雲　1点　大正5年（1916）
ブロンズ、鋳造、（台）木製漆塗、蒔絵、螺鈿
（像）48.0×50.0×63.0、（台）57.0×74.0×15.0

鋳銘によれば、彫刻家・高村光雲（1852～1934）と山崎朝雲（1867～1954）の合作、鋳造は野上龍起（1865～1932）による。また蒔絵と螺鈿による華麗な台は、由木尾雪雄（1860～1929）の制作である。貴族院より献上された品であるが、当初は竹内久一による木彫彩色の久米舞置物が対として制作されていた。　<展示　第1期-12>

13　網代蔦蒔絵棚

大垣昌訓　1基　大正3年（1914）
木製漆塗、蒔絵、七宝　40.3×87.0×78.5

本作は、大正3年の東京大正博覧会に「都の秋蒔絵書棚」の名称で出品された作品で、翌年、大礼奉祝の品として、侯爵前田利爲より献上された。大垣昌訓（1865～1937）は金沢の出身、蒔絵を学び、各種の博覧会、展覧会に出品して活躍、宮内省関係の仕事も手掛けていた。

<展示　第1期-13>



全姿



表面

14　東京名勝図・萬歳楽図衝立

島田佳矣（図案）ほか（別記参照）　1基　大正4年（1915）
木製ほか（別記参照）　総60.0×285.0×216.0

東京市の依嘱によって東京美術学校で制作された大型の衝立。表面は、桐柾目地の中央に東京市の当時の地図、その周囲に東京市在住の工芸家による扇面名勝図15面（15区各1図）を配置、嵌入する。またその裏面は金無地の綴織地に萬歳楽の舞姿を刺繍で表している。なお、この衝立と共に、文机、料紙箱、硯箱の1具も依嘱制作されている。記録によると、これらは桑木地の胎に金透かしの裂地に蝶鳥文様を刺繍したものを地とし、15区の各名勝図15面を東京市在住の15名の画家に描かせたものを刺繍、それを文机甲板に7面、料紙箱表に5面、硯箱表に3面を嵌入して装飾したものであった。　　<展示　第1期-14、第2期-17、第3期-14>



裏面

本作品については、『東京芸術大学百年史　第三巻』に東京市からの依嘱についての書類が紹介されていることから、その概要を知ることができる。その記載は以下の様である。

○東京市依嘱　御衝立　製作費　七一六八(円)、一七〇

製作者のうち図案　島田佳矣、衝立製作　由井彦太郎、海野清、平田宗幸、堆朱楊成、飯田藤次郎ほか

「奉献御衝立製作仕様書

一御衝立　総高七尺二寸　横八尺七寸　枠并ニ足共桑地仕立／表面　桐柾目地一面ニ砂子蒔ヲナシ中央五尺ニ三尺四寸ノ横額ニ東京市現勢地図ヲ二分一ノ縮尺ニ描キ嵌入シ其周囲ニ扇面地紙形十五枚ニ十五区ノ名勝ヲ撰ヒ東京市在住ノ美術工芸ノ名匠ヲシテ各自其技術ヲ持テ表出セシメテ配置ヨク嵌入ス／裏面　金無地綴織地、漫歳楽ノ舞姿ヲ刺繍シテ貼付ス／技術家ノ分担左ノ如シ

地図　監修　小倉倹司　　製図　今村巳之助

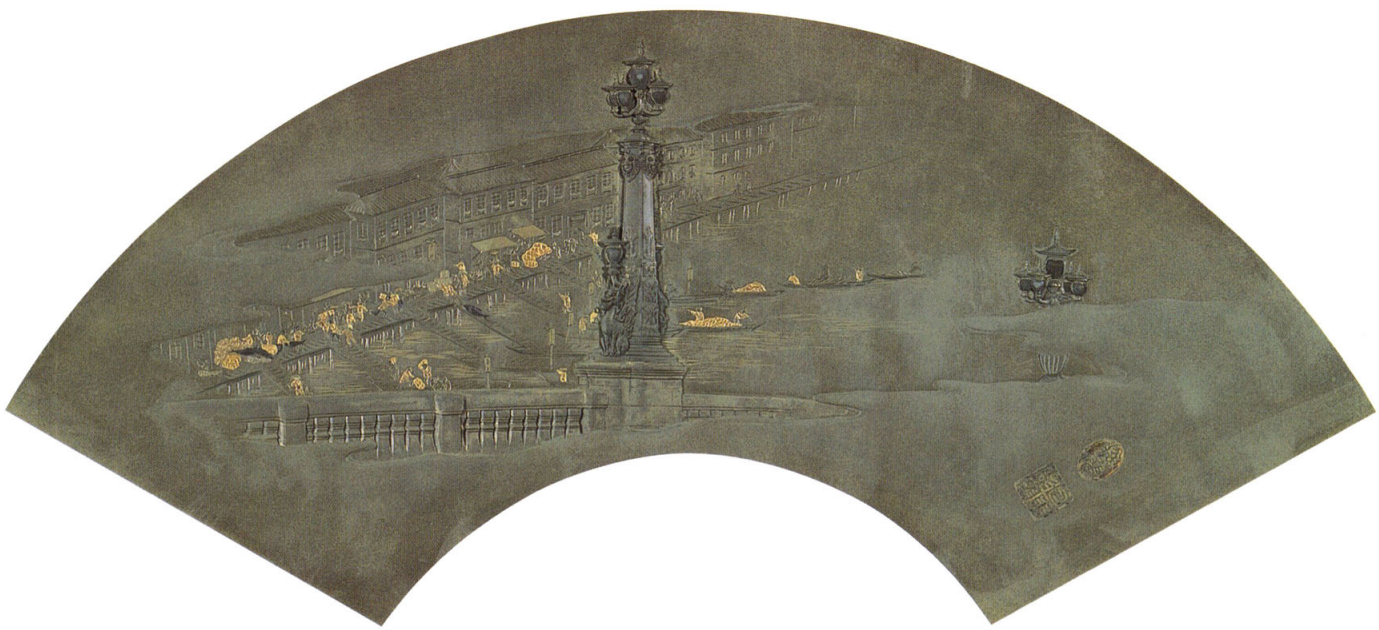
扇面地紙形　麹町区　宮城二重橋　彫漆　堆朱楊成、神田区　神田須田町　螺鈿　豊川楊渓、日本橋区　日本橋魚市場　彫金　香川勝広、京橋区　佃島　布目象嵌　宮智一男、芝区　芝浦　磁器　加藤陶壽、麻布区　東京天文台　木彫　竹内久一、赤坂区　青山練兵場　牙彫　三浦光風、四谷区　四谷見付　彫金　塚田秀鏡、牛込区　牛込神楽坂　蒔絵　白山松哉、小石川区　東京砲兵工廠　彫金　海野勝珉、本郷区　東京帝国大学　木象嵌　由井　長、下谷区　上野公園　鋳金　大島如雲、浅草区　浅草観音堂　陶磁　板谷波山、本所区　向島　七宝　涛川惣助、深川区　深川木場　鎚起　平田宗幸

万歳楽刺繍　原図　小堀鞆音　　刺繍　飯田藤次郎

以上記載ノ外総テ図案ノ通」



「麹町区　宮城二重橋」 堆朱楊成　彫漆



「日本橋区　日本橋魚市場」 香川勝廣　彫金

東京

大正四年

一之分万二尺縮

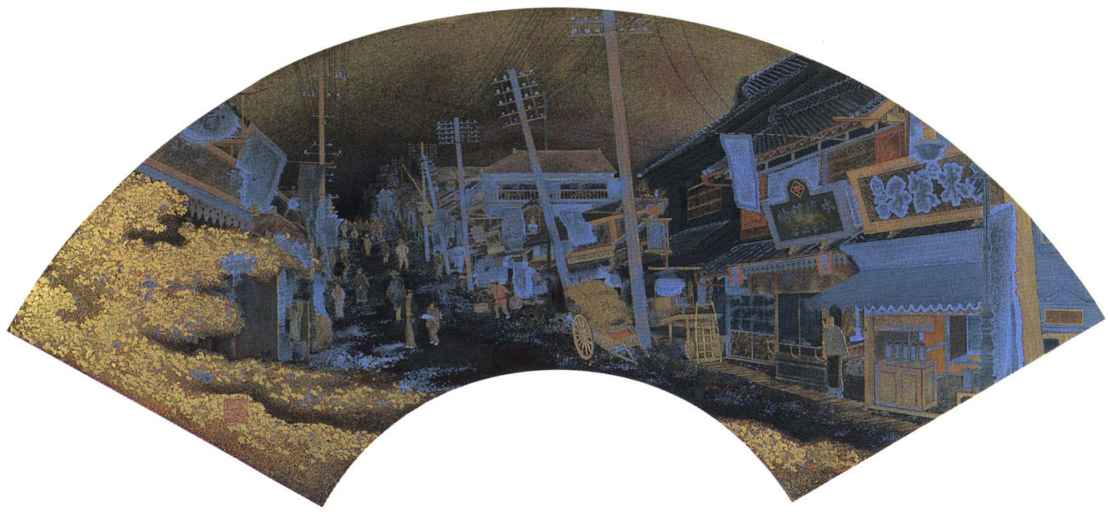
「神田区　神田須田町」 豊川楊渓　螺鈿



「芝区　芝浦」 加藤陶壽　磁器



「麻布区　東京天文台」 竹内久一　木彫彩色



「牛込区　牛込神楽坂」 白山松哉　蒔絵



「小石川区　東京砲兵工廠」 海野 清　彫金
（海野勝珉が製作受諾後に病没したため、息子の清が引き継いだ）



「本所区　向島」 涛川惣助　七宝

←裏面　萬歳楽（部分）



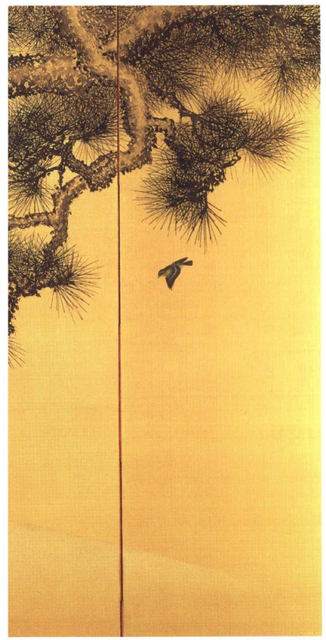




右隻



左隻



15　花鳥之図

今尾景年　六曲一双　大正4年（1915）
絹本金地着色　本紙各177.9×381.6

宮内省高等官一同よりの献上品。明治期から大正期に、優れた花鳥画で京都画壇において活躍した今尾景年（1848～1924）による華麗な作品である。景年の確かな写生に基づく細緻で優美な花鳥画は、内外の展覧会でも高い評価を得た。景年は明治37年に帝室技芸員となり、宮内省の御用も多く手がけた。本屏風は、左隻のどっしりと根をはった老松の枝が右隻へと大きく枝をはる中、錦鶏、白鸚を中心に番の小禽と、芍薬、薔薇、紫蘭、菊、水仙、千両などの草花といった吉祥のモチーフが心地よいリズム感をもって配置され、さらにそれらが鮮やかな色彩を上手く取り入れて描写されている。実に洗練された画面で、上品な装飾性が漂う。大礼に相応しい華麗な一作である。　<展示　第2期-21>

コラム

画帖

近代の絵画作品の中に、画帖という形態のものがある。画帖は、一人の画家、あるいは複数の画家による小画面の複数の作品を、折本、または冊子形式に順次貼って仕立てたものである。こうした形式のものは、古くは近世に入って婚礼調度の一つとして盛んに制作された「源氏物語画帖」、あるいは能書の断簡等を集めた「手鑑」の類のような、棚や床に飾る調度の一つとして考えられ、整ったものであろう。その一方では、貼交屏風や巻子形態の中に、複数の画家の様々な絵を集めて仕立てることが行われていた。このような両者の形態と性格が融合して、山水図や花鳥図など、様々な絵画を貼り込んだ画帖が登場する。こうした画帖がいつ頃から登場したのか、絵画を嗜む大名が増える時期、画家の交流が盛んになる時期、中国や西洋からの図譜等が流行する時期の影響がその背景に考えられ、十八世紀頃かと推察される。少なくとも十九世紀初頭にはこうした作品が現存しており、また皆川淇園の『淇園文集』に「山水画帖」という名称が登場している。近世初期の「源氏物語画帖」のような美しい調度品、という意味よりは、鑑賞するためのものという性格が強くはなったのであろうが、画帖はこうして近代へもその形を残した。

当館で収蔵する様々な近代の画帖は、記録、記念、献上という目的のために制作されている。記録的なものは皇室の伝統的儀式や調度品の記録である。記念と献上は、各時期の天皇、あるいは皇后が行幸啓された際の記念として制作されたものが多く、献上は御慶事にあわせて制作されたものが多い。記念と献上という目的において、画帖はとっておきの形態であり、当館収蔵品に画帖形式の作品がことのほか多い所以でもある。

今回の展覧会で紹介している画帖は、献上を目的に制作されたものであることから、近代画帖の中でも当代を代表する画家を中心にし、その作品数も多い、質量共に優れた作品である。その装丁も、表紙裂には金襴を中心に高価なものを用い、表裏四隅には透彫の金具を付ける。また収納の箱も漆塗、さらには加飾された豪華なものもある。こうした装飾性の高さは、近世の「源氏物語画帖」のように、調度の一品として飾ることを考えての仕立てになっていると言える。こうした画帖の献上は、少なくとも、昭和天皇の時代まで行われているが、画帖という作品形式は、皇室の存在が支えてきた日本文化の一つのかたちであるとも言えよう。

（太田）



16　画帖

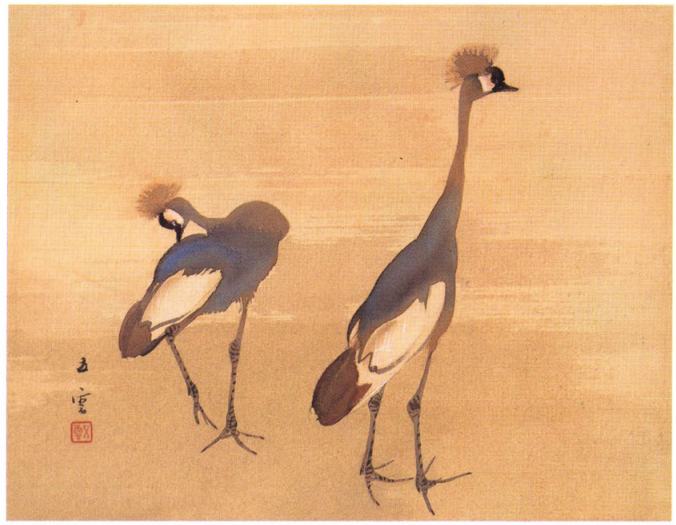
2帖　大正4年（1915）
絹本着色　本紙各32.5×41.4

京都市より献上された画帖。本画帖は、「京都在住画家にして、帝室技芸員、文展審査員、老画伯及び文展三等以上の入賞歴ある画家三十六名を選び揮毫せしむるもの」により、一帖18名づつ、二帖に仕立て、白地花立涌文を地に鳳凰と蝶を織り入れた色糸金襴で表装された表紙をつけ、その四隅には菊枝透金具が取り付けられている。

<展示　第1期-16>



上村松園「母子」



西村五雲「麗かな日」



富岡鉄斎「天露濕裳」



川村曼舟「天高気澄」



西山翠嶂「花売女」



木島桜谷「富嶽」



竹内栖鳳

17　画帖

1帖　大正3年（1914）
絹本着色　本紙23.4～27.1×30.0～33.1

大礼の前年に文部大臣より献上されたもの。大礼は、当初、前年に行われる予定であったが、その年の4月に昭憲皇太后が崩御されたため、翌年に延期された経緯がある。そのため、奉祝のための献上の品は、実際の大礼に先立って製作、献上されたものがあった。本画帖もその一例であるが、収載の22名の画家は、当時の日本画界を代表する人たちである。　<展示　第1期-15>



川合玉堂



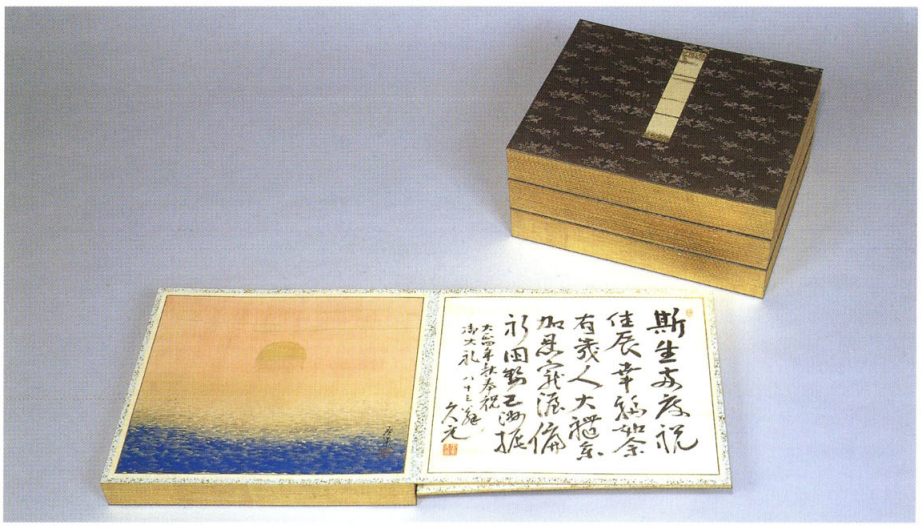
山元春挙



橋本関雪



小室翠雲


装丁と巻頭

18　書画帖

4帖　大正4年（1915）
絹本墨書、絹本着色
本紙各35.1×42.7

当時、麹町区飯田町にあった教育通信社からの献上。当初は、101名による書画帖を計画していたようであるが、実際は、96名の書画が「元」「亨」「利」「貞」の4帖に分けられて収載されている。その巻頭を飾るのは、伯爵土方久元の「大典詩」と寺崎広業「旭日静波」。奉祝の為の詩歌と画題が凝縮されたような画帖である。

<展示　第1期–17>


小室翠雲「富嶽」


山田介堂「菊」


菅楯彦「国主献酒図」


津端道彦「富嶽」

大正5年　立太子礼

明治の皇室典範制定によって、皇位の継承の第一は皇長子となっているので、父帝の践祚と同時に皇長子は皇太子となられるが、その儀式は、後日、あらためて行われることとなる。皇太子裕仁（ひろひと）親王の立太子礼は、大正五年十一月三日、その饗宴は同月二十七日より翌月四日までの日程で行われた。裕仁親王はこの時、十五歳であった。

立太子礼に際しては奉祝の御題が決められ、一般の特志者の歌も受理されたという。御題は「晴天鶴」。この御題は、御拝領の絵画（図版番号21）の画題にもなっている。また、京都府から奉献された今尾景年筆の六曲屏風もこの御題に因む図様で、左隻には老松に旭日、右隻には二羽の親鶴に一羽の雛鶴の睦まじい光景を描くものであったという。

またこの時、全国の高等官一同より奉献された歴史画帖と油絵風景額があった。歴史画帖は、小堀鞆音「大極殿朝賀」、松本楓湖「菅原道真の射技」、川合玉堂「平重盛父を諫む」、下村観山「徳川家康江戸城を築く」等の三十六題の日本画に、雲母刷装飾料紙の色紙に尾上八郎、大口鯛二、阪正臣の三氏による詞書をそれぞれに付し、天地人の三冊に分けられて「精華」と名付けられた。画帖の表紙は古様獅子文の倭錦、その四隅に藤島三郎による金具が配置され、また画帖を納める三段重の箱は吉田包春の制作であったと記録されている。一方の油彩画は、日本国内の風景が選ばれ、和田英作による富士山を始め、鳴門瀬戸などを含めた七枚であったという。

御慶事に相応しい記念の奉献の品に見られる意匠は、作家たちが決して好んだものではなく、むしろ与えられたものであったとも言えるが、記念的な奉献の品の製作に関わるという経験は、それぞれの作家の作風を飛躍させ、また新たな一面を発揮させることにもなっている。





19　六花形鴛鴦文ボンボニエール

1点　大正5年（1916）
銀製　6.0×6.4、H.2.2

<展示　第2期-1>



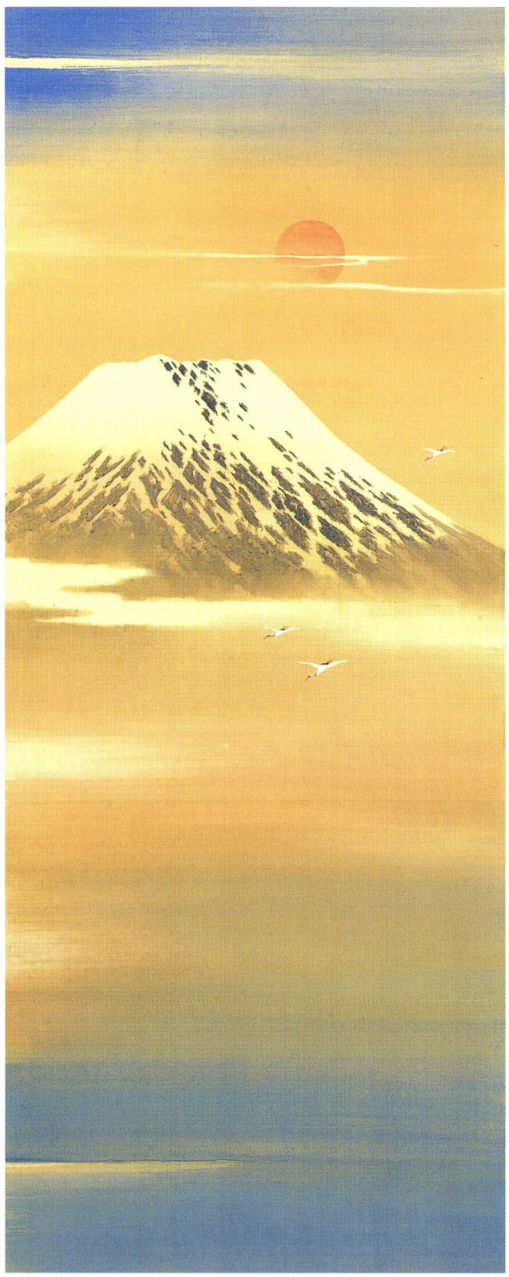
20　蓬萊雲鶴蒔絵書棚

六角紫水ほか　1基　大正6年（1917）
木製漆塗、蒔絵、螺鈿
45.5×106.0×90.0

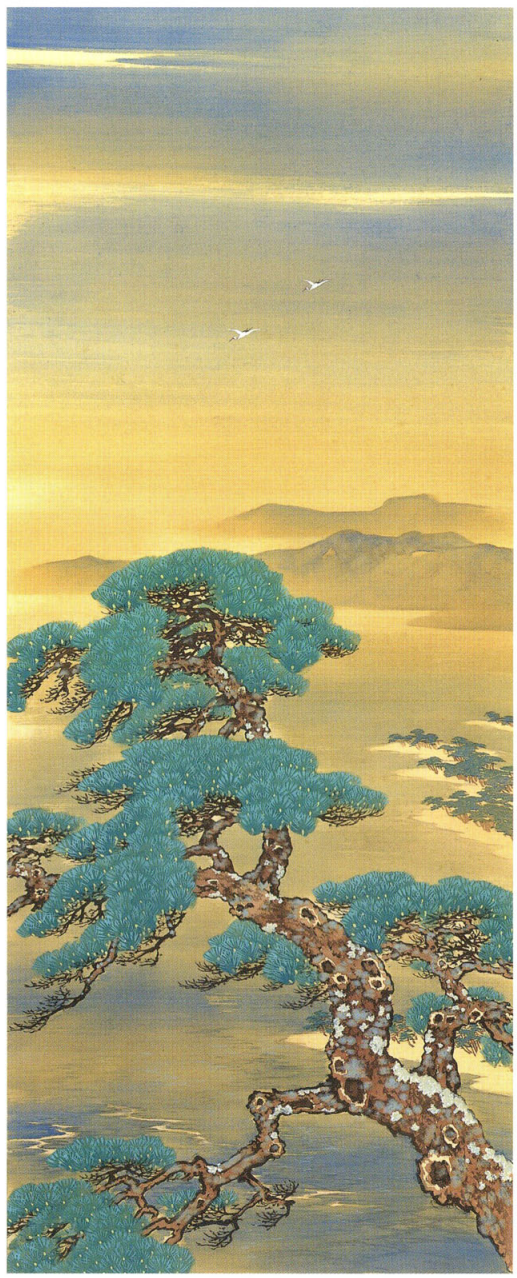
立太子礼に際して、皇太子（昭和天皇）が大正天皇と貞明皇后に献上する品として、この書棚と料紙箱、硯箱の一揃の制作が、東宮職より東京美術学校に依嘱された。作者の六角紫水（1867～1950）が、一度辞した同校に再び戻る契機となった作品でもある。書棚の形式や表面の文様は正倉院宝物の意匠に範を得て黒漆地に研出蒔絵で加飾する一方、扉内側には螺鈿と平文で桜紅葉樹を表すといった紫水独自の創意も見られる。

<展示　第2期-20>





富士日之出海辺鶴



松ニ鶴山水

21　晴天鶴

山元春挙　3幅対　大正5年（1916）
絹本着色　本紙各130.5×51.5

立太子礼にあたり、御拝領の作品。立太子奉祝の御題「晴天鶴」に因むもので、御用画として描かれたためか、落款印章は伴わないが、春挙による本図の下絵が残されていることや、記録や作風からみて春挙による作品であることを疑う余地はない。中央に朝陽を受ける富士、その左右に海山の雄大な景観を描き、老松と優雅に飛翔する鶴を描いて、寿ぎに相応しく、また春挙の構図や色彩感の上手さが十分に表れた作品である。

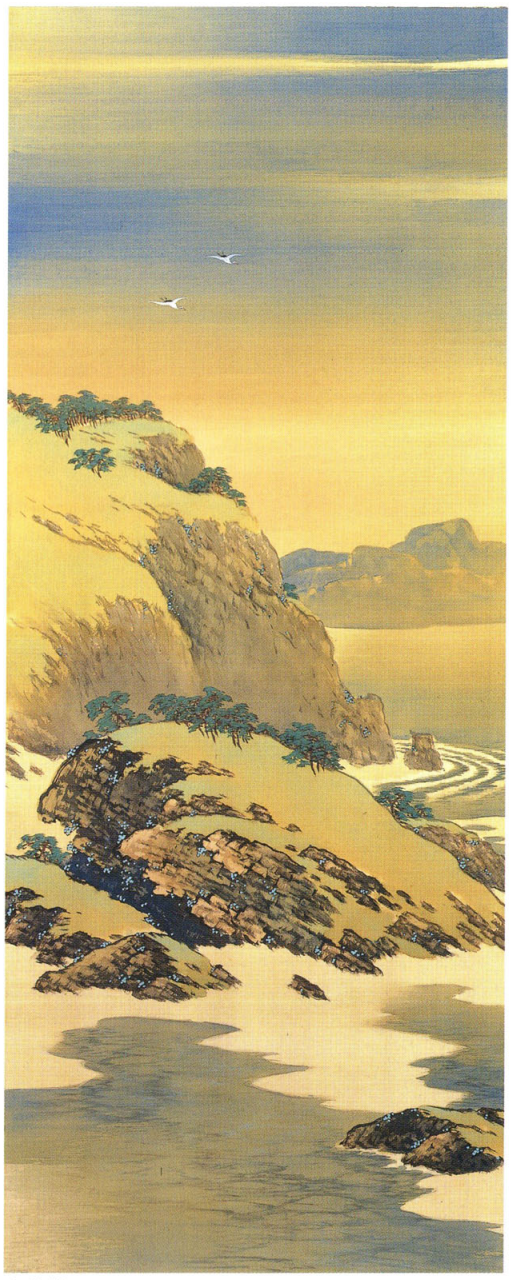
<展示　第2期-22>



22　諫鼓鶏置物

鈴木盛久・平田重光ほか　1点
大正初期　銀ほか、鍛造、彫金（台）木製漆塗、蒔絵
（像）15.0×15.3×36.5、（台）34.3×41.7×23.0

立太子に際して、雍仁親王（のちの秩父宮）より皇太子（昭和天皇）へ贈られたもの。諫鼓鶏は、君主が善政をほどこした結果、人民が施政に対して諫言しようとする諫鼓を用いることがないため、鳥もその音に驚くことがないという意味で、平和な治世を象徴する図像として伝えられてきた。　<展示　第2期-8>



山水鶴

23　木彫人形「鷺」

1点　大正初期
木彫彩色　29.8×47.0×45.0

伝来より、立太子のお祝いの一つとして、御拝領されたものと考えられる作品。『平家物語』巻五「朝敵揃」に依拠する謡曲『鷺』を題材とする。帝が神泉苑に行幸した際、池の汀にいた鷺を捕まえるよう命じた。蔵人が捕まえようとすると飛び上がるので、勅諚であるぞと声をかけると、鷺は翼を垂れて伏した。その有様をご覧になっていた帝は、蔵人と鷺に五位の位を与えられた、という内容である。

<展示　第2期-11>





24　山水図花瓶

海野勝珉　一対　明治末期～大正初期
銀、彫金　各D.17.5、H.36.5

男爵藤田平太郎より。<展示　第2期-9>

大正8年　皇太子成年式

満十八歳となられた皇太子の成年式は、この年の五月七日に行われた。当日の新聞記事によれば、その儀式の次第を、午前八時より、賢所において、皇太子はまず、黄丹色の闕腋袍に空頂黒幘を着けて儀式に臨まれ、大正天皇より御手づから御冠を受けられて加冠の儀に臨まれる。その後、成年装束の縫腋袍に召し替えて、皇霊殿神殿に御奉告。午後は、宮殿正殿で陸軍大尉の御正装にて朝見の儀に臨まれ、さらに鳳凰の間、牡丹の間、千種の間等で、各皇族方、各国大使らの拝賀を受けられる、と伝えている。立太子礼の時ほどではないが、花電車の運行など、やはり奉祝の祝意を込めた様々な景色が見られた。

成年式に関わる美術品において興味深いのは、御両親である天皇、皇后から皇太子はじめ、親王方への御祝いの品、そして返礼としての親王方からの両陛下への御贈進品の在り方である。御慶事の際には、屏風、掛幅の絵画、棚、文具、置物といった調度の品から選ばれて、互いに御品をやりとりされているが、大正期の立太子、成年式で明確にその特徴が窺えるのが、文台・硯箱の一具である。書は、伝統的に親王の嗜みとして重要視されてきたが、それに伴う道具としての文台と硯箱は、身近に据え置く調度の品として欠かせないものであった。今回は、皇太子成年式の折のもの（図版番号27）と、雍仁親王成年式の折のもの（図版番号35）を紹介しているが、この他に当館では明治二十二年の大正天皇の立太子の折、御拝領の一具も収蔵している。





25　八稜鏡形鶴文ボンボニエール

1点　大正8年（1919）
銀製　6.3×6.2、H.2.5　　<展示　第2期-2>



26　丸形松喰鶴文ボンボニエール

1点　大正8年（1919）
銀製　D.5.2、H.2.0　　<展示　第2期-3>



文台



硯箱

27　歌蒔絵文台・重硯箱

神坂雪佳（図案）、江馬長閑（文台）、
神坂祐吉（硯箱）　一具
大正8年（1919）　木製漆塗、蒔絵
（文台）37.2×64.3×13.5
（硯箱）27.2×28.9×17.4

皇太子（昭和天皇）の御成年のお祝いとして御拝領の品。当時、京都市美術学校で教鞭をとっていた神坂雪佳（1866～1942）に御下命があり、雪佳の図案とその指導のもと、弟の祐吉（1886～1938）が硯箱、江馬長閑（1866～1938）が文台の蒔絵を担当した。意匠は『古今和歌集』巻第七賀歌より、素性法師の「万世を松にぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば」と、紀貫之「春くれば屋戸にまづ咲く梅の花君が千年のかざしとぞ見る」によっている。

<展示　第2期-18>



28　鹿置物

高村光雲　1点　大正9年（1920）
木彫　（像）28.0×49.3×51.5、（台）38.5×60.0×13.2

成年式に際して、皇太子（昭和天皇）より大正天皇へ献上された。東京美術学校への依嘱制作品である。　<展示　第2期-12>



双鶴図



山桜に梅花図

29　双鶴に桜梅桃李図

結城素明　3幅対　大正8年（1919）
絹本着色　本紙144.7×50.5

成年式にあたり、各宮家より皇太子（昭和天皇）に贈られた作品。東京美術学校に依嘱されて、当時、教授を務めていた結城素明（1875～1957）が制作にあたった。中央に双鶴をおき、その左右に寿ぎを飾る日本の樹花を明るい色調で描いている。　<展示　第2期-23>



30　住吉神像置物

天岡均一　1点　大正8年（1919）
銀、ブロンズ、鋳造　25.3×26.0×37.0

成年式に際して、大阪市より献上。住吉明神は古くより海上安全、そして和歌の神として知られる。　<展示　第2期-10>



桃に李花図

大正11年 雍仁親王成年式・大正14年 宣仁親王成年式

皇室における成年式は、皇太子及び皇太孫は満十八歳、他の皇族は満二十歳で行われることになっている。

雍仁（やすひと）親王は大正天皇の第二皇子として、明治三十五年（一九〇二）六月二十五日に御誕生。大正十一年に満二十歳を迎えられ、御誕生日の当日に成年式、秩父宮宣下を受けられた。

また宣仁（のぶひと）親王は、大正天皇の第三皇子として明治三十八年一月三日御誕生。大正元年、九歳で高松宮の宮号を賜り、有栖川宮家の祭祀を継承された。成年式は大正十四年一月十三日。

皇室御慶事の折に製作される銀製菓子器―ボンボニエールは、近代以降、現在まで続く皇室の伝統的な品の一つと言えようが、大正期は様々な形のものが製作されている。そうした中、大礼、立太子礼、成年式といった伝統的な儀式の際のその意匠は、やはり文様、形共に厳かな雰囲気に仕上がるものが選ばれている。それぞれ、概ね二種類（大礼は三種類）が製作され、内宴、饗宴などの別で使い分けられていたようである。また、大正天皇の四皇子方のお印は、皇太子が若竹、雍仁親王が若松、宣仁親王が若梅、そして崇仁（たかひと）親王（三笠宮殿下）が若杉であり、雍仁親王、宣仁親王の成年式のボンボニエールでは、このお印に因んだ意匠が用いられている。（昭和十年の崇仁親王成年式のボンボニエールでも、お印が表された意匠となっている。）



成年式の雍仁親王



成年式の宣仁親王



32　箱形松唐草文ボンボニエール

1点　大正11年（1922）　銀製　5.15×3.95、H.1.9

雍仁親王成年式御祝宴のもの。　<展示　第2期-5>



31　箱形雲鶴文ボンボニエール

1点　大正11年（1922）　銀製　6.3×4.45、H.3.1

大正11年6月25日、雍仁親王成年式のもの。　<展示　第2期-4>



34　丸形梅花散文ボンボニエール

1点　大正14年（1925）　銀製　D.6.4、H.2.6

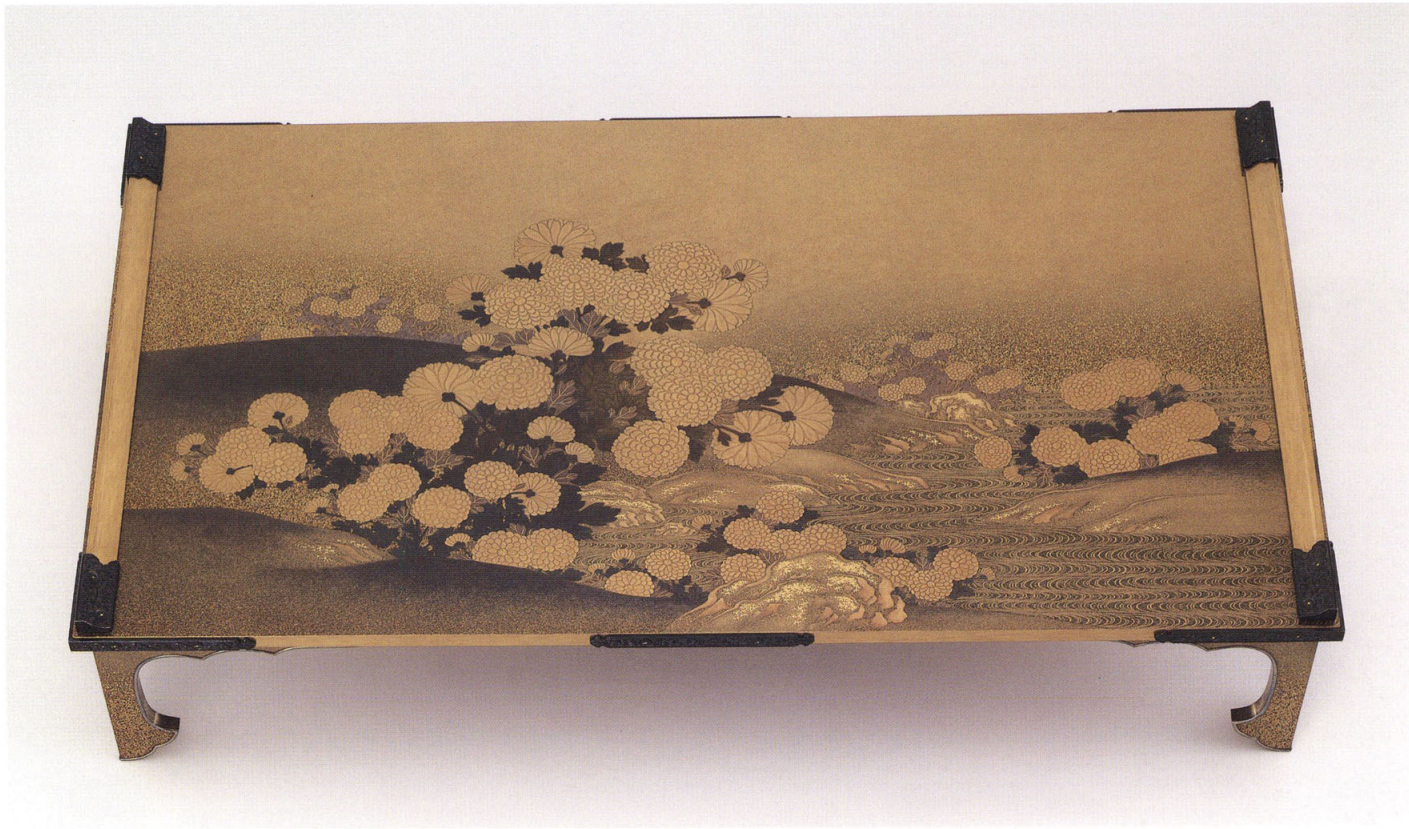
大正14年1月13日、宣仁親王成年式のもの。　<展示　第2期-7>



33　箱形梅花散文ボンボニエール

1点　大正14年（1925）　銀製　5.2×3.9、H.2.0

大正14年1月13日、宣仁親王成年式のもの。　<展示　第2期-6>



文台



硯箱

35　菊花蒔絵文台・硯箱

船橋舟珉　一具　大正11年（1922）
木製漆塗、蒔絵
（文台）36.8×64.3×12.4
（硯箱）25.0×23.0×5.5

貞明皇后より雍仁親王に贈られた品。伝統的な文具を母君の皇后より東宮や皇子の立太子、成年式の際に贈られることは慣わしとなっていたようで、皇太子（昭和天皇）の成年式の折にも贈られている（図版番号27）。

<展示　第2期-19>



36　猿置物

高村光雲　1点　大正12年（1923）木彫
（像）28.0×39.0×41.0、（台）35.0×48.0×12.0

雍仁親王成年式に際し、親王より大正天皇・貞明皇后に献上された品。東京美術学校への依嘱制作品である。能楽の祝言曲である「三番叟」を舞う猿をかたどっている。　<展示　第2期-13>

大正13年　皇太子御結婚

大正十三年一月二十六日、皇太子裕仁親王と久邇宮良子女王の御婚儀が宮中賢所で行われた。皇太子二十二歳、良子妃二十歳であった。皇太子妃の内定は大正七年一月、その後間もなくに、久邇宮家に御学問所が開設されて御結婚にむけての準備が始まった。大正十年三月から九月にかけての半年間は、皇太子が欧州に御外遊。翌十一年六月に天皇の勅許があり、九月二十八日に納采の儀。しかし、十二年九月の大震災で延期され、ようやく翌年一月の御結婚となった。御結婚の当日、大正天皇はすでに体調を崩されて沼津御用邸で貞明皇后と共に御静養中であった。両殿下が賢所の儀を済まされると、宮内大臣はその旨を御用邸の両陛下に電奏したという。

当日の新聞に掲載された宮内大臣の談話によると、この御慶事にあたり、貞明皇后は、「質素を旨とするよう仰せられ御支度くの如きは御結婚に御入用の都度都度御調製出来ることゆゑ一時に御用意なくとも宜しかるべく、その品々も成るべく内地品にて間に合ふものは間に合はせるやうとの思召で萬端御指圖あらせられ、御衣服の色合模様までも一々御見立遊ばし行き届かせられた御慈愛」を見せられたという。両陛下のお祝いの御心は、両殿下に贈られた置物（図版番号39）にも込められていよう。

さて、御結婚にあたり、久邇宮家から良子女王が両陛下（大正天皇と貞明皇后）、皇太子（昭和天皇）への御贈進品としてお持ちになられた品もあった。皇太子へ贈られた山崎朝雲の「白馬節会置物」（図版番号40）がその一つであるが、他にも大正天皇と貞明皇后に贈られた二双の屏風があった。様々な画題を扇面形に描いた日本画であり、複数の画家によるものと思われる。良子女王の御父君、久邇宮邦彦王は、美術に対するご趣味が深く、その発展を奨励され、日本美術協会の総裁も務められて様々な画家、工芸作家との交流があった。富岡鉄斎も懇意にした画家の一人であるが、今回紹介した「武陵桃源・瀛州神境」（図版番号47）は、京都市より久邇宮家に依頼されて鉄斎が描いたものである。他にも、二代諏訪蘇山が良子妃のために一年を費やして制作した陶磁製の文房具のセット「文乃友」も現存している（当館蔵）。

祝意を込めた品々は、大正四年の大礼にも並ぶほどの数に上ったようである。大正天皇の体調が思わしくなく、大正十年、御外遊から戻られた皇太子が摂政に就任されたのはその年の十一月二十五日であった。天皇に代わって政務に励まれる皇太子の存在に国民は大きな期待を寄せる中での御結婚という御慶事であったため、まさに国中が慶びに湧いたのであった。若いお二人に対して明るい希望を抱いて製作される奉祝の品に、その想いも込められているのであろうか。意気込みが伝わる大作、力作が多いのもこの御結婚時の品々の特徴である。

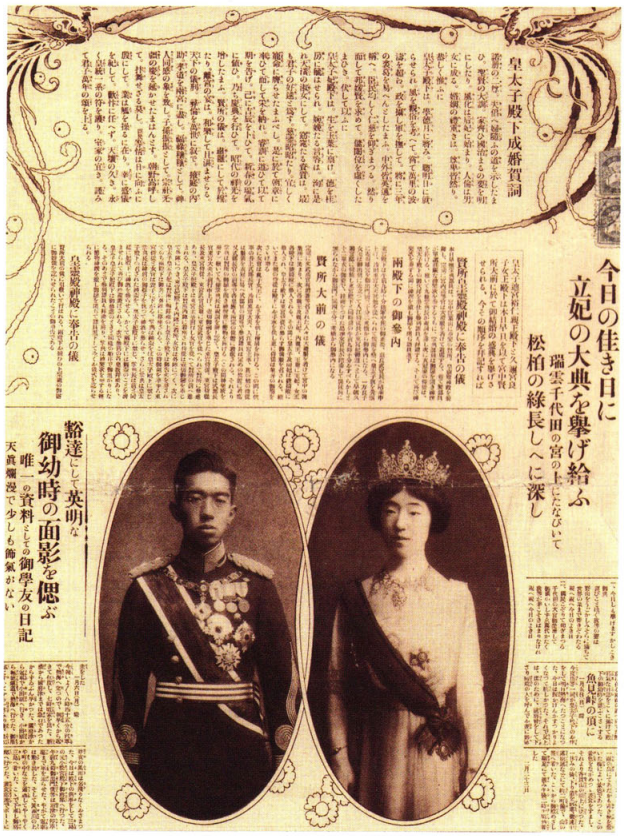
東京府が献上した画帖「瑞彩」（図版番号45）は、それまでの多く制作されてきた画帖の中でも最も作家数が多く、当時の画壇を代表する全ての画家が入っている。また、文武官一同からの献上品として東京美術学校が依嘱制作した「御飾棚と御飾品」一式（図版番号49及び50）もまた、当時の工芸技術の粋が集まったとも言える大作である。今回、初めて、棚二基とそれぞれの棚飾品、そして各種工芸扇面色紙屏風を一堂に紹介する。それぞれの意匠、技術の素晴らしさと共に、多くの作家たちが関わって一つの棚と棚飾り品という総合的な装飾美、その技術の結集力にも注目して頂きたい。

そして皇太子御結婚の奉祝の品の大きな特徴の一つは、外国からの御贈進品が多いことにもある。今回の展覧会では、ベルギー国王、スウェーデン国王、フランス大統領などから贈られた品を紹介している（図版番号51～56）が、それぞれがその国を代表する工芸技術をいかした優品である。大正十年、皇太子が半年間にわたってヨーロッパ諸国を歴訪されたことは、各国が皇室の存在を大きく認識することにもなった。このことは、皇太子御外遊の後、翌年一月にはフランスのジョッフル元帥が、また四月には英国のエドワード皇太子が答礼訪問されたのをはじめとして、昭和初期までに各国の王皇族の来日が相次いだことにも窺えよう。さらに大正14年には秩父宮雍仁親王が英国に御留学、昭和に入ってからは、高松宮御夫妻が御外遊、秩父宮御夫妻の英国ジョージ六世戴冠式への御出席と、昭和天皇の弟君方の外国御訪問も相次ぐ。明治期以降、各皇族が少しずつ、交流を重ねてきた皇室外交の成果が、皇太子御外遊で一気に華開いたとも言えよう。

皇太子御結婚という微笑ましく、また希望に溢れた御慶事は、自然、国民の祝意を高め、町中はアーチや紅白幕などで装飾され、提灯行列、旗行列はもちろん、奉祝飛行、奉祝演奏会、祝賀演芸会など、様々に趣向を凝らした催しが各地で行われた。東京市内に運行された華やかな花電車の様子は、写生をもとに描かれた各図が画帖に仕立てられて献上されている（図版番号44）。国中が共に慶び湧いた御結婚であった。







皇太子殿下成婚賀詞

今日の佳き日に
立妃の大典を擧げ給ふ
瑞雲千代田の宮の上になびいて
松柏の綠長しへに深し

賢所大前の儀

兩殿下の御參內

賢所皇靈殿神殿に奉告の儀

皇霊殿神殿に奉告の儀

齎達にして英明な
御幼時の面影を偲ぶ
唯一の資料としての御學友の日記
天真爛漫で少しも飾氣がない

魚見峠の頂に

当時の大阪朝日新聞



御結婚後、間もない皇太子御夫妻

37　六角箱形松鶴文ボンボニエール

1点　大正13年（1924）　木製、螺鈿
4.6×5.3、H.3.0

大正13年5月31日、皇太子御結婚祝晩餐会の折のもの。　<展示　第3期-1>





38　卵形亀甲文ボンボニエール

1点　大正13年（1924）　銀製
4.8×6.2、H.4.0

大正13年6月2日～4日、皇太子御結婚祝饗宴の折のもの。
<展示　第3期-2>



39　松樹鷹置物

高村光雲　1点　大正13年（1924）　木彫
（像）53.0×82.0×95.5、（台）60.5×91.0×19.0

御婚儀の前日、大正天皇と貞明皇后より御拝領の作品。東京美術学校へ依嘱製作された。東宮御所の玄関を飾る置物として製作されたと伝えられる。　<展示　第2期−14>

コラム

御慶事を飾った彫塑
―高村光雲・山崎朝雲の木彫作品を中心に―

本展に出品されている御慶事の献上品に限った話ではあるが、置物類のなかに興味深い一つの特徴が見られる。大正四年（一九一五）の大礼には、塚田秀鏡・黒川義勝「双鶴置物」（図版番号8）や戸島光孚「鶏置物」（図版番号7）、海野美盛（二代）「鳳置物」（図版番号6）など、金工や漆工の大型作品が製作された。ところが、同五年の立太子礼以後、そのような工芸による大型の置物（動物像）は減少するようである。しかし、その一方で、多くの作例が現存しているのが、木彫を主とした彫刻作品である。ここでは、そのなかでも高村光雲と山崎朝雲の作品を中心に取り上げることとしたい。

まず大正大礼の際に注目されるのは、貴族院議員一同より献上された高村光雲・山崎朝雲の合作「萬歳楽置物」（図版番号12）である。これは両者が本来専門とする木彫ではなくブロンズの鋳造作品である。舞人の目鼻立ちには朝雲らしい特徴がうかがわれ、おそらくおよその形状を師匠の光雲が作り、弟子である朝雲が鋳造原型を作ったのではないかと推測される。本作には、もう一点、対になる竹内久一の「久米舞置物」（挿図1）が同時に献上されており、献上当時の完成写真からどちらも由木尾雪雄による蒔絵螺鈿の豪華な置物台が附属することが明らかとなっている。竹内の作品は同じく舞楽を主題としながらも彩色をほどこした木彫で、ブロンズと木彫という異なる素材の作品をセットにしたユニークな取り合わせであった。いずれの作者も伝統保守派と目される木彫の大家であるが、本作からはブロンズ像という西洋的表現と日本的な木彫像という、当時の国内彫刻界を構成した二系統の対比（木彫と塑造）を読み取ることもできるだろう。

高村光雲の献上作品を見てみると、宮内省から東京美術学校への依嘱製作が多いことがわかる。大正八年の皇太子成年式に合わせて製作された「鹿置物」（図版番号28）、同十三年の皇太子御結婚に際して製作された「松樹鷹置物」（図版番号39）のほか、同十二年の雍仁親王成年式に際して製作された「猿置物」（図版番号36）など、それらには動物に題材をとった写実的な作風が共通している。これは仏師として修行を始め、仏像や人物像を中心に製作を行っていた高村の作歴のなかでは、いささか偏った傾向を示している。もちろん、高村の作品には有名な「老猿」（東京国立博物館蔵）を挙げるまでもなく、狗や矮鶏といった動物像に冴えを見せる側面が確かに存在する。鹿は中国の吉祥図像では長寿を象徴し、「鹿置物」のように二頭ならば夫婦ともに長寿となる「偕老」を表す。また、松に鷹や三番叟を舞う猿は日本的な吉祥の題材である。だが、このような吉祥イメージが投影されていることを前提としても、皇室の御慶事にまつわる依嘱作品という性格を考慮したときに、あえて動物が主題に選ばれた理由とは何だったのだろうか。高村光雲という彫刻家の特質を考える上でも興味深い問題である。

次に山崎朝雲についてであるが、献上作品は高村とは対照的に人物像あるいは人と動物が一緒にいる姿をモチーフにした作例が多い。大正十三年の皇太子御結婚の折に献上された、「白馬節会置物」（図版番号40）と「加茂競馬置物」（図版番号41）は、いずれも馬を用いる伝統行事に取材した点が共通する作品である。一見すると伝統的な吉祥画の画題を思わせる高村の静的な作品に対して、山崎が得意としたのは物語や神話の一場面や動作の一瞬を捉えた作風であった。「白馬節会置物」は白馬が引き出されてくる場面を、「加茂競馬置物」は騎手を乗せた二頭の馬が競い合って疾走する瞬間を造形化したものである。この二点を取り上げただけでも、彫刻家山崎朝雲の資質を窺い知ることができるのではないだろうか。

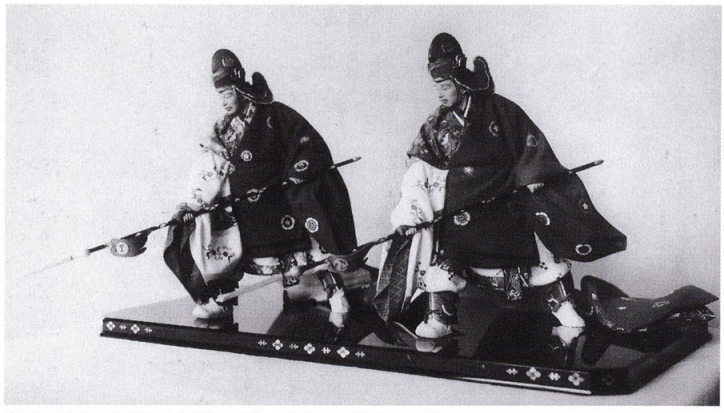
さて、山崎の作品に見られるもう一つの特徴は、その彩色について指摘することができる。例示するならば、大正十三年の皇太子御結婚の献上品である「御飾棚　鶴桐文様蒔絵」（図版番号50-4）のような彩色作品である。明治から大正期を通じて、木彫作品は洋風彫塑の影響を受けて基本的に彩色せずに木地のままで完成させるのが一般的であったが、山崎は「木彫置物　童」とほぼ同時期の大正末期から昭和初期にかけて、複数の彩色木彫を集中的に製作している。『昭和美術百家選、第二十三編「山崎朝雲」』（美術日報社発行、昭和十四年）によれば、大正天皇大婚二十五年の奉祝献上品である飾棚のための「木彫彩色舞楽人形　振鉾三節」（挿図2）や、昭和三年（一九二八）の昭和大礼に際して昭和天皇より貞明皇后へ贈られた「木彫彩色　打毬楽」、同年、大礼奉祝品として学習院から昭和天皇へ献上された「木彫彩色　萬歳楽」（当館蔵、挿図3）、同五年に昭和天皇より高松宮へ贈られた「木彫彩色　東遊」など、皇室への献上作品に彩色木彫が多く見られる。「木彫置物　童」以外はいずれも舞楽を題材にした作品で、装束の細部に至るまで濃密な彩色がほどこされており、この時期は山崎の作歴のなかでも特殊な一群をなしている。

彩色木彫に話が及んだところで、他の本展出品作にも触れておきたい。「木彫人形『鷺』」（図版番号23）は鑿跡を残

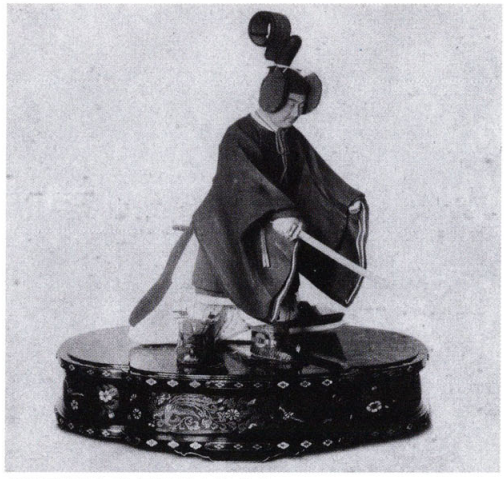
した粗い表面のまま彩色したもので、大正期の彩色作品のなかでも早い作例として注目されるが作者についての詳細は明らかではない。大正十三年の「両殿下御坐像」（図版番号43）は、再興日本美術院彫刻部で活躍していた吉田白嶺の作品である。これらの彩色木彫を見ていくと、西洋の影響を受けた近代彫塑的な作品というよりも、はるかに日本の伝統的な人形の方に表現の近さがあることに気が付く。「彩色木彫」すなわち「人形」という約束事があったわけではないだろうが、近代の木彫家が彩色を意識的に排除していた製作状況をふまえると、先に見た山崎朝雲の一連の彩色木彫の特殊性が際立ってくるのではないだろうか。

その他に注目すべき作品は、大正十三年の皇太子御結婚の折に貴族院議員総代より献上された、新海竹太郎の「鐘ノ歌」（当館蔵、挿図4）である。新海はドイツに留学したわが国の塑像製作の先駆者の一人で、塑造のみならず木彫まで手がけたことで知られる。「鐘ノ歌」は木彫であるが、高村とも山崎とも全く異なる西洋彫塑の影響下から生み出されている。地山正面に刻まれたドイツの詩人シラーの詩の一節が、本作の鋳物師が熱した坩堝を大鋏で引き上げる姿勢を暗示するという、文学的かつ精神性の強い作品である。彫塑に限っただけでも、このように多様な作品を含んでいることで、御慶事の献上品の幅広さが伺えるのである。

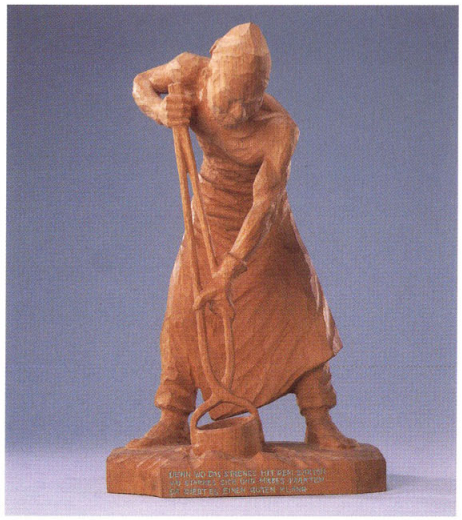
（岡本）



（挿図2）「木彫彩色舞楽人形　振鉾三節」山崎朝雲
（『大婚二十五年奉祝献品図録』より）



（挿図1）「久米舞置物」竹内久一
（「御大禮奉祝献上品繪葉書」より）



（挿図4）「鐘ノ歌」新海竹太郎



（挿図3）「木彫彩色　萬歳楽」山崎朝雲



41　加茂競馬置物

山崎朝雲　1点　大正13年（1924）
銀、鋳造、（台）木製漆塗、螺鈿
（像）42.0×76.0×50.0、
（台）51.3×71.2×106.6

三井家より献上の品。加茂競馬は寛治7(1093)年に堀河天皇が宮中武徳殿の式を移し、京都・上賀茂神社に奉納した古い行事。毎年5月5日、20頭の馬が左方と右方に分かれ、番になって、速さ、作法などを競う。

<展示　第2期-16>

40　白馬節会置物

山崎朝雲　1点　大正13年（1924）　木彫、（台）木製漆塗、螺鈿
（像）28.0×55.4×41.5、（台）38.5×70.8×11.4

御婚儀の当日、皇太子妃（香淳皇后）より皇太子（昭和天皇）へ御贈進の品。「白馬節会（あおうまのせちえ）」とは、正月七日、天皇が内裏の正殿である紫宸殿で白馬を見る行事で、その年の邪気を祓うという意味がある。

<展示　第2期-15>





42　アテナ像

ジュール・クータン　1点　19世紀末～20世紀初頭　ブロンズ、鋳造
60.0×24.0×98.0

伝来に、内親王四方より、とあるのは、大正天皇の御妹君方、皇太子（昭和天皇）にとっては叔母にあたる常宮（竹田宮昌子）、周宮（北白川房子）、富美宮（朝香宮允子）、泰宮（東久邇聰子）のことと思われる。四方のうち、周宮と富美宮は結婚後、パリに滞在していたことから、こうした作品が御慶事の品として選ばれたのであろう。 <展示　第3期-12>



43　両殿下御坐像

吉田白嶺　一対　大正13年（1924）　木彫彩色
（殿下）31.2×30.1×26.0、（妃殿下）29.9×29.8×24.5、（台）各40.3×40.3×1.7

箱書に「大正甲子五月」とあることから、御結婚の時の両殿下のお姿を写して制作され、翌年に完成して献上されたものであることがわかる。昭和天皇の御結婚において、両殿下が並ばれたその左右の位置は、雛人形の男雛と女雛の左右の置き方に大きな影響を与えたとも言われている。

<展示　第3期-13>

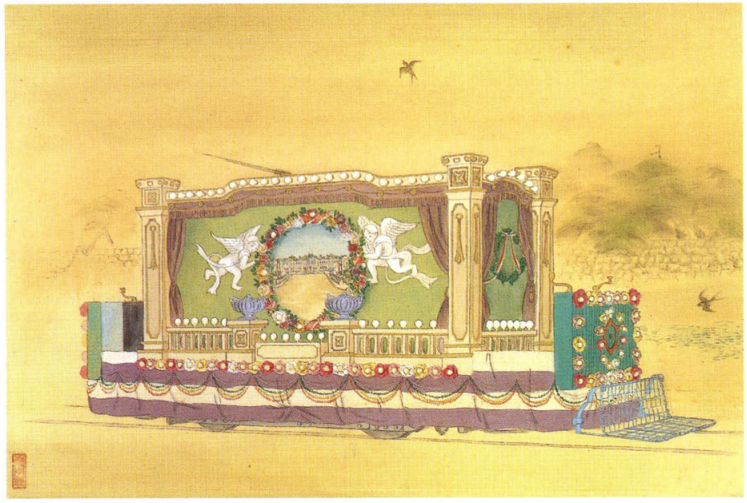


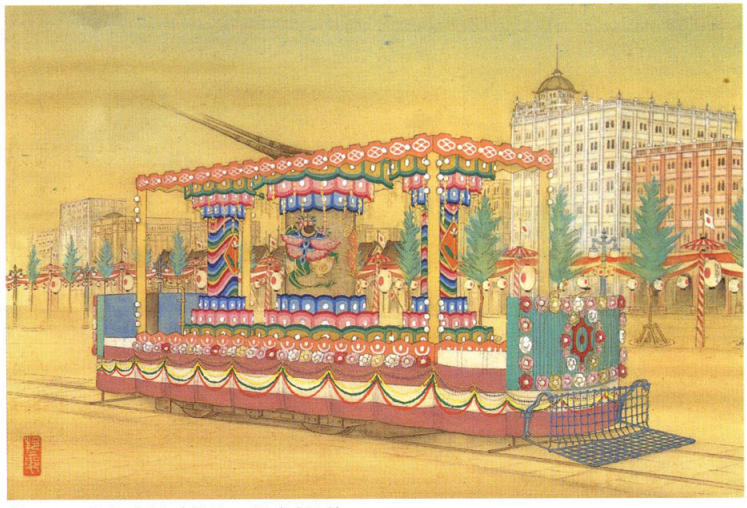
蒔絵箱

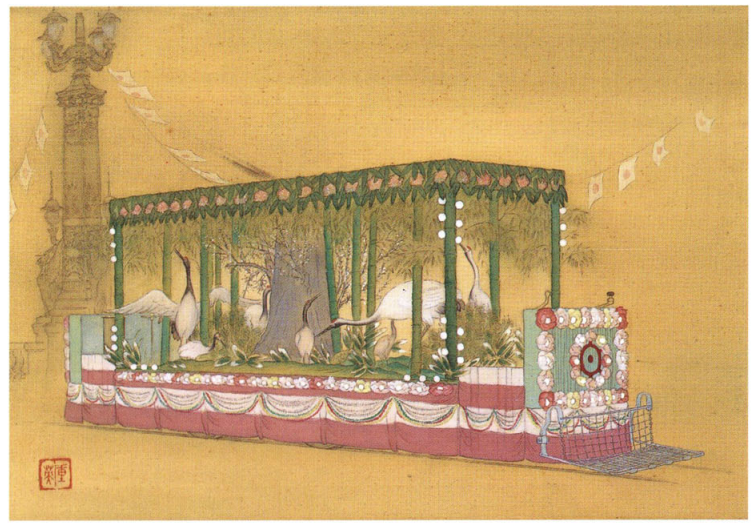
44　奉祝御成婚花電車絵図

島田佳矣ほか　1帖　大正13年（1924）
絹本着色　本紙各29.7×43.5

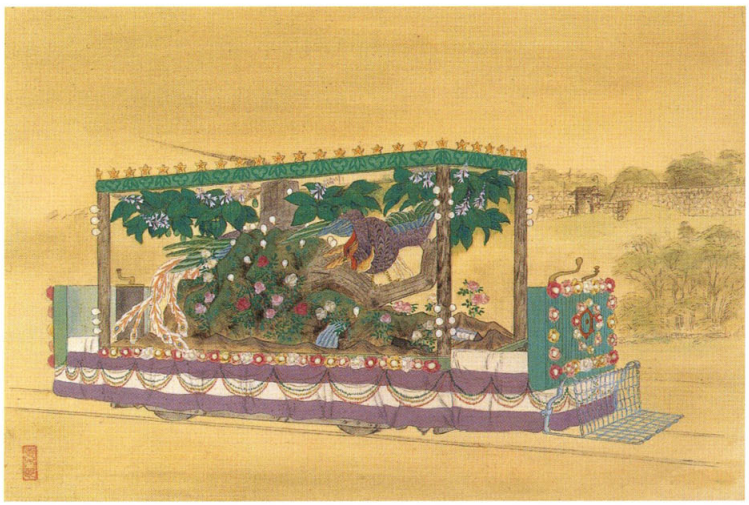
東京市は御結婚にあわせて市中を走る10台の花電車の運行を計画したが、その設計を東京美術学校に依嘱した。それを受けて、図案科教授の島田が20点の図面を作成して提案、その中の10台が選ばれて、実際に制作された。東京市は実際に運行された花電車を記録描写した画帖の制作も計画し、再び、東京美術学校に依嘱。島田の指導のもと、前年度の卒業生の中から選ばれた者によって実物写生を行ったという。完成した10図は画帖にまとめられ、花車をあしらった美しい蒔絵の箱に納められて献上された。　<展示　第3期-16>


第2図　花輪号（背景－お濠付近の松）

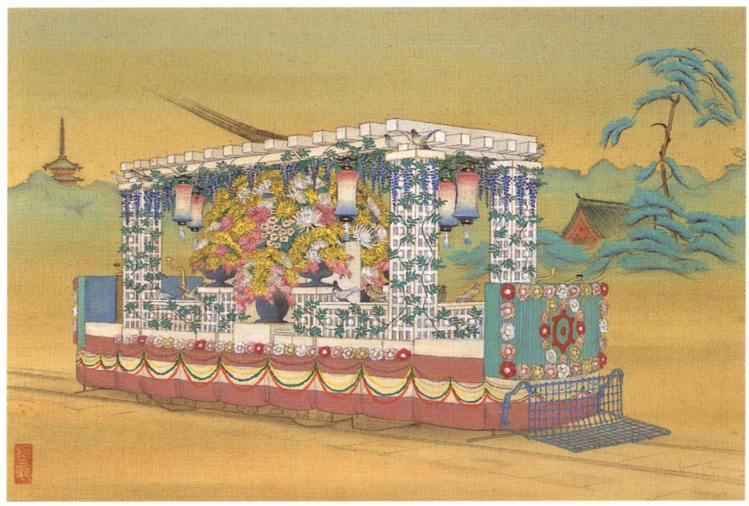

第4図　萬歳楽号（背景－銀座付近）



第6図　群鶴号（背景－日本橋付近）



第8図　鳳凰号（背景－半蔵門付近）



第10図　花園号（背景－芝公園付近）



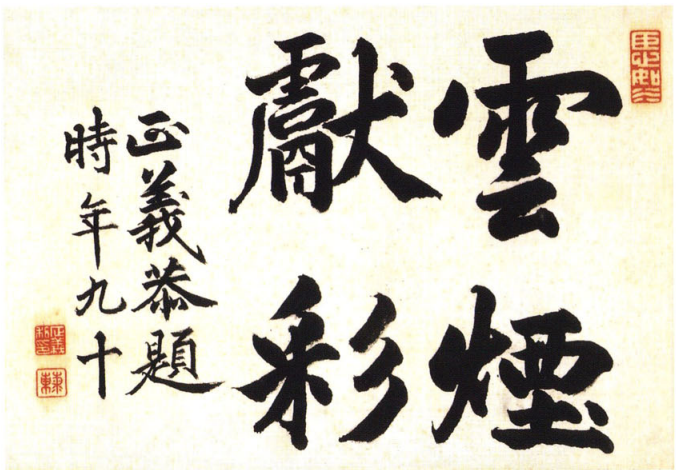
装丁

45　画帖「瑞彩」

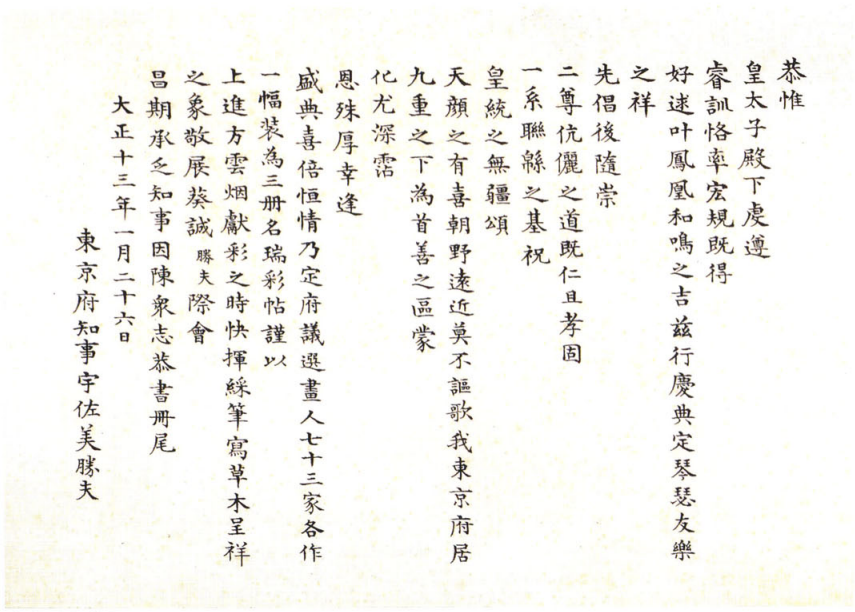
富岡鉄斎ほか　3帖　大正13年（1924）
絹本着色　本紙各28.5×40.5

東京府よりの献上品。前年より計画が進められ、当時の日本画壇を代表する作家73名が東西より選ばれた。吉祥的な画題を中心に、それぞれの画家の個性が発揮された質の高い画帖となっている。なお、本画帖の収納箱は、松田権六が担当した木製漆塗、蒔絵装飾の大型のもので、一部損傷があるものの、現存している。

<展示　第3期−15>



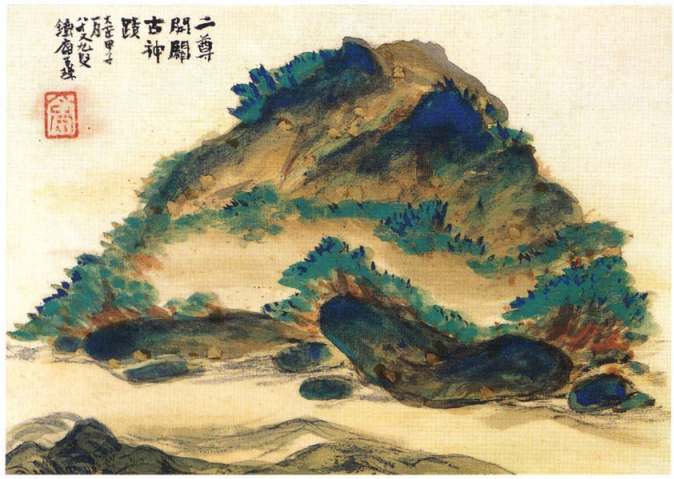
題辞（巻頭）　松方正義


恭惟
皇太子殿下虔遵
睿訓恪率宏規既得
好逑叶鳳凰和鳴之吉茲行慶典定琴瑟友樂
之祥
先倡後隨崇
二尊伉儷之道既仁且孝固
一系聯緜之基祝
皇統之無疆頌
天顔之有喜朝野遠近莫不謳歌我東京府居
九重之下為首善之區蒙
化尤深霑
恩殊厚幸逢
盛典喜倍恒情乃定府議選畫人七十三家各作
一幅裝為三冊名瑞彩帖謹以
上進方雲烟獻彩之時快揮綵筆寫草木呈祥
之象敬展葵誠 勝夫 際會
昌期承乏知事因陳衆志恭書冊尾
大正十三年一月二十六日
東京府知事宇佐美勝夫

跋文（巻末）



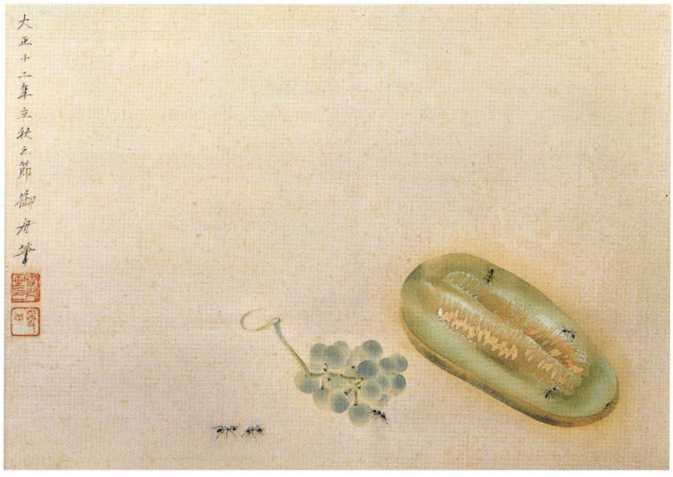
池上秀畝「孔雀」



富岡鉄斎「磻駅廬島」



橋本関雪「仙家献寿」



速水御舟「生果」



冨田渓仙「春日の神楽」

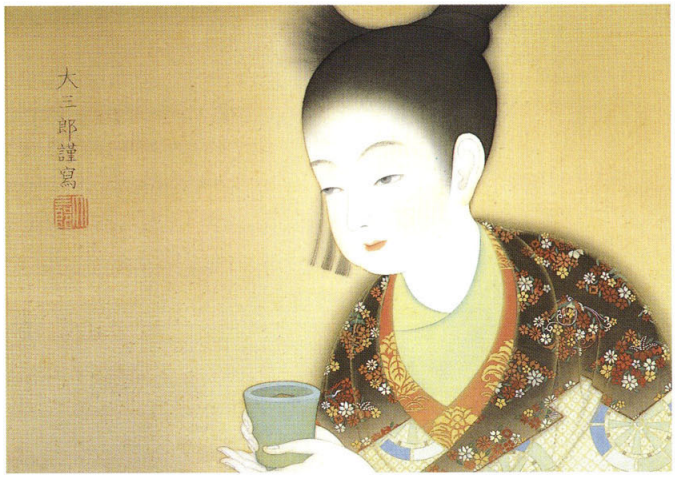
堂本印象「耕作」



横山大観「霊峯」



川端龍子「御盃」



中村大三郎「薫香」



吉田秋光「鳳仙花」

野田九甫「高千穂」



上村松園「雛祭」



山村耕花「かほり」



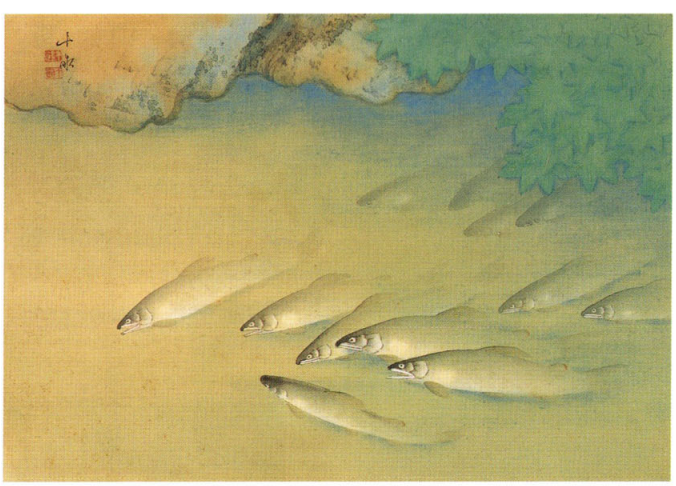
矢澤弦月「春の海」



松岡映丘「鷹」



松林桂月「東籬佳色」



荒木十畝「香魚」

福田平八郎「雛鶴」



水上泰生「秋色」

榊原紫峰「白梅双鳩」



真道黎明「雪山暮色」

下村観山「寿星」



平福百穂「双峰瑞雪」

平井楳仙「耕作」

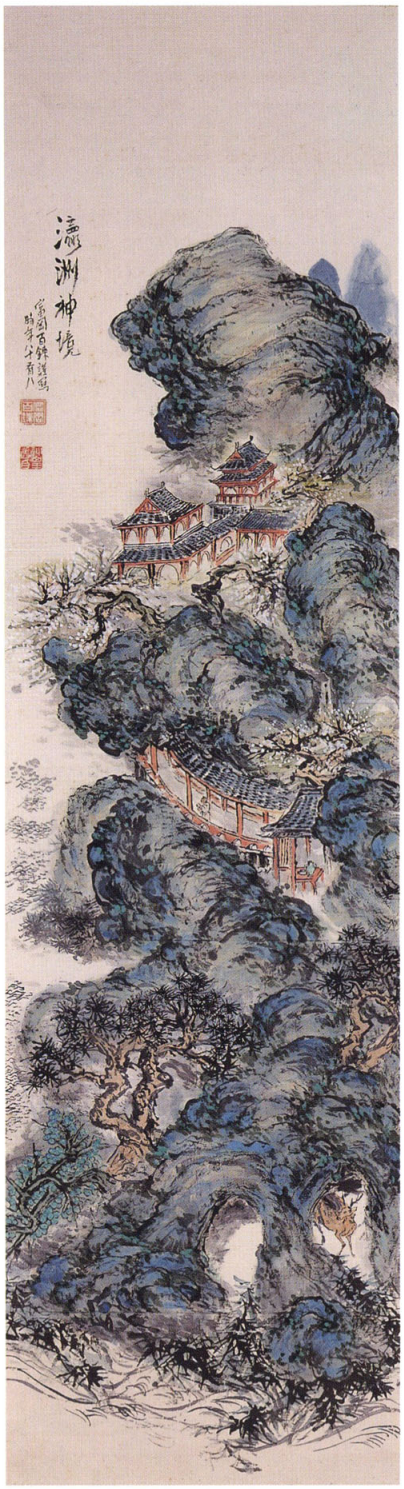




46　孔雀図

広瀬東畝　対幅　明治41年（1908）
絹本着色　本紙各177.8×99.5

明治31年より約11年間、宮内大臣を務めた伯爵田中光顕よりの献上。本作は、同じ土佐の出身で、各美術展覧会や、明治36年のセントルイス万国博覧会、大正4年のサンフランシスコ万国博覧会等で活躍し、作品が宮内省の御用品にもなった広瀬東畝（1875～1930）によるもの。花鳥画を得意とした荒木寛畝の影響を受け、慶祝に相応しく華麗な雌雄の孔雀を描いた、明治41年の作品。　<展示　第1期-18>





47　武陵桃源・瀛洲神境

富岡鉄斎　対幅　大正12年（1923）
紙本着色　本紙各175.0×47.9

京都市よりの献上。画題はいずれも中国の故事によるもので、「武陵桃源」は仙人の住む桃源郷、「瀛洲神境」は蓬萊、方丈と共に語られる三神山の一つである。鉄斎晩年の作であるが、他の作品と比べて筆法、賦彩ともに緻密で丁寧、そして繊細であり、奥行感のある力強い作品となっている。皇室を敬愛していた鉄斎の思いが感じられる。

<展示　第3期-17>

コラム

富岡鉄斎と山元春挙 ―大正六年に帝室技芸員になった二人の画家―

今回の展覧会で紹介した作品の作者の中に、富岡鉄斎と山元春挙という二人の画家がいる。この二人は、共に京都の画家で、大正六年に帝室技芸員になったという共通性がある。が、その作風は全く異にし、鉄斎は至極個性的、春挙は正統派である。ここでは、御慶事の品にそれぞれの想いで関わったこの二人の画家を紹介しておきたい。

富岡鉄斎は、天保七年（一八三六）、京都の法衣商の次男として生まれる。幼少より国学、漢学、陽明学に仏教など、幅広い学問を修めた。この間に絵の修業も始め、後には長崎に遊学して見聞を広め、明清画に触れて文人画を学んでいる。明治六年（一八七三）、三十八歳の時に湊川神社の権祢宜となって後は、大和石上神社の大宮司を務めるなど、神官の身となるが、明治十四年の兄の死をきっかけに京都に戻り、学者、文人として画作三昧の生活を送った。また明治十九年には青年絵画研究会、二十三年には京都美術協会など、各種展覧会や博覧会の審査員となるが、自らは一度も出品をしなかった。これは、学者としての意識が強く働いたためかと言われる。しかし、三十年には日本南画協会を発足させ、それには出品をしている。個性的な性格ではあったが、その学識と画技の評価は高く、次第に文人画壇の重鎮として存在感を高めた。終生、諸学の修学に怠ることなく、高潔な人格を尊び、画もまた人格を磨くための一つの遊戯であると捉え、その姿勢をくずさなかったという。

ところで、鉄斎については、明治二年、東京遷都に伴って明治天皇が東上される折、公的ではないが、それに随伴したとの記録が残っている。そして明治十年二月十四日、大鳥神社の大宮司にあった時、天皇の大和御巡幸の際に、堺の行在所において、初めて天皇に拝謁を賜った。この後、明治二十七年の明治天皇大婚二十五年の奉祝として、京都府献上の画巻「和歌浦・三保望岳図」を制作、また翌年には広島大本営に駐在されている明治天皇に、京都美術協会から献上する画帖に作品を収めている。皇室に対して、並々ならぬ姿勢を示していた鉄斎である。

さらに明治十年七月には、神宮斎主であった久邇宮朝彦王が大鳥神社を参拝された折に殿下にお目通りしたのを契機に、久邇宮京都別邸で御前揮毫をするなど、久邇宮家との縁を深めていった。三十六年の別邸での揮毫の際には、その様子を邦彦王（香淳皇后御父君）自らカメラのシャッターを押されて写された写真が残っている。また、四十年九月には、久邇宮別邸で東園基愛侍従から明治天皇の御下命によって、作品を製作、献納するように伝えられ、鉄斎は「群仙高会図」「安倍仲麿明洲望月図」双幅を描いて翌年六月に献上した。この栄誉を自ら記念するため、「天子知名」の印を作成している。

その後、大正四年の大礼においては、京都市献上の画帖（図版番号16）に作品を収め、大正十三年皇太子御結婚に際しての東京府献上の名画帖「瑞彩」（図版番号45）においてはその筆頭となり、また同時に京都市より久邇宮家を通じて制作依頼のあった画幅（図版番号47）を献上した。八十歳に至り、なお存在感を示した鉄斎であった。帝室技芸員決定の当時の新聞は、鉄斎について「京都における南画家として、また学者として、将た奇人として有名で、実に現代文人画の第一人者である」と記している。この大正期に燦然と輝いた老画伯は、十三年十二月三十一日、八十九歳の生涯を終えた。

一方の山元春挙は、明治四年（一八七一）、現在の滋賀県大津市膳所の生まれである。春挙は、十六年頃、四条派の野村文挙に入門し、その後、森寛斎に師事して円山派を学んだ。十九年の京都青年絵画共進会に出品して一等褒状を受けたのを皮切りに、各種博覧会、展覧会に出品して受賞を重ねて頭角を現し、竹内栖鳳と共に明治後期の京都画壇を代表する画家となっていた。

春挙の作品は、展覧会に出品、受賞する中で、宮内省で買い上げられ、御用画となった作品も多い。円山派の写実性を学び、その伝統性を保持する中で、さらに渡米や登山の体験、そして洋画から学び得た独自の遠近法を取り入れ、色彩感豊かな、装飾的な山水図を得意とした。そうした作風は、宮殿装飾用に適していたとも言える。

大正期に入って、より一層、皇室への重要な作画が続く。大正二年には青山離宮御座所の杉戸絵、五年には立太子礼に際しての御用命画「晴天鶴」（図版番号21）、十二年には皇太子御結婚の京都府献上の作品「祥瑞図（六曲一双）」屏風、十四年の大正天皇大婚二十五年に際しては、その儀式に用いる装飾画「智仁勇」（図版番号62）を制作したほか、京都華族からの献上画「富士山・琵琶湖図」（図版番号61）を描いた。さらに昭和期に入って、三年の大礼の際には、主基地方屏風の制作を担当、同年には大正十四年の宣仁親王成年式の御祝いとして大正天皇より御下命のあった「春の海（六曲一双）」を完成して納めている。また五年には皇太后（貞明皇后）より茶室用掛軸を依頼されるなど、大正期を中心に、皇室御用画の中心的存在でもあった。この他、久邇宮家の襖絵などの制作にも携わっている。

昭和八年七月、六十一歳にて死去。彼の絵の如く、画家としては壮大な足跡を残した日本画家であったとも言える。

（太田）



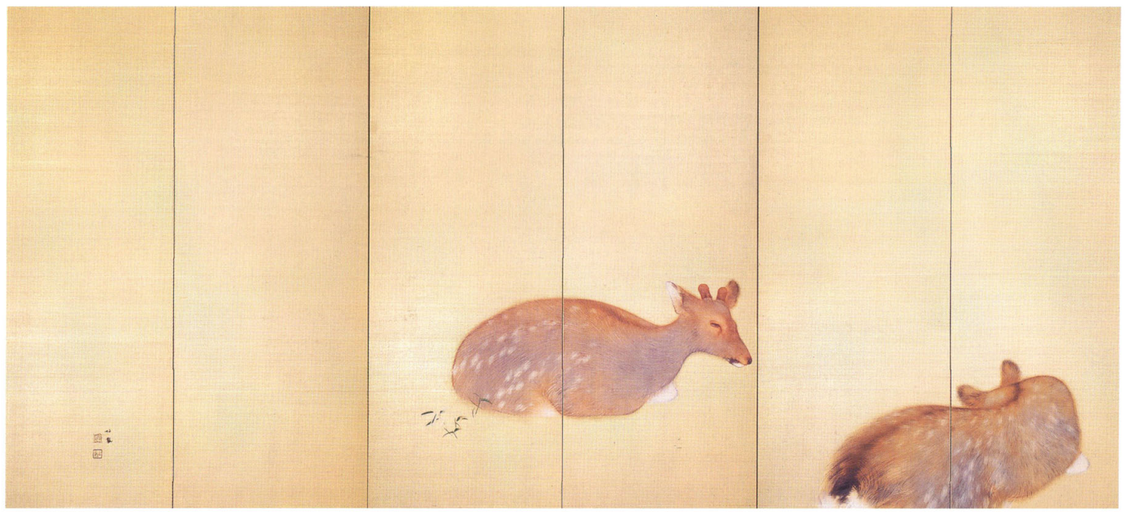


右隻

48　和暖

竹内栖鳳　六曲一双より右隻　大正13年（1924）
絹本着色　本紙162.4×354.0

京都府知事よりの献上。古来より、神、あるいは神の使いとして吉祥画に描かれる鹿を主題とする。若い雄鹿を中心に、穏やかな表情の鹿の家族が睦まじくたたずむ様子には、皇太子（昭和天皇）の将来が、子宝に恵まれ、末永く平穏であるようにとの願いが込められているのであろう。竹内栖鳳（1864～1942）は、山元春挙と同じ頃、京都画壇で活躍した画家で、伝統的な四条派の画風に西洋画法等を取り入れ、独自の画風を展開した。動物が好きで、その写生をもとに多くの作品を遺した栖鳳らしく、吉祥画題の鹿を、明るい金地に余計な背景を描かず、まさに画題そのままの穏和でほんわかと暖かさが伝わる画面に仕上げ、新鮮味溢れる吉祥図屏風となっている。　<展示　第3期-18>



<参考>左隻

コラム

大正十三年皇太子御結婚奉祝献上品

「御飾棚」「御飾品」および「御屏風」について

大正十三年一月二十六日、皇太子（昭和天皇）と久邇宮良子女王（香淳皇后）の御結婚の儀が執り行われた。これに先立ち、前年の十二月にこの御慶事を奉祝して、文武官一同より飾棚、棚飾品の目録が献上された。ここに紹介するのは、目録献上後に実作品の製作が開始され、昭和三年の完成までに五年の歳月が費やされた飾棚と棚飾品の一式、および屏風である。この一式は現在、当館に引き継がれており、今回の展覧会では棚飾品も含め、その全容を当館では初めて紹介している。この製作には、大正期を代表する著名な作家たちが総勢一三五名参加しており、全体が飾り付けられた際には、その規模、完成度をみてもこの時期を代表する作品であることは間違いない。製作は東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部、以下美校に略す）に依嘱された。東京芸術大学に現在保管されている依嘱事業に関する資料では、飾棚の製作は美校の校長、正木直彦自らが依嘱者となり、美校に製作を依嘱している。この資料では依嘱事業の項目のなかに棚飾品や屏風は含まれていないが、これらの製作にも美校の教官や卒業生が多く参加しており、美校が大きく関与していたことに違いはない。また、正木が記した『十三松堂日記』には、この事業に関する記述が数多く見られ、正木が意匠の決定にも深く関わり、各工芸家へ製作を直接に依頼するなど、実際には正木自身が製作の指揮をとっていた様子が読み取れる。この日記において献上品についての記述は震災後まもない大正十二年十月二十二日から始まる。十二月末にはその概要がまとまり、製作の準備が始められた。献上品の内容は、蒔絵螺鈿で装飾された棚が一対、それに付属の棚飾品二曲一双の屏風が二組である。棚の意匠、棚飾品の構成、屏風の意匠はいずれも美校の図案科教授島田佳矣が担当している。

まず、一対の棚は、それぞれ昭和天皇、香淳皇后へ献上され、同じ棚形式ながら、蒔絵螺鈿で装飾された文様は天皇の分が鳳凰に菊、皇后の分が鶴に桐である。棚の文様は緻密に計算されて、棚の各面に配されており、同文様によって各部棚板、側板と引き戸が埋め尽くされている。いずれも飛ぶ姿の鳳凰と鶴がそれぞれ菊と桐の花枝を銜えるというもので、蔓草様にアレンジされた菊と桐の花枝が面を埋めている。これは奈良時代の工芸品にみられる花喰鳥の文様に範をとったもので、蒔絵の金銀、螺鈿の貝の色の配色に工夫を加えて構成されている。この飾棚は、日本の古美術研究の中から新しい図案を製作してきた島田の代表作に位置づけられる。

飾棚の製作に関わった工芸家には、意匠を担当した島田の他、十九名が参加している。一対の棚の素地、塗り、金具は同じ工芸家が担当しているが、蒔絵と螺鈿については、棚それぞれに参加した工芸家が異なる。蒔絵は美校の中に作業所が設けられて製作が進められたと伝えられ、数多くの蒔絵師が製作にあたった。天皇へ献上の分は、河面冬山を筆頭に美校の卒業生を中心に七名の蒔絵師の名前が記される。また、螺鈿を担当した片岡華江は、美校でも教鞭を執った帝室技芸員川之邊一朝の門人である。一方、皇后へ献上の分の棚は、梅澤隆真を筆頭に七名の蒔絵師によって製作された。梅澤は明治期を代表する蒔絵師柴田是真の三男であり、次席の高井泰令は柴田の高弟池田泰真の門下である。高井は当時の漆芸界の実力者、赤塚自得と姻戚関係にあり、赤塚門下である三田村自芳がこのグループにも含まれている。このように天皇の棚は美校卒業生を主に、皇后の棚は柴田是真、池田泰真の流れをひく蒔絵師たちを中心とし、いずれの棚も赤塚門下の蒔絵師が加わり製作されている。このように一対の棚を担当した蒔絵師の系譜に、当時の東京の漆芸界の二面が示されていることも興味深い。『十三松堂日記』には大正十四年三月三十一日に「島田とともに齋藤富卜宅に行きて献上書棚を観る」とありこの棚の素地のことと考えられる。この後、昭和二年五月二十一日に「献上御書棚製作所を巡覧す　次第に進行せるもやうなり」とあり、蒔絵の作業場のことであろう。このように、献上品の概要が決定された大正十二年末から、図案の考案、素地の製作、塗りの作業を経て、蒔絵と螺鈿による装飾がなされるまで数年がかけられている。

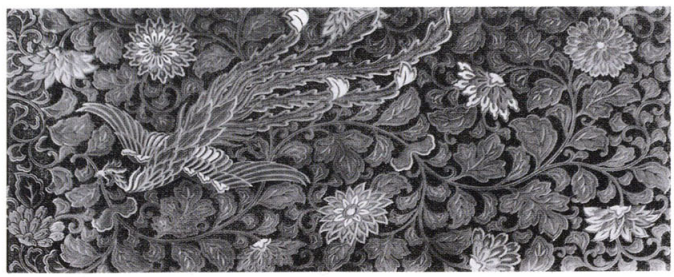
次に、それぞれの棚に付属する棚飾品は全部で四十二件、これに刺繍や綴織による華やかな褥（置物をのせる敷物）が二十三件付属する（現在、棚飾品と褥がそれぞれ一件ずつ亡失している）。棚飾品は、天皇と皇后の棚それぞれ対称となるよう配置されているが、天皇の棚では、鳳凰や龍、菊花といった象徴的な主題による飾皿や置物が多く含まれ、蒔絵の短冊箱や香盆がいずれも岩に波濤文様であることなど、全体的に男性的な力強い意匠でまとめられている。一方、皇后の棚の棚飾品には、美しく飾られたさまざまな

小物を納めた裁縫道具や化粧道具が加えられており、花瓶や文房具の意匠にも花や蝶が取り上げられ、置物には唐子遊が、帖鎮（重し）には香淳皇后の干支である兎がかたどられる等、女性らしい優雅な趣が各所に認められる。これら棚飾品四十二件の製作には、図案には島田ほか二名、彫刻家工芸家五十三名、棚飾品の一つである画巻「現代風俗絵巻」には画家十二名が関わっている。

また、屏風は二曲一双のもので、漆塗で仕上げられた屏風の表面に、さまざまな材料と工芸技法による扇面、色紙形が各一隻に十二面ずつ貼り込まれている。合わせて四十八名の彫刻家工芸家による扇面、色紙形の貼り交ぜ屏風である。その主題は伝統的な吉祥図や山水図が主となっている。屏風下の腰の部分が透かし彫りで、天皇へ献上の分は菊、皇后へ献上の分は桐の文様となっている。

棚飾品および屏風の扇面、色紙形を担当した各作家に製作が依嘱されたのは、実際には昭和三年二月のことであった。先行していた飾棚の作業が進み完成の目処がついてのことと思われる。正木の日記には、同年の二月から三月にかけて、依頼を受けた作家たちが次々と図案を携えて正木を来訪する様子が記される。このことから、各作家が考案した図案の最終決定に正木が関わっていたことが知られる。棚飾品には当時、帝室技芸員である高村光雲をはじめ、日本美術協会等で活躍してきた大家とされる作家が中心に据えられている一方、屏風の担当者は年代層も幅広く美校の卒業生を中心に三十代の若手も含まれているのが注目される。若手のなかには伝統的な表現を貫く作家がいる一方で、欧米の影響を受けて造形的にも新しい工芸を目指していた前衛的な作家も多い。地域的に見ると、製作に関与した作家は、東京を中心に京都、石川、富山などから幅広く選出され、遠くは長崎から、鼈甲細工の部分を担当した江崎栄造が選ばれている。地方の作家では、現在はほとんどその作例が知られていないが、城端蒔絵を得意とし、農商務省工芸展覧会（農展）とその後の商工省工芸展覧会（商工展）に出品を続けた富山の岡田雪城や、当時全国的には無名ながらその後に帝展などで活躍し、戦後に無形重要文化財保持者に認定された輪島の前大峰が含まれている。このように作家がさまざまに選ばれた背景には、正木の人脈の広さに加え、正木とともに作家の人選にも関わった島田が、図案指導に日本各地を回り、展覧会等の審査員を歴任していたことも関係があろう。特に、この献上品の一大事業が進められた大正十年代から昭和初期にかけて、工芸界は大きな変動の時期にあった。当時の官展である帝国美術院展覧会（帝展）には工芸の分野は含まれておらず、工芸は美術作品としては発表の機会を狭められている状況にあり、新進の工芸家たちが活動の場を求めて新しい工芸団体を次々に結成していた時期でもあった。その中、昭和二年にはついに帝展に「美術工芸」部が新設されることになる。こうした動きの中でそれぞれの分野において指導的立場にあった工芸家たちが、一堂にこの献上品製作にかかわっていることを考えても、重要な作品群といえよう。完成した各棚飾品、扇面色紙形は、いずれもその作家が一番得意とした手法による優品である。昭和三年十月に総てが完成し、同月十九日二十日両日、美校において関係者を招いての内覧会が行われた。実際に作品一式が昭和天皇と香淳皇后のもとに納められたのは翌四年四月のことである。作品の各写真と目録を収めた『御成婚奉祝献品図録』が同年に東京美術学校文庫より発行されており、献上当時の全容を知る事が出来る。なお、これに掲載されている正木による序文、作品と作者の目録を資料として本図録125～128頁に転載している。

（五味）





各御飾棚の背面板（右・鳳凰菊文様、左・鶴桐文様）

〈参考〉献上当時の御飾棚と御飾品



「御飾棚　鳳凰菊文様蒔絵」と「御飾品」一式（完成時の様子）
（『御成婚奉祝献品図録』より）



「御飾棚　鶴桐文様蒔絵」と「御飾品」一式（完成時の様子）
（『御成婚奉祝献品図録』より）



49-1　御飾棚　鳳凰菊文様蒔絵

島田佳矣ほか　1基　木製漆塗、蒔絵、螺鈿　50.3×150.3×156.0　<展示　図版番号49の「御飾棚及び御飾品」はすべて第4期>

49-2　彫金花瓶　鶴

伊藤正見　1点　銀、彫金　D.14.0、H.21.0





49-3　鍛金飾壷　五芝ノ意

黒川義勝　1点　銀、鍛造　D.19.2、H.14.3

49-4　七宝飾皿　胡俗楽苑

稲葉七穂　1面　七宝　D.24.9、H.2.2



49-5　磁器花瓶　花鳥文様

板谷波山　1点　陶磁　D.14.5、H.18.0



49-6　木彫置物　養蚕天女

高村光雲　1点　木彫　9.4×11.8×25.0



49-7　鋳金置物　龍

大島如雲　1点　銅、鋳造　16.5×18.5×12.7



49-8　鋳金飾壷　銀象嵌文様
津田大壽　1点　銅、鋳造　D.14.5、H.18.4



＜参考＞　磁器飾壷　獅子牡丹唐草
宮川香山（二代）（破損）　陶磁



＜参考＞　磁器飾皿　鳳凰文様
清水六兵衛（五代）　1点　陶磁



49-9　蒔絵短冊色紙筥　岩濤文様
迎田秋悦　一具　蒔絵　短冊箱39.3×9.5×4.4、色紙箱24.1×21.5×4.6



＜参考＞　磁器香炉　菊文様
清風與平（四代）
（火舎のみ現存）
陶磁



49-10　七宝香合　宝相華文様
安藤重兵衛　1点　七宝
D.6.5、H.2.5

49-11　蒔絵香盆　岩に浪
戸島光孚　1枚　蒔絵
24.6×33.7×2.2

49-12　彫金写真立　桜・菊

清水亀蔵、鈴木美彦　一対　銀、彫金　（桜）24.2×18.2×1.1、（菊）24.3×18.2×1.1



＜参考＞　陶器置物　岩上鴛鴦

沼田一雅　（亡失）　陶磁



49-13　鋳金花瓶　千鳥文

香取秀真　1点　銅、鋳造　D.8.8、H.15.2



49-14　蒔絵硯筥　菊文様

赤塚自得　1合　蒔絵　24.5×23.3×10.0

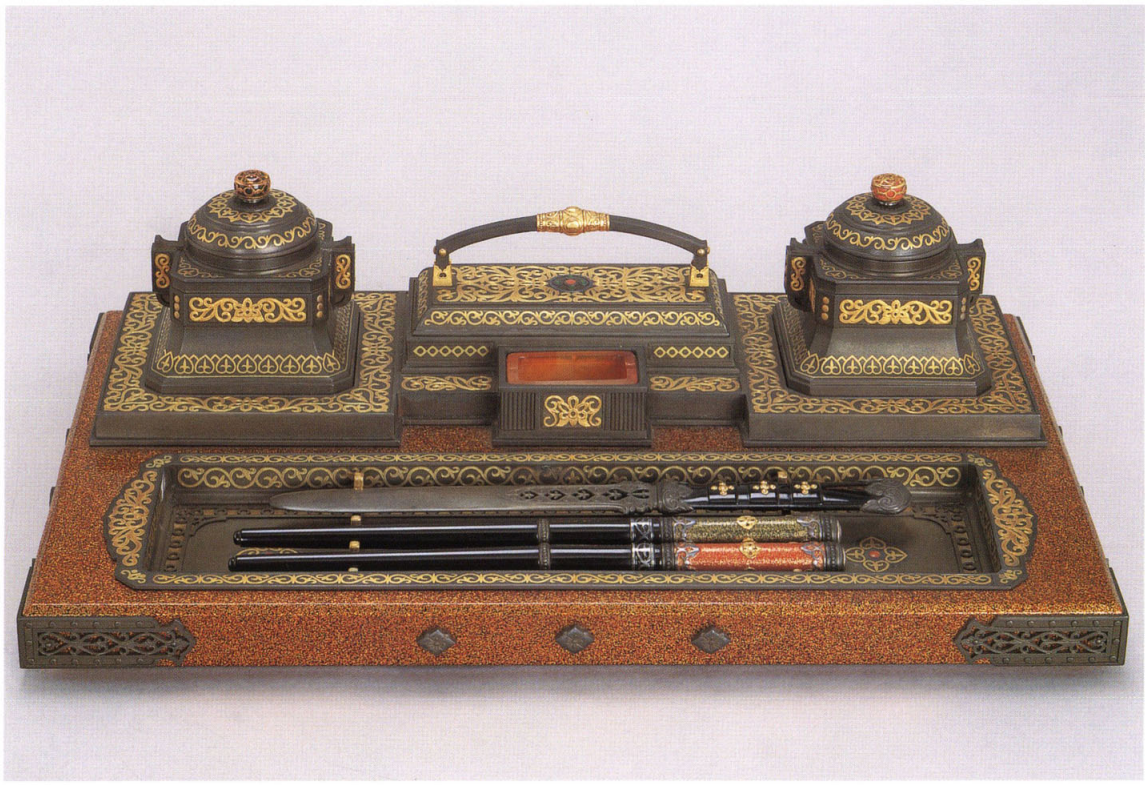


49-15　蒔絵手筥　瑞鳥霊獣文様

六角紫水　1合　蒔絵　30.6×23.6×11.5

49-16　玳瑁装身具　鴛鴦菊文様

森田佳鳳（図案）、江崎榮造（製作）　一具　玳瑁　（外箱）31.6×35.4×9.5



49-17　彫金洋式文房具

千頭庸哉（図案）、山川孝次（製作）　一具　彫金　19.9×32.2×10.7

49-18　螺鈿軸盆　藤花菖蒲文様

豊川楊渓　1点　螺鈿　38.1×13.9×2.8

49-19　現代風俗絵巻（軸盆に飾った姿）

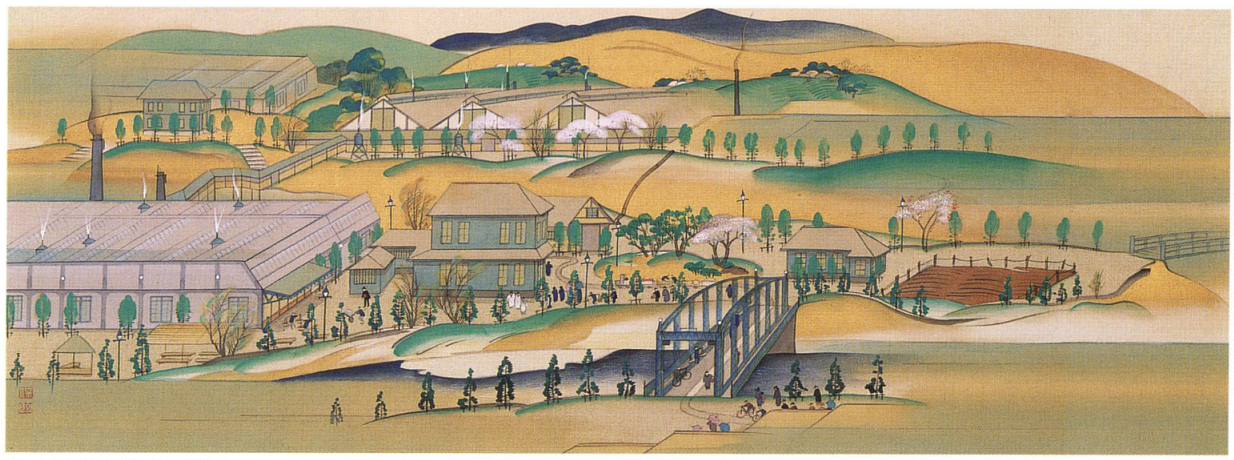
1巻　本紙縦28.4、本紙各長79.1～150.5



松岡映丘「宮城」

岩田正巳「収穫」

遠藤教三「百貨店」



高木保之助「紡績工場」

穴山義平「捕鯨」

山田秋衛「東京駅」

山口蓬春「ゴルフ」

（彫金写真立　桜花）　16.3×25.7

（彫金写真立　菊花）　16.6×25.0

（磁器花瓶　花鳥文様）　18.8×18.9

（鍛金飾壷　五芝ノ意）　18.0×19.3

49-20　染織繍組器褥

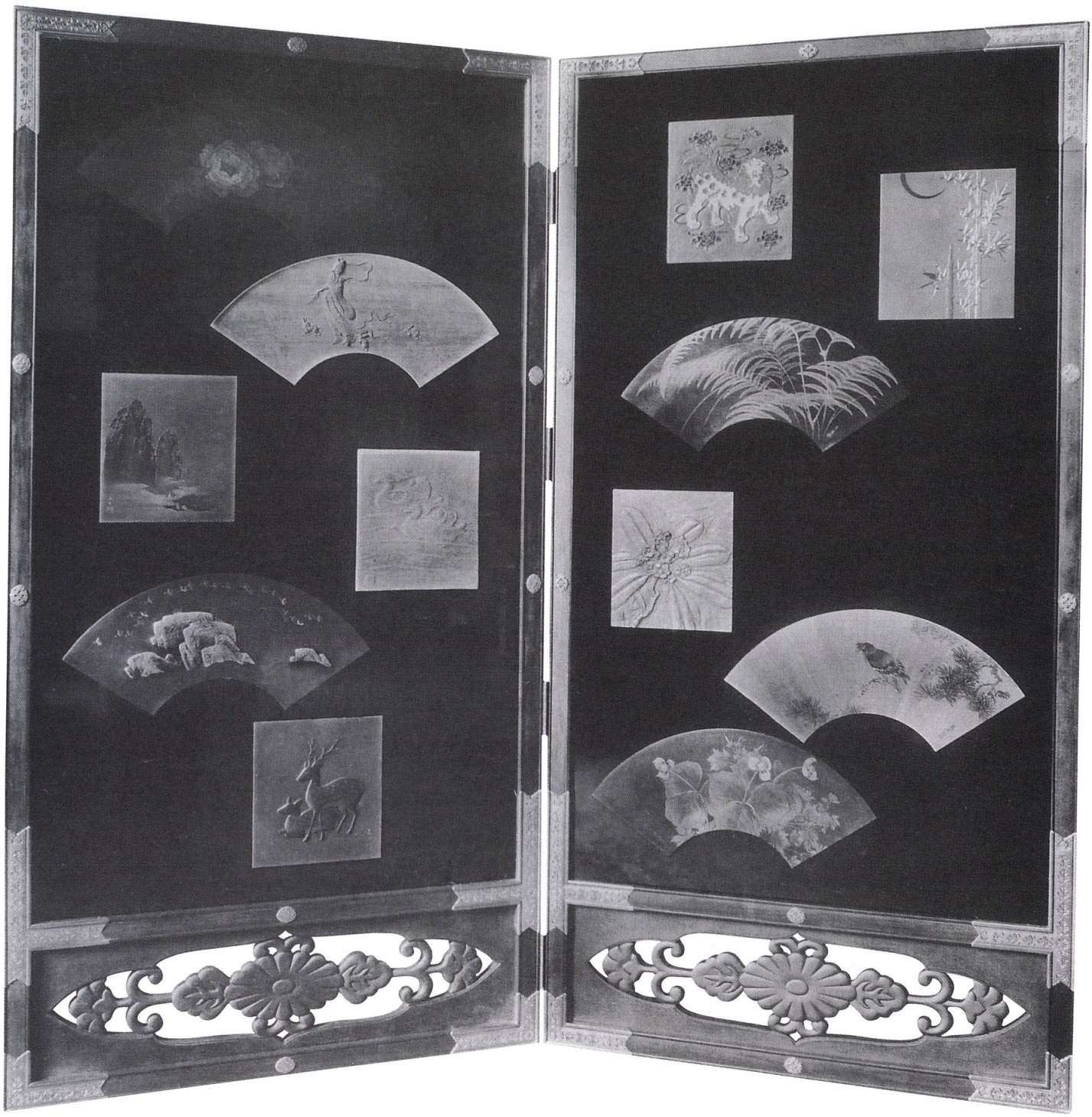
山鹿清華　一式のうち
絹、革、刺繍、綴織

（七宝飾皿　胡俗楽苑）　24.5×23.0



49-21　二曲御屏風　各種工芸扇面色紙

島田佳矣ほか　二曲一双
木製ほか　各総199.4×203.0





神坂祐吉「蒔絵扇面　葵祭」 蒔絵



宮川明春「象嵌扇面　雁来紅」 象嵌

松田権六「蒔絵扇面　磯千鳥」 蒔絵



杉田禾堂「鋳金色紙　蓬莱山」 鋳造



河村蜻山「磁器色紙　獅子」 陶磁

高村豊周「鋳銅色紙　石楠花」 鋳造



50-1　御飾棚　鶴桐文様蒔絵

島田佳矣ほか　1基　木製漆塗、蒔絵、螺鈿　50.3×150.3×156.0　<展示　図版番号50の「御飾棚及び御飾品」はすべて第4期>

50-2　鍛金飾壷　唐華文様

藤本萬作　1点　銀、鍛造　D.15.4、H.24.0





50-3　磁器花瓶　果実文様

中村秋塘　1点　陶磁　D.14.6、H.24.9

50-4　木彫置物　童

山崎朝雲　1点　木彫彩色　10.3×13.2×25.5





50-5　鋳金花瓶　南天燭文様

佐々木象堂　1点　銅、鋳造　D.14.7、H.23.4



50-6　磁器飾壷　錦彩花卉
伊東陶山（二代）　1点　陶磁　D.15.3、H.23.8



50-7　七宝飾壷　唐花文様
安藤重壽　1点　七宝　D.13.6、H.20.5



50-8　蒔絵硯筥　梅花芦手絵

植松包美　1合　蒔絵　26.0×24.4×5.0



50-9　蒔絵色紙短冊筥　若松に雲雀　菊に鶉

由木尾雪雄　一具　蒔絵　短冊箱39.0×8.6×4.2、色紙箱23.5×20.7×4.3



50-10　牙彫置物　唐子遊

和田光石　1点　牙彫　15.2×18.2×13.5



50-11　錦綾帖　染織百五種

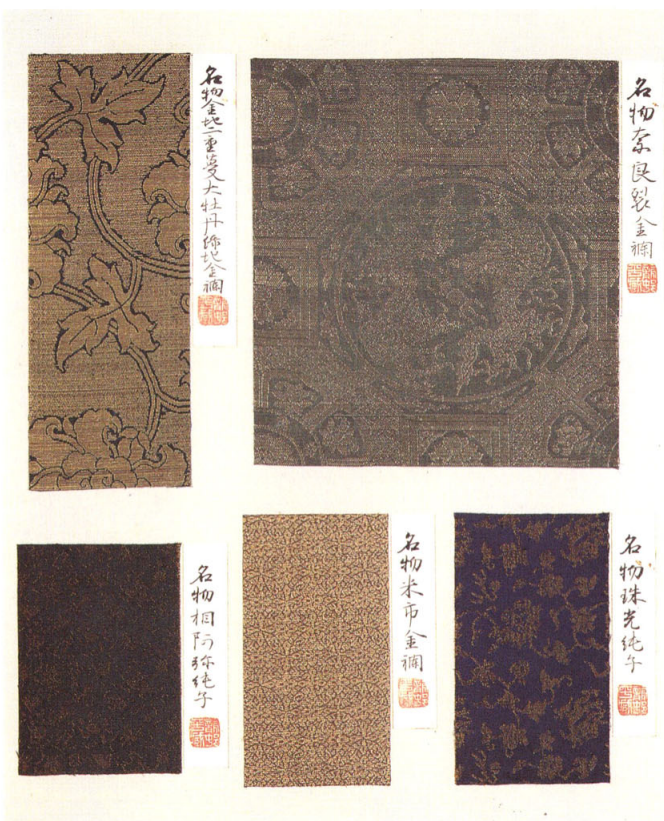
龍村平蔵　1帖　絹、織物　36.3×30.5×13.2



②正倉院宝物　獅噛文長斑錦、双鳳連珠文赤綾



①法隆寺　獅子狩文錦



④名物裂類



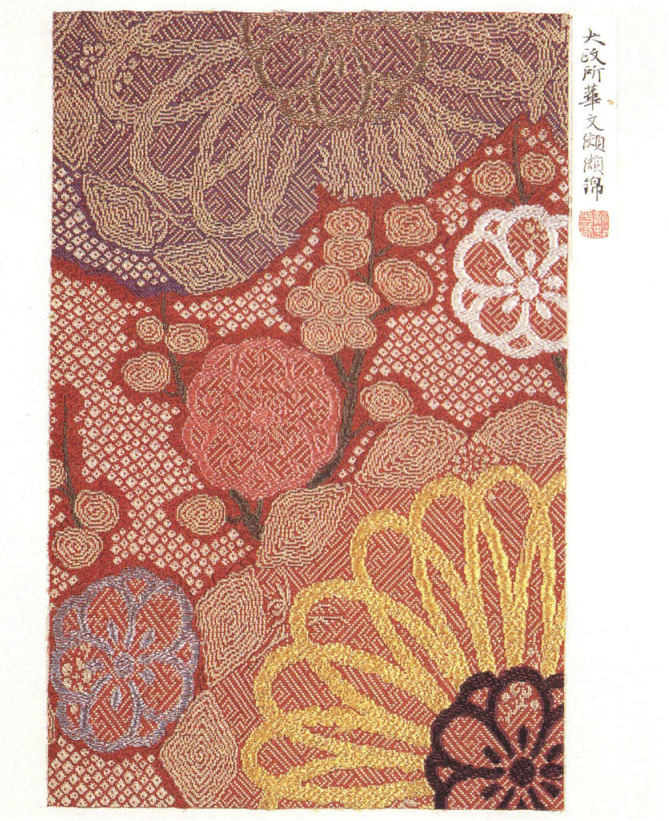
③正倉院宝物　唐花文夾纈絁



⑥名物裂類



⑤名物裂類



⑧大政所裂文繻繻織



⑦不老長生殿図文錦



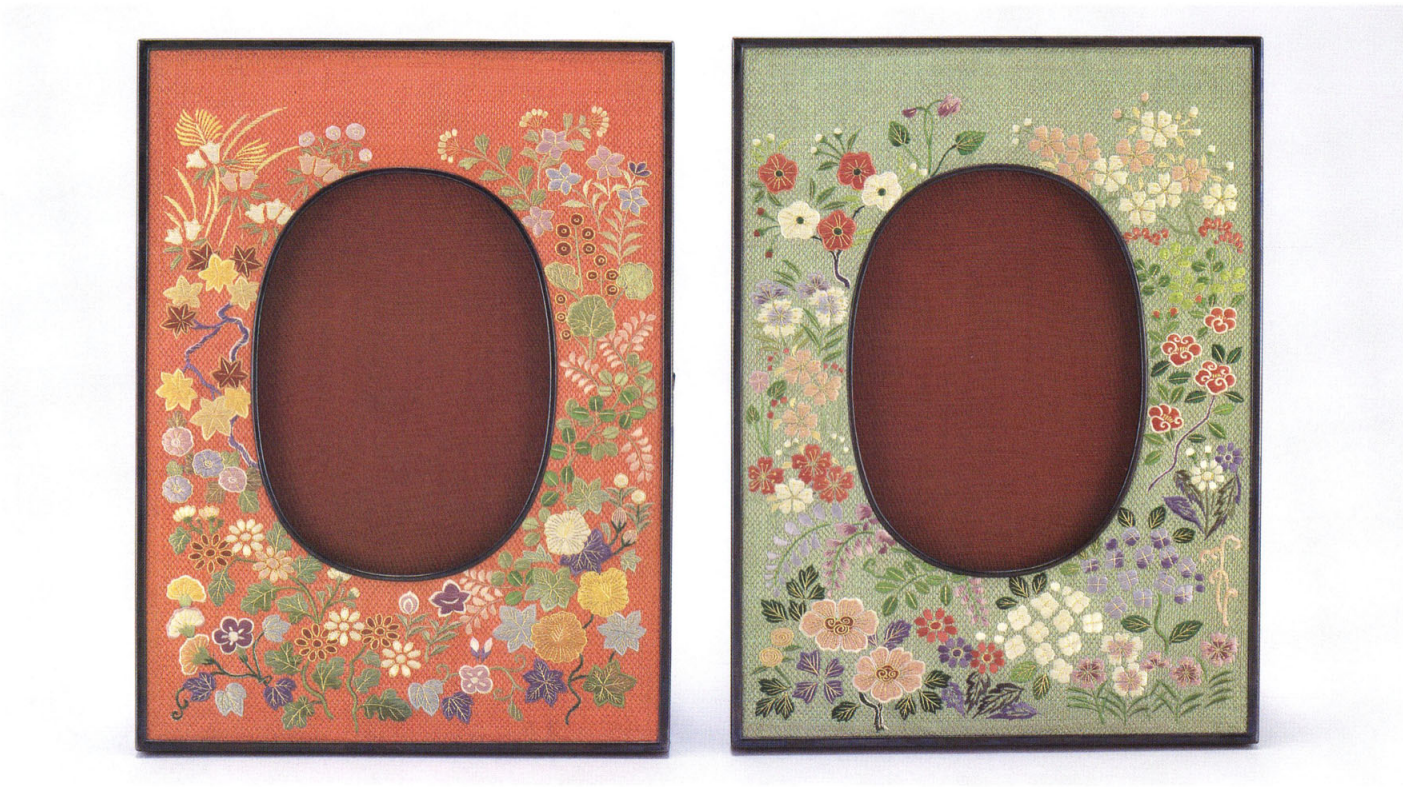
50-12　彫金帖鎮　兎

桂 光春　1点　銀、彫金　16.0×13.2×9.6



50-13　彫金花瓶　群蝶

船越春珉　1点　銀、彫金　D.15.7、H.9.5



50-14　刺繍写真立　春・秋

渡邊松華、黒田橘邨　一対　絹、刺繍　各24.2×18.1



50-15　磁器香炉　宝相華文様

石野龍山　1点　陶磁
D.11.8、H.10.6

50-16　堆朱香合　双鳥

堆朱楊成（二十代）　1合　堆朱
D.7.6、H.2.6

50-17　蒔絵香盆　撫子花文様

鶴田和三郎（二代）　1枚　蒔絵
24.5×33.5×3.6



50-18　裁縫筥並ニ道具

島田佳矣、木内半古ほか　一具　木製、象嵌　（外箱）33.6×24.2×11.1



内容品

50-19　化粧筥並ニ道具

島田佳矣、岩城倉之助ほか　一具　玳瑁、ガラス、陶磁ほか　（外箱）39.5×35.9×11.2

内容品



50-20　洋式文房具

島田佳矣ほか　一具　彫金　30.3×15.0×9.5



50-21　蒔絵手筥　菊花に鶺鴒文様

辻村松華　1合　蒔絵　29.0×22.2×10.7

（鍛金飾壷　唐花文様）
19.5×19.3

（磁器飾壷　錦彩花卉）
18.0×18.0

（牙彫置物　唐子）
23.0×26.5

（刺繍写真立　春）
14.8×26.0

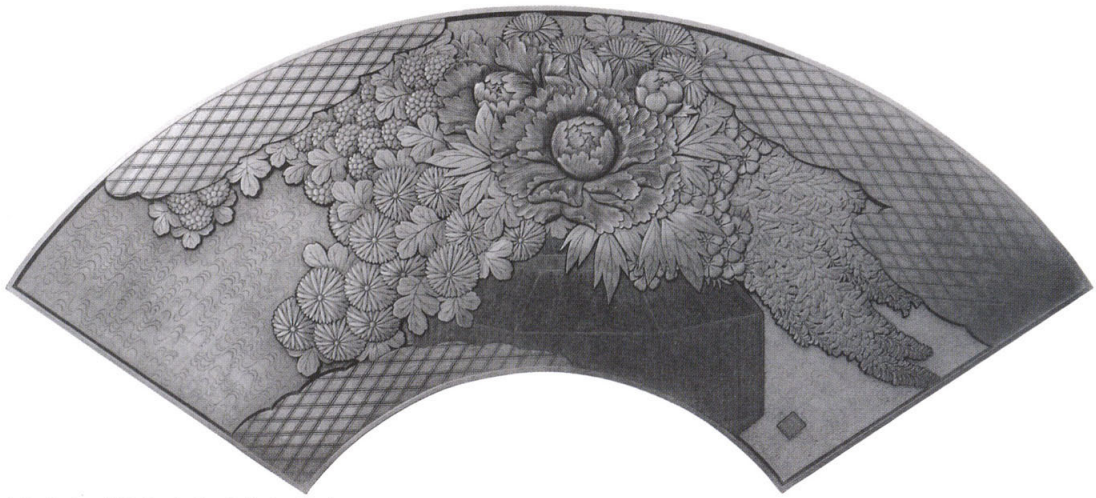
（七宝飾壷　唐花文様）
19.2×19.0

50-22　染織繍組器褥

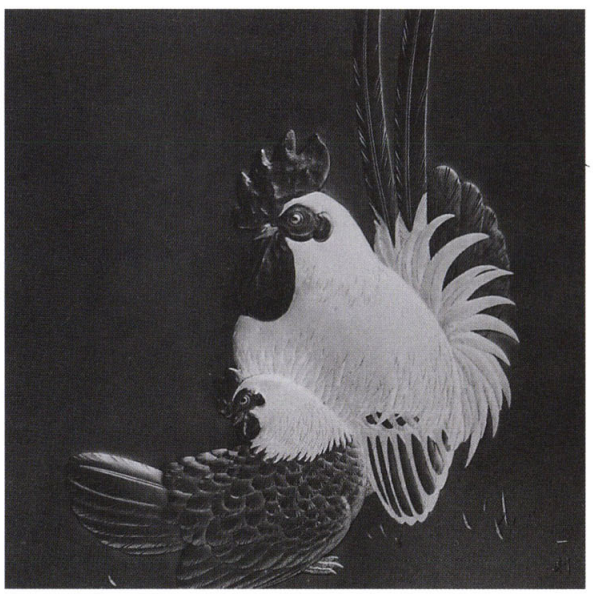
山鹿清華　一式のうち
絹、革、刺繍、綴織

50-23　二曲御屏風　各種工芸扇面色紙

島田佳矣ほか　二曲一双
木製ほか　各総199.4×203.0

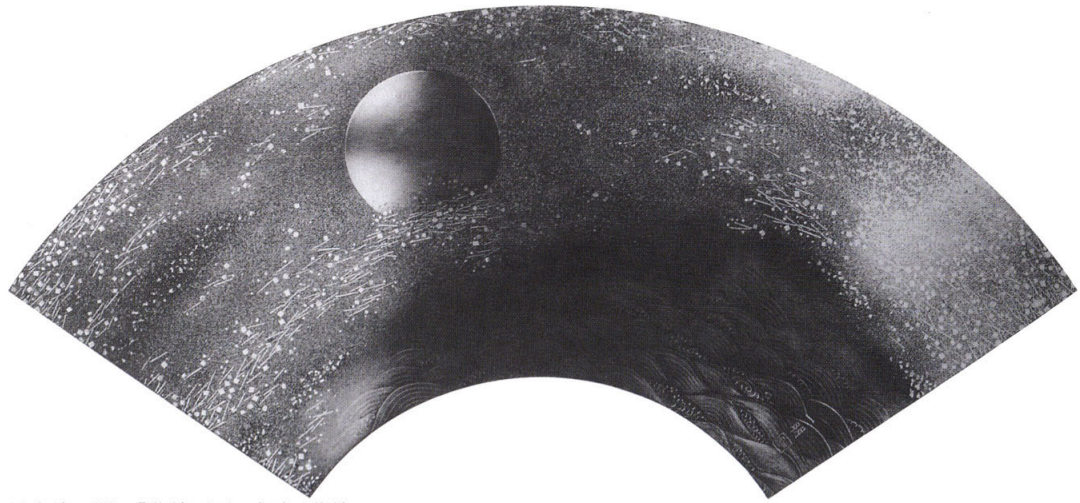


富樫光成 「堆朱扇面　花籠」 堆朱

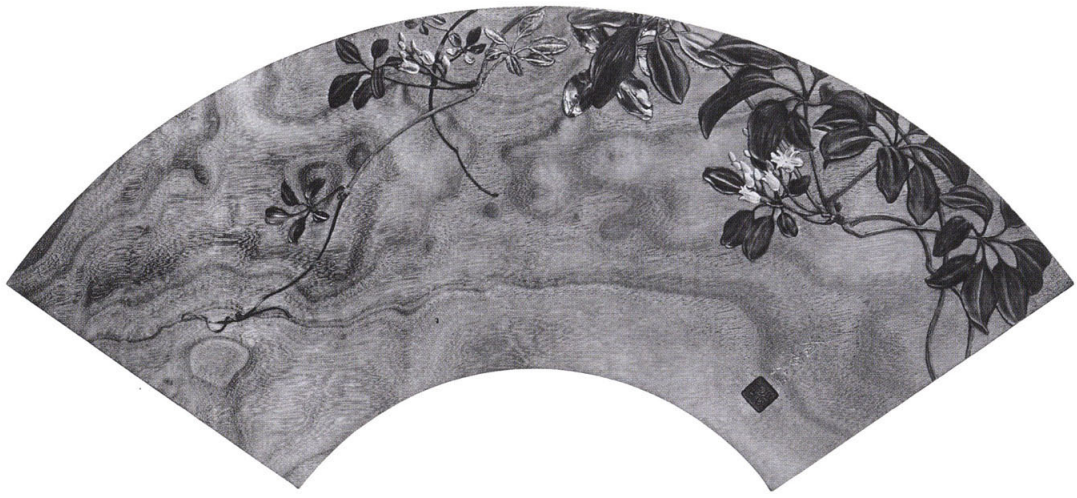


府川一則（三代）「彫金色紙　鶏」 彫金

諏訪蘇山（二代）「青磁色紙　鳩」 陶磁



川之邊一朋 「蒔絵扇面　旭」 蒔絵



木内省古 「象嵌扇面　あけび」 象嵌

前　大峰 「沈刻扇面　山水」 沈金

51　太陽の暦石の文鎮

1点　1923年頃　銅、鋳造
D.16.0、H.1.2

メキシコ大統領より。古代アステカ王国で15世紀後半に作られた、太陽の暦を浮彫りした大型の石彫を模している。古代アステカ人の世界観、宇宙観を表すもので、オリジナルの石彫は現在、メキシコ国立人類学博物館に所蔵されている。　<展示　第3期-5>







52　宝相華文胡蘆瓶

一対　中国・明時代（15～16世紀）　七宝
各D.42.0、H.93.0

中華民国大総統より。中国の古七宝特有の青地に八つの仏教的な吉祥物を散りばめた八吉祥を配し、さらに器形をどこまでも蔓を伸ばして多くの実をつける瓢箪形にして、子孫繁栄を願う祝意が込められている。　<展示　第3期-6>



53　切子硝子花瓶

ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場
1点　1923年頃　ガラス
D.17.8、H.40.5

ベルギー国王アルベール1世より。胴部および底部には日本の皇室への贈り物らしく菊花文のカットがほどこされている。　<展示　第3期-7>



54　赤切子硝子花盛器

ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場、ユベール・フアルジュ(デザイン)
1点　1923年頃　ガラス
D.36.0、H.39.0

ベルギー国王アルベール１世より。ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場は、ベルギーのみならずヨーロッパを代表するクリスタルガラスの製造メーカーで、本作でも赤被せガラスの鮮やかさと高度なカット技術を見ることができる。　<展示　第3期-8>

55　玻璃飾壷

オレフォッシュ・ガラス工場、エードヴァルド・ハルド（デザイン）
1点　1923年頃　ガラス
D.25.0、H.44.5

スウェーデン国王グスタフ5世より。スウェーデンのアール・デコ期を代表するガラス・デザイナー、エードヴァルド・ハルド（1883～1980）がデザインした、王家の紋章を中心とする格調高い文様が、見事なエングレーヴィング技法によって表されている。　<展示　第3期-9>



56　菊銀杏文花瓶

国立セーブル製陶所、C.ピアン（絵付デザイン）
一対　1908年　陶磁ほか
各D.40.0、H.65.0

フランス国大統領より。釉下彩技法により微妙な色合いの違いをつけて、銀杏の葉や菊花の重なりを描き出し図案の魅力を引き出した、技術、デザインともに20世紀初頭のセーブル製陶所を代表する優品である。　<展示　第3期-10>

大正14年　大正天皇大婚二十五年（銀婚式）

明治三十三年（一九〇〇）五月十日に御結婚された大正天皇と貞明皇后は、大正十四年に大婚二十五年、一般でいう銀婚式を迎えられた。この時、大正天皇はすでに体調を崩されて御静養中であり、晴れの場には出席されなかった。当日の新聞記事は、この日の様子について、「午前のうちに賢所において掌典長が祝詞を奏し、両陛下の御代拝が玉串を捧げ、礼拝した。また豊明殿において祝宴が開かれ、摂政である皇太子殿下を中心に、秩父宮殿下、高松宮殿下、各皇族殿下・妃殿下方、総理大臣はじめ、各大臣や議員、大使らが集まって祝杯を挙げ、歓談したという。陛下は、いつも通り、午前六時半に起床され、八時に皇后陛下とご朝食、十時には陛下はフロックコート、皇后陛下は洋装の通常礼装にお召し替えになり、御座所にて皇太子殿下、秩父宮殿下、高松宮殿下、澄宮様から直にご祝辞を受けられ、ご幼少であった澄宮様は祝宴に出席されないため、両陛下と共に奥でのお祝い膳に着かれた」と記している。

大正天皇の体調が優れない中での御慶事で、お祭り騒ぎは避けるという方針があったが、花電車の運行は行われ、また寿ぎの賀表や賀状、電報は山高く積まれていたという。

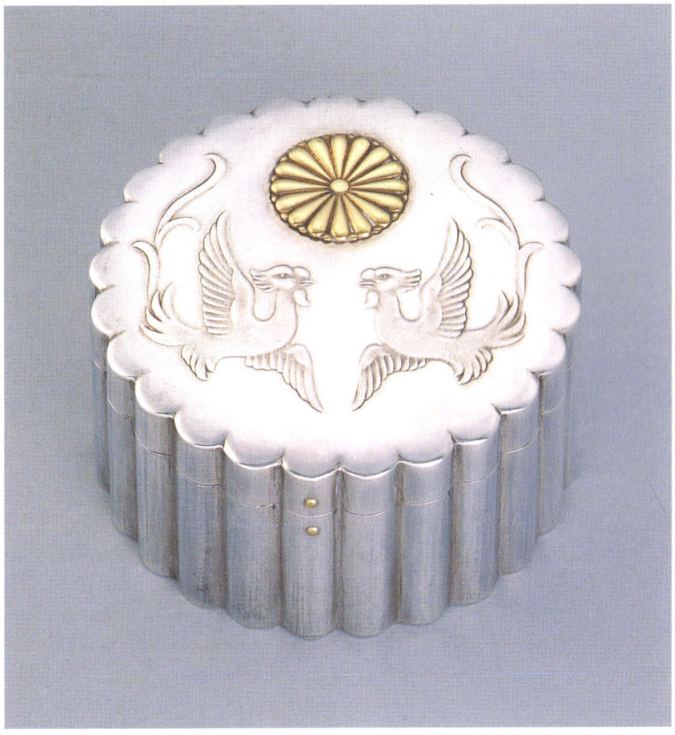
こうした御慶事に際し、数量的には大礼や御結婚に比べて格段に少なくなるのではないかと推察されるが、その奉祝の品は熟慮されて製作された佳品が見られる。

大礼以来、各御慶事には東京美術学校に依嘱制作された作品があったが、大婚二十五年においては、東宮職依頼の「二見ヶ浦置物」（皇太子御夫妻より大正天皇と貞明皇后へのお祝いの品）、東京市が依頼した「舞楽置物　一対」、そして文武官一同よりの献上品「画巻画帖御飾棚御飾品　二基」という大作があった（詳細と図版は121頁以下参照）。この棚と棚飾品については『大婚二十五年奉祝献品図録』に、その序文に献上意図、経緯、特徴が記され、詳細な目録、図版が載せられる。それによれば、この棚は画巻と画帖の制作に力点が置かれており、いずれも〝当代知名の画家を選ひ〟描かせた。画冊は吉祥図、花鳥図、風景などの計百図を四冊に、そして画巻は日本各地の現代風俗画計四十八図を四巻に仕立てている。特に各地の描写を描いた画巻は、大正天皇が皇太子時代に意欲的に各地を行啓された姿を想いつつ、また体調を崩されてお出ましになれない天皇をお慰めする意味もあろうか。前年の皇太子御結婚をお祝いしてその制作が始まっていた「御飾棚と棚飾品」に引き続き、しかしその特徴が異なる大作二件の製作は、注目すべき存在である。



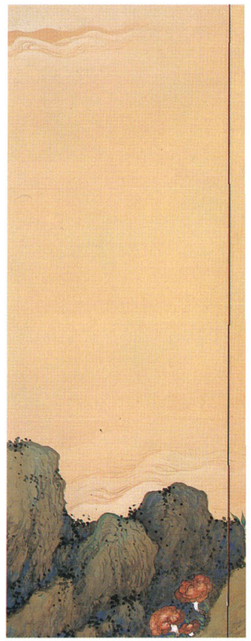
57　双鶴置物形ボンボニエール
1点　銀製　台5.5×6.3

<展示　第3期-3>



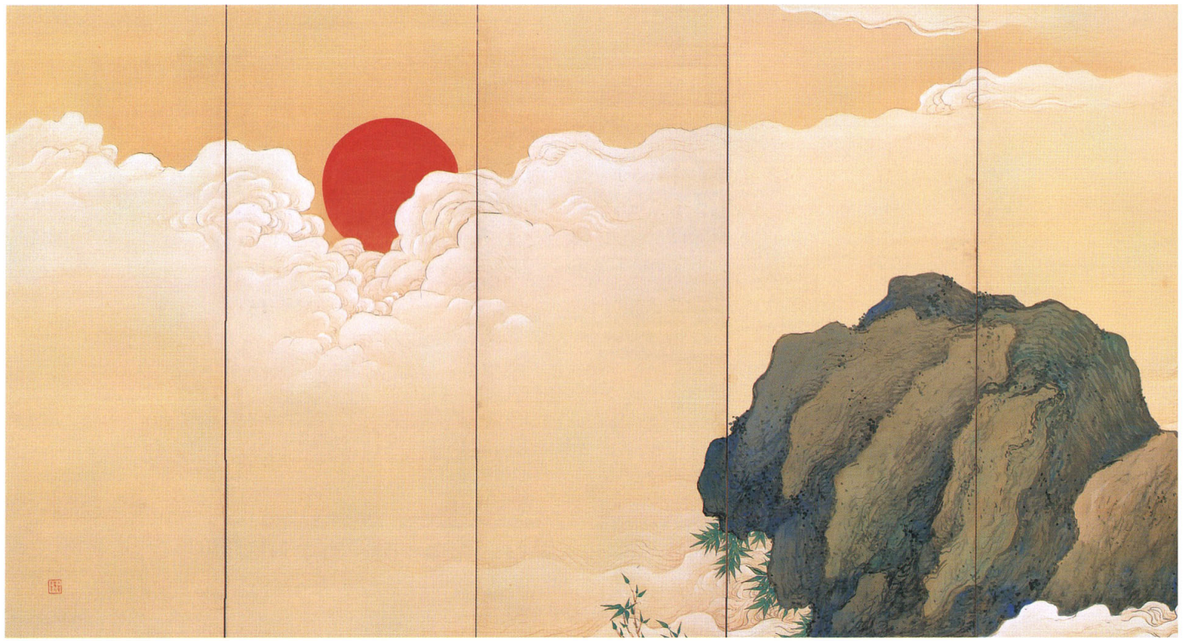
58　菊花形鳳凰文ボンボニエール
1点　銀製　D.5.9、H.3.1

<展示　第3期-4>





右隻





左隻

59　朝陽鳴鳳之図

小室翠雲　六曲一双　大正14年（1925）
絹本着色　本紙各161.5×366.0

日本銀行総裁よりの献上品。山水図に多くの秀作を遺してその名が知られる小室翠雲（1874～1945）による。霊芝や岩などの添景描写には翠雲らしい描写も見られるが、主題の鳳凰は、彩色も含めてこれまでに知られてきた翠雲の作品からは想像し難い意表をつかれるものである。主題は、作品の依頼主の要望によるのではないかとも推察出来るが、献上のために鳳凰という画題に挑んだ翠雲の意気込みは、大画面に緻密で丁寧に描いている様子からも十分に窺える。　<展示　第1期-19>



60　鳳凰之図

結城素明　対幅　大正14年（1925）
絹本着色　本紙各173.1×71.2

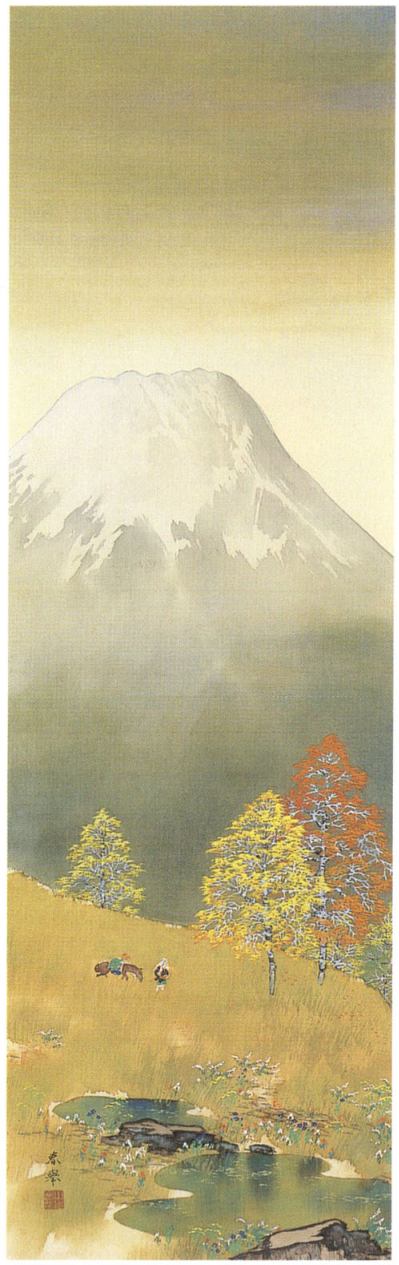
内閣総理大臣はじめ、国務大臣より献上。桐に鳳凰という、伝統的な吉祥画題をここまでモダンに、鮮やかに描いた結城素明（1875～1957）は、日本画、洋画を学んで文展、帝展を中心に活躍し、東京美術学校の教授などを務めた。　<展示　第1期-20>

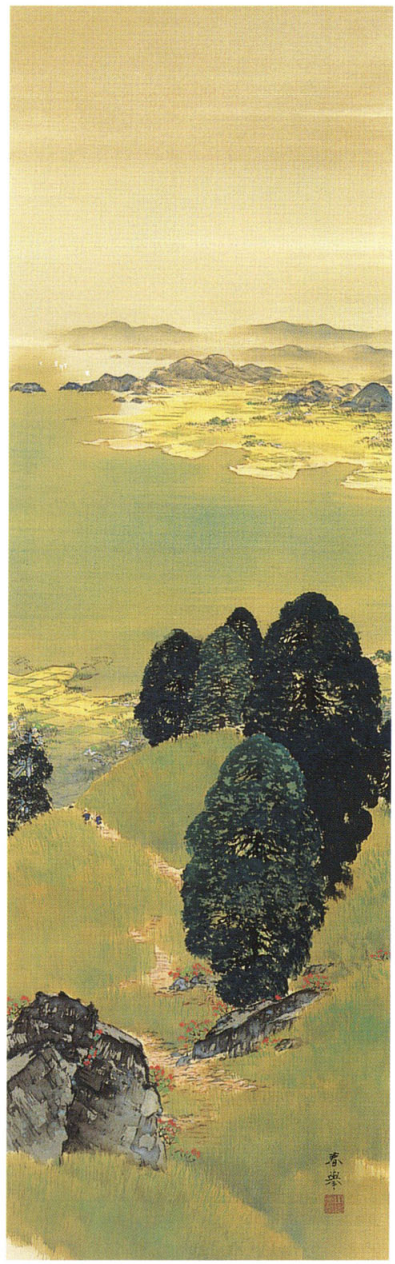
61　琵琶湖・富士図

山元春挙　対幅　大正14年（1925）
絹本着色　本紙各117.9×36.0

京都華族一同より献上。春景の琵琶湖と秋景の富士を対幅とする。

<展示　第3期-20>





（次ページ作品）62　智仁勇

山元春挙　対幅　大正14年（1925）
絹本着色　本紙各170.8×113.8

大正天皇銀婚式の御祝いに際して、豊明殿西溜の装飾用掛物として製作。「智仁勇」とは、中国の経書『中庸』に「智仁勇三者、天下之達徳也」と記され、普遍の徳とされる。なお本図については、「鷹ノ小禽ヲ捕フルハ勇ナリ、以テ暖ヲ取ルハ智ナリ、而モ之ヲ食ハズシテ放ツハ仁ト云フ、伝説ニ基キテ謹写」との添え書きがある。春挙は、円山派の流れを汲む画家で、応挙の「雪松図」を意識して、自身の遠近法や陰影法を工夫した松図を描き続けた。この「智仁勇」においても、彼がこだわった遠近感の表出を、交互に錯綜する枝と、密な松葉の表現の精粗と濃淡、そして雪のボリュームを正面に置く工夫によって、見事に表している。

<展示　第3期-19>



62　智仁勇（右幅）



62　智仁勇（左幅）

63　ゴブラン織暖炉前衝立

国立ゴブラン製作所　1基　1918年
ゴブラン織　総109.0×113.5

フランス大統領より。フランスは、大正期には北白川宮、朝香宮が滞在され、また皇太子（昭和天皇）が御訪問されて約2週間をすごされた、皇族方には親しみある国であった。ゴブラン織は、フランスの美術制作品を代表するもので、13世紀以来の長い歴史をもつ。17世紀にタピストリー製作所がパリに設立されて、王室調度品の制作を担うなどその発展の中心となった。満天の空、椰子の木の下で愛を語らう男女を表す本図、そして薔薇の彫刻を扇の要部分に施す等の洒落たデザインは、画家、そして装飾美術家としてアール・デコ期に活躍したロベール・ボンフィス（1886～1971）によるもので、制作は1918年である。<展示　第3期-11>

コラム

もうひとつの飾棚と棚飾品―大婚二十五年奉祝献品

大正十四年五月十日は、大正天皇の大婚二十五年にあたる。この御慶事を奉祝して文武官一同からの献上品として画巻（四巻）、画帖（四帖）と、これらを飾り付けるための棚と付属の置物、文房具など一式が製作された。その全容は、現在では『大婚二十五年奉祝献品図録』（昭和四年、東京美術学校文庫）により知られるのみであるが、これとほぼ同時期に製作された当館所蔵の皇太子御結婚奉祝献上の飾棚と棚飾品を考える上でも重要な作品である。大婚二十五年の献上品もまた、一対の飾棚と棚飾品で、それぞれ両陛下に献上された。画巻、画帖はこの棚飾品の中で主となる作品である。大正十三年の棚とは異なり、この画巻と画帖を飾り付けるために棚とその他の文房具類が意匠構成されている。画巻は各地の情景、風俗を描いたもので、四十八図を四巻に分けて収めている。参加した画家は三十七名で、ひとりの画家が複数の図を担当したものも含まれている。一方、画帖には画家百人が参加し、各人が一図を担当して、二十五図ずつ四冊の画帖に収められている。この参加内容からも画巻、画帖の製作が当時の東西画壇をとりまとめた、一大事業であったことが示されている。

この全体の構想もまた東京美術学校（以下美校に略す）に依嘱された。美校の正木校長が記した『十三松堂日記』からは、実際に具体的な構想や各作家への製作依頼が始められたのは、大婚二十五年の祝典が行われた翌月以降のことである。秋には担当する画家や工芸家らが決定し、製作が進められた。この棚の意匠考案者は明記されていないが、正木の日記のなかに図案科教授渡辺香涯と図案設計を見る記述があり、おそらくは渡辺が中心となって担当したと考えられる。棚の蒔絵は、天皇へ献上の分を赤塚自得、皇后への献上分は六角紫水が担当した。棚の上段には舞楽を主題とした木彫彩色人形が置かれ、それぞれ山崎朝雲と内藤伸が製作している。文房具類は料紙箱、硯や硯屏、筆、刀子、印と印匣などを備え、当時の著名な工芸家が担当しており、重厚で華やかな一式である。棚中央に硯と硯屏を据え置き、左右対称に構成された棚の形式や、扉はないが棚内部の蒔絵が棚の主要な文様となっていることなど、渡辺が製作監督した「聖徳太子厨子棚」（大正十五年製作、石川県立美術館所蔵）とも共通している。

製作が進められるなか、当初は大正十五年十月三十一日の天長節に献上することを目指していたが、各作家から全ての作品が集まるのは、想定以上に時間がかかり、その完成は先に延ばされていった。十五年十二月には図録製作のために作品の写真撮影があわただしく進められるなか、大正天皇の御病状は深刻なものとなり、ついに棚を御覧になることなく、二十五日に崩御された。棚の一式が青山東御所の貞明皇后のもとに納められたのは完成より二年以上を経た、昭和四年三月末のことであった。正木による『大婚二十五年奉祝献品図録』の序文を以下に転載する。

「大正十四年大婚二十五年を奉祝せんか為文武官一同より画巻画冊御飾棚御飾品献上の目録を奉呈し直に東京美術学校に委嘱して製作に着手したり、先つ当代知名の画家を選ひ現代風俗画四十八図を作らしめ之を四大画巻に収め、又当代知名の画家百人を選ひて各一図を作らしめ之を四大画冊に収む、此巻冊収むる所の百四十八図より成る絵画の大結集は当代を記念するに足るものなるへし、以上の巻冊を荘置せんか為に御飾棚二基を作り尚巻冊に添ふに置物文房具を以てしたり、此等巻冊の装釘御飾棚置物文房具の製作は当代知名の工芸家の担当奉仕する所なり、大正十五年十二月竣功昭和四年四月に至り青山東御所に於て皇太后陛下の叡覧を賜ひ御嘉納あらせらる。」（五味）

棚の全姿（貞明皇后へ献上の御飾棚）

聖上陛下（大正天皇）へ献上の御飾棚と御飾品

（『大婚二十五年奉祝献品図録』より）

皇后陛下（貞明皇后）へ献上の御飾棚と御飾品

（『大婚二十五年奉祝献品図録』より）

大正天皇へ献上御飾棚の画冊表紙

大正天皇へ献上御飾棚の画巻と軸盆

貞明皇后へ献上御飾棚の画冊表紙

貞明皇后へ献上御飾棚の画巻と軸盆

〈資料〉御成婚奉祝献品「御飾棚」及び「御飾品」（『御成婚奉祝献品図録』より）

○図録序文

大正十二年十二月

東宮殿下東宮妃殿下御成婚を奉祝せんか為文武官一同より御飾棚御飾品献上の目録を奉呈し直に東京美術学校に委託して製作に着手したり、此献品は当代我邦美術工芸の最高品を製作奉献せんことを念としたり、御飾棚二基は蒔絵螺鈿の極真最上の製作にして未曾有の大作なり、御飾棚に装置すへき御飾品は木工金工漆工窯工牙角工染織工に属する工芸家をして妙技を以て新様を製作せしめたり、又四十八人の知名の工芸家を選ひ各得意の技術を以て扇面形色紙形を製作し之を嵌入して二曲屏二双を作る、昭和三年十一月竣功昭和四年四月に至り宮城に於て聖上皇后両陛下叡覧を賜ひ御嘉納あらせらる。

○献品全作品名と作者

聖上陛下へ献上

御飾棚

鳳凰菊文様蒔絵		
図案	島田佳矣	
素地	齋藤富卜	
粽漆	多畑宗哉	
蒔絵	河面冬山	
同	井上呉山	
同	高井白陽	
同	廣幡武人	
同	太田自適	
同	山永萬水	
同	岡本昇三	
螺鈿	片岡華江	
装飾金具	森田忠美	

御飾品

彫金花瓶		
鶴	伊藤正見	
鍛金飾壺		
五芝ノ意	黒川義勝	
七宝飾皿		
胡俗樂苑	稲葉七穂	
木彫置物		
養蚕天女	高村光雲	
磁器飾皿		
鳳凰文様	清水六兵衛	
磁器飾壺		
獅子牡丹唐草	宮川香山	
鋳金置物		
龍	大島如雲	
蒔絵短冊色紙筥		
岩濤文様	迎田秋悦	
磁器花瓶		
花鳥文様	板谷波山	
鋳金飾壺		
銀象嵌文様	津田大壽	
七宝香合		
宝相華文様	安藤重兵衛	
磁器香炉		
菊文様	清風與平	
蒔絵香盆		
岩に浪	戸島光孚	
彫金写真立		
櫻花	清水亀藏	
菊花	鈴木美彦	
螺鈿軸盆		
藤花菖蒲文様	豊川楊溪	
現代風俗絵巻		
宮城	松岡映丘	

演習　服部有恒
村の小学校　狩野光雅
収穫　岩田正巳
百貨店　遠藤教三
紡績工場　高木保之助
捕鯨　穴山義平
法隆寺　吉村忠夫
樂堂　長谷川路可
劇　小村雪岱
東京駅　山田秋衛
ゴルフ　山口蓬春
鋳金花瓶　千鳥文
陶器置物　香取秀眞
岩上鴛鴦　沼田一雅
蒔絵硯筥　菊文様　赤塚自得
彫金洋式文房具　図案　千頭庸哉
製作　山川孝次
蒔絵手筥　瑞鳥霊獣文様　六角紫水
玳瑁装身具　鴛鴦菊文様図案　森田佳鳳
製作　江崎榮造
染織繍組器褥　山鹿清華
二曲御屏風　各種工芸扇面色紙、腰彫菊花文様　図案　島田佳矣

素地　齋藤富卜
粂漆　多畑宗哉
装飾金具　米澤弘安
蒔絵扇面　波　磯矢完山
彫金色紙　長春　磯崎美亞
鋳金色紙　鳳凰　坂口晃南
磁器色紙　雷鳥　由良孤舟
磁器色紙　双魚　宇野仁松
蒔絵扇面　葵祭　神坂祐吉
象嵌扇面　雁來紅　宮川明春
蒔絵扇面　濱菊　船橋舟珉
彫金扇面　雪松　伊藤勝英
彫金色紙　鯉　石川勝信
鋳金色紙　蓬莱山　杉田禾堂
蒔絵扇面　鶉　山崎覚太郎
彫金色紙　竹　四谷正美

磁器色紙　獅子　河村蜻山
蒔絵扇面　鳳尾草　都筑幸哉
鋳銅色紙　石楠花　高村豊周
炻器色紙　鴛鴦　澤田宗山
木画扇面　松叭々鳥　青山泰石
蒔絵扇面　高山植物　二木成抱
蒔絵扇面　牡丹　小岩古明
木彫扇面　嫦娥　山本瑞雲
彫金色紙　蓬莱山　滑川勝溪
彫金色紙　鹿　渡邉萬里
蒔絵扇面　磯千鳥　松田権六

皇后陛下へ献上

御飾棚
蒔絵鶴桐文様　島田佳矣
図案　斎藤富卜
素地　多畑宗哉
縗漆　梅澤隆眞
蒔絵　高井泰令
同　三田村自芳
同　月尾慶水
同　福島泰哉
同　結城哲雄
螺鈿　浅見清壽
同　荘司芳眞
装飾金具　森田忠美

御飾品
鍛金飾壺　藤本萬作
唐花文様
磁器花瓶　中村秋塘
果実文様
木彫置物　山崎朝雲
童
鋳金花瓶　佐々木象堂
南天燭文様
磁器飾壺　伊東陶山
錦彩花卉
蒔絵硯筥　植松包美
梅花蘆手絵

蒔絵色紙短冊筥　由木尾雪雄
若松に雲雀　菊に鶉
七宝飾壺　安藤重壽
唐花文様
牙彫置物　和田光石
唐子遊
錦綾帖　龍村平藏
染織百五種
彫金帖鎮　桂光春
兎
彫金花瓶　船越春珉
群蝶
刺繍写真立　渡邉松華
春
秋　黒田橘郁
磁器香炉　石野龍山
宝相華文様
堆朱香合　堆朱揚成
雙鳥
蒔絵香盆　鶴田和三郎
撫子花文様

裁縫筥並二道具　島田佳矣
初音蘆手絵
図案　木内半古
筥、針箱、牙尺等製作
和洋鋏、鏝、巻尺、
針入筒彫金　市島昌邦
平糸巻、管糸巻、　堀井正文
白墨斗蒔絵

畳紙　吉村忠夫
洋式文房具
図案　島田佳矣
玳瑁筥ペン軸、紙切　江崎榮造
七宝インキ壺、海綿入、　安藤重壽
吸収紙挟
蒔絵手筥　辻村松華
菊花に鶺鴒文様
化粧筥並二道具
図案　島田佳矣
筥彫刻　稲木春千里
嵌入彫金板　海野清
玻璃容器　岩城倉之助
磁器容器　深川榮左衛門
容器素地　筑城良太郎
容器蒔絵　辻石齋
銀柄鏡　北原千祿
玳瑁櫛蒔絵　竹森好文
染織繍組器褥　山鹿清華

二曲御屏風
各種工芸扇面色紙、腰彫桐文様
図案　島田佳矣
素地　斎藤富卜
縗漆　多畑宗哉
装飾金具　伊藤勝典
蒔絵扇面
紅梅　堀井正文
木彫扇面
木花開耶姫　關野聖雲

彫金色紙　鶏　府川一則

鋳金色紙　繭　山本安曇

蒔絵扇面　花車　岡田雪城

青磁色紙　鳩　諏訪蘇山

鍛金色紙　松竹梅　川島東洲

蒔絵扇面　橋　高野松山

彫金色紙　瀑布　關口一也

磁器色紙　山水　高橋清山

堆朱扇面　花籠　富樫光成

蒔絵扇面　濱千鳥　大下雪香

蒔絵扇面　旭　川之邊一朋

彫金色紙　鶴　飴谷有民

陶器色紙　鶺鴒　矢口永壽

象嵌扇面　あけび　木内省古

蒔絵扇面　南天燭　岩瀧尚美

鋳金色紙　霊芝　野上龍起

鋳金色紙　牡丹　北原三佳

布目象嵌扇面　鳳凰　宮智一男

螺鈿扇面　山水　豊川楊汀

鍛金色紙　三福　小野島知文

磁器色紙　高山植物　徳田八十吉

沈刻扇面　山水　前大峰

作品目録

展示期間　九月二十九日(土)～十月二十八日(日)　第1期：九月二十九日(土)～十月二十八日(日)　第2期：十一月三日(土)～十二月九日(日)
第3期：十二月十五日(土)～一月二十七日(日)　第4期：二月二日(土)～三月九日(日)

大正4年　大礼（即位の礼）

No.	作品名	作者名	員数	制作年代	技法・材質	寸法(cm)	展示期間
1	八稜鏡形鳳凰文ボンボニエール			大正四年（一九一五）	銀製	D六・四、H二・五	第1期
2	入目籠形ボンボニエール				銀製	D六・六、H二・九	第1期
3	柏葉笥形ボンボニエール				銀製	六・一×六・〇五、H二・九	第1期
4	挿華（桜・橘）				銀製	H二〇・五、W一一・五	第1期
5	［御物］金装螺鈿御飾太刀拵	島田佳矣（意匠）、清水亀蔵（金具彫金）ほか	一腰	大正九年（一九二〇）	金ほか、彫金、木製漆塗、蒔絵、螺鈿ほか	全長一〇一・五	第1期
6	鳳置物	海野美盛（二代）	一点	大正五年（一九一六）	銀ほか、彫金	(像)三八・五×五一・五×七〇・五 (台)四八・五×四八・五×一三・一	第1期
7	双鶏置物	戸島光孚	一点	大正五年（一九一六）	木製漆塗、蒔絵	(像)三九・六×八三・五×五九・五 (台)五三・七×九七・四×五一・〇	第1期
8	双鶴置物	塚田秀鏡・黒川義勝	一点	大正四年（一九一五）	銀ほか、鍛造、彫金	鶴(大)一九・二×四九・五×八二・八 鶴(小)一七・〇×四七・五×五一・七	第1期
9	斎田豊作図花瓶		一対	大正四年（一九一五）	七宝	各D三六・〇、H六一・〇	第1期
10	丹鳳朝陽図花瓶	海野勝珉	一対	大正四年（一九一五）	銀ほか、彫金	各D二〇・七、H四一・〇	第1期
11	鳳凰図花瓶	海野美盛（二代）・海野清	一対	大正六年（一九一七）	銀ほか、彫金	各D一九・三、H四一・二	第1期
12	萬歳楽置物	高村光雲・山崎朝雲	一点	大正五年（一九一六）	ブロンズ、鋳造、(台)木製漆塗、蒔絵、螺鈿	(像)四八・〇×五〇・〇×六三・〇 (台)五七・〇×七四・〇×一五・〇	第1期
13	網代蔦蒔絵棚	大垣昌訓	一基	大正三年（一九一四）	木製漆塗、蒔絵、七宝	四〇・三×八七・〇×七八・五	第1期
14	東京名勝図・萬歳楽図衝立	島田佳矣（図案）ほか	一基	大正四年（一九一五）	木製ほか	総六〇・〇×二八五・〇×二一六・〇	第1～3期
15	花鳥之図	今尾景年	六曲一双	大正四年（一九一五）	絹本金地着色	本紙各一七七・九×三八一・六	第2期
16	画帖		二帖	大正四年（一九一五）	絹本着色	本紙各三二・五×四一・四	第1期
17	画帖		一帖	大正三年（一九一四）	絹本着色	本紙二三・四～二七・一×二〇・〇～三三・一	第1期
18	書画帖		四帖	大正四年（一九一五）	絹本墨書、絹本着色	本紙各三五・一×四二・七	第1期

No.	作品名	作者名	員数	制作年代	技法・材質	寸法(cm)	展示期間
	大正5年　立太子礼						
19	六花形鴛鴦文ボンボニエール		一点	大正五年(一九一六)	銀製	六・〇×六・四、H二・二	第2期
20	蓬莱雲鶴蒔絵書棚	六角紫水ほか	一基	大正六年(一九一七)	木製漆塗、蒔絵、螺鈿	四五・五×一〇六・〇×九〇・〇	第2期
21	晴天鶴	山元春挙	三幅対	大正五年(一九一六)	絹本着色	本紙各一三〇・五×五一・五	第2期
22	諫鼓鶏置物	鈴木盛久・平田重光ほか	一点	大正初期	銀ほか、鍛造、彫金	(像)一五・〇×一五・三×三六・五 (台)木製漆塗、蒔絵	第2期
23	木彫人形「鷺」		一点	大正初期	木彫彩色	二九・八×四七・〇×四五・〇	第2期
24	山水図花瓶	海野勝珉	一対	明治末期～大正初期	銀、彫金	各D一七・五、H三六・五	第2期
	大正8年　皇太子成年式						
25	八稜鏡形鶴文ボンボニエール		一点	大正八年(一九一九)	銀製	六・三×六・二、H二・五	第2期
26	丸形松喰鶴文ボンボニエール		一点	大正八年(一九一九)	銀製	D五・二、H二・〇	第2期
27	歌蒔絵文台・重硯箱	神坂雪佳(図案)、江馬長閑(文台)、神坂祐吉(硯箱)	一具	大正八年(一九一九)	木製漆塗、蒔絵	(文台)三七・二×六四・三×一三・五 (硯箱)二七・二×二八・九×一七・四	第2期
28	鹿置物	高村光雲	一点	大正九年(一九二〇)	木彫	(像)二八・〇×四九・三×五一・五 (台)三八・五×六〇・〇×一三・二	第2期
29	双鶴に桜梅桃李図	結城素明	三幅対	大正八年(一九一九)	絹本着色	本紙一四四・七×五〇・五	第2期
30	住吉神像置物	天岡均一	一点	大正八年(一九一九)	銀、ブロンズ、鋳造	二五・三×二六・〇×三七・〇	第2期
	大正11年　雍仁親王成年式・大正14年　宣仁親王成年式						
31	箱形雲鶴文ボンボニエール		一点	大正十一年(一九二二)	銀製	六・三×四・四五、H三・一	第2期
32	箱形松唐草文ボンボニエール		一点	大正十一年(一九二二)	銀製	五・一五×三・九五、H一・九	第2期
33	箱形梅花散文ボンボニエール		一点	大正十四年(一九二五)	銀製	五・二×三・九、H二・〇	第2期
34	丸形梅花散文ボンボニエール		一点	大正十四年(一九二五)	銀製	D六・四、H二・六	第2期
35	菊花蒔絵文台・硯箱	船橋舟珉	一具	大正十一年(一九二二)	木製漆塗、蒔絵	(文台)三六・八×六四・三×一二・四 (硯箱)二五・〇×二三・〇×五・五	第2期
36	猿置物	高村光雲	一点	大正十二年(一九二三)	木彫	(像)二八・〇×三九・〇×四一・〇 (台)三五・〇×四八・〇×一二・〇	第2期
	大正13年　皇太子御結婚						

37	六角箱形松鶴文ボンボニエール	一点	大正十三年（一九二四）	木製、螺鈿	四・六×五・三、H三・〇	第3期	
38	卵形亀甲文ボンボニエール	一点	大正十三年（一九二四）	銀製	四・八×六・二、H四・〇	第3期	
39	松樹鷹置物	高村光雲	一点	大正十三年（一九二四）	木彫	（像）五三・〇×八二・〇×九五・五 （台）六〇・五×九一・〇×一九・〇	第2期
40	白馬節会置物	山崎朝雲	一点	大正十三年（一九二四）	木彫、（台）木製漆塗、螺鈿	（像）二八・〇×五五・四×四一・五 （台）三八・五×七〇・八×一一・四	第2期
41	加茂競馬置物	山崎朝雲	一点	大正十三年（一九二四）	銀、鋳造、（台）木製漆塗、螺鈿	（像）四二・〇×七六・〇×五〇・〇 （台）五一・三×七一・二×一〇六・六	第2期
42	アテナ像	ジュール・クータン	一点	十九世紀末～二十世紀初頭	ブロンズ、鋳造	六〇・〇×二四・〇×九八・〇	第3期
43	両殿下御坐像	吉田白嶺	一対	大正十三年（一九二四）	木彫彩色	（殿下）三一・二×三〇・一×二六・〇、（妃殿下）二九・九×二九・八×二四・五、（台）各四〇・三×四〇・三×一・七	第3期
44	奉祝御成婚花電車絵図	島田佳矣ほか	一帖	大正十三年（一九二四）	絹本着色	本紙各二九・七×四三・五	第3期
45	画帖「瑞彩」	富岡鉄斎ほか	三帖	大正十三年（一九二四）	絹本着色	本紙各二八・五×四〇・五	第3期
46	孔雀図	広瀬東畝	対幅	明治四十一年（一九〇八）	絹本着色	本紙各一七七・八×九九・五	第1期
47	武陵桃源・瀛洲神境	富岡鉄斎	対幅	大正十二年（一九二三）	紙本着色	本紙各一七五・〇×四七・九	第3期
48	和暖	竹内栖鳳	六曲一双より右隻	大正十三年（一九二四）	絹本着色	本紙一六二・四×三五四・〇	第3期
49-1	御飾棚　鳳凰菊文様蒔絵	島田佳矣ほか	一基		木製漆塗、蒔絵、螺鈿	五〇・三×一五〇・三×一五六・〇	第4期
49-2	彫金花瓶　鶴	伊藤正見	一点		銀、彫金	D一四・〇、H二一・〇	第4期
49-3	鍛金飾壷　五芝ノ意	黒川義勝	一点		銀、鍛造	D一九・二、H一四・三	第4期
49-4	七宝飾皿　胡俗楽苑	稲葉七穂	一面		七宝	D二四・九、H二・二	第4期
49-5	磁器花瓶　花鳥文様	板谷波山	一点		陶磁	D一四・五、H一八・〇	第4期
49-6	木彫置物　養蚕天女	高村光雲	一点		木彫	九・四×一一・八×二五・〇	第4期
49-7	鋳金置物　龍	大島如雲	一点		銅、鋳造	一六・五×一八・五×一二・七	第4期
49-8	鋳金飾壷　銀象嵌文様	津田大壽	一点		銅、鋳造	D一四・五、H一八・四	第4期
49-9	蒔絵短冊色紙筥　岩濤文様	迎田秋悦	一具		蒔絵	短冊箱三九・三×九・五×四・四 色紙箱二四・一×二一・五×四・六	第4期
49-10	七宝香合　宝相華文様	安藤重兵衛	一点		七宝	D六・五、H二・五	第4期
49-11	蒔絵香盆　岩に浪	戸島光孚	一枚		蒔絵	二四・六×三三・七×二・二	第4期

No.	作品名	作者名	員数	制作年代	技法・材質	寸法(cm)	展示期間
49-12	彫金写真立　桜・菊	清水亀蔵、鈴木美彦	一対		銀、彫金	(桜)二四・二×一八・二×一・一 (菊)二四・三×一八・二×一・一	第4期
49-13	鋳金花瓶　千鳥文	香取秀真	一点		銅、鋳造	D八・八、H一五・二	第4期
49-14	蒔絵硯箱　菊文様	赤塚自得	一合		蒔絵	二四・五×二三・三×一〇・〇	第4期
49-15	蒔絵手箱　瑞鳥霊獣文様	六角紫水	一合		蒔絵	三〇・六×二三・六×一一・五	第4期
49-16	玳瑁装身具　鴛鴦菊文様	森田佳鳳(図案)、江崎榮造(製作)	一具		玳瑁	三一・六×三五・四×九・五	第4期
49-17	彫金洋式文房具	千頭庸哉(図案)、山川孝次(製作)	一具		彫金	一九・九×三一・二×一〇・七	第4期
49-18	螺鈿軸盆　藤花菖蒲文様	豊川楊渓	一点		螺鈿	三八・一×一三・九×二・八	第4期
49-19	現代風俗絵巻	松岡映丘ほか	一巻			本紙縦二八・四、本紙各長七九・一～一五〇・五	第4期
49-20	染織繍組器褥	山鹿清華	一式のうち		絹、革、刺繍、綴織		第4期
49-21	二曲御屏風　各種工芸扇面色紙	島田佳矣ほか	二曲一双		木製ほか	各総一九九・四×二〇三・〇	第4期
50-1	御飾棚　鶴桐文様蒔絵	島田佳矣ほか	一基		木製漆塗、蒔絵、螺鈿	五〇・三×一五〇・三×一五六・〇	第4期
50-2	鍛金飾壷　唐華文様	藤本萬作	一点		銀、鍛造	D一五・四、H二四・〇	第4期
50-3	磁器花瓶　果実文様	中村秋塘	一点		陶磁	D一四・六、H二四・九	第4期
50-4	木彫置物　童	山崎朝雲	一点		木彫彩色	一〇・三×一三・二×二五・五	第4期
50-5	鋳金花瓶　南天燭文様	佐々木象堂	一点		銅、鋳造	D一四・七、H二三・四	第4期
50-6	磁器飾壷　錦彩花卉	伊東陶山(二代)	一点		陶磁	D一五・三、H二三・八	第4期
50-7	七宝飾壷　唐花文様	安藤重壽	一点		七宝	D一三・六、H二〇・五	第4期
50-8	蒔絵硯箱　梅花芦手絵	植松包美	一合		蒔絵	二六・〇×二四・四×五・〇	第4期
50-9	蒔絵色紙短冊箱　若松に雲雀　菊に鶉	由木尾雪雄	一具		蒔絵	短冊箱三九・〇×八・六×四・二 色紙箱三三・五×二〇・七×四・三	第4期
50-10	牙彫置物　唐子遊	和田光石	一点		牙彫	一五・二×一八・二×一三・五	第4期
50-11	錦綾帖　染織百五種	龍村平蔵	一帖		絹、織物	三六・三×三〇・五×一三・二	第4期
50-12	彫金帖鎮　兎	桂　光春	一点		銀、彫金	一六・〇×一三・二×九・六	第4期

50-13	彫金花瓶　群蝶	船越春珉	一点	銀、彫金	D一五・七、H九・五	第4期
50-14	刺繍写真立　春・秋	渡邊松華、黒田橘邨	一対	絹、刺繍	各二四・二×一八・一	第4期
50-15	磁器香炉　宝相華文様	石野龍山	一点	陶磁	D一一・八、H一〇・六	第4期
50-16	堆朱香合　双鳥	堆朱楊成（二十代）	一合	堆朱	D七・六、H二・六	第4期
50-17	蒔絵香盆　撫子花文様	鶴田和三郎（二代）	一枚	蒔絵	二四・五×三三・五×三・六	第4期
50-18	裁縫筥並ニ道具	島田佳矣、木内半古ほか	一具	木製、象嵌	（外箱）三三・六×二四・二×一一・一	第4期
50-19	化粧筥並ニ道具	島田佳矣、岩城倉之助ほか	一具	玳瑁、ガラス、陶磁ほか	（外箱）三九・五×三五・九×一一・二	第4期
50-20	洋式文房具	島田佳矣ほか	一具	彫金	三〇・三×一五・〇×九・五	第4期
50-21	蒔絵手筥　菊花に鶺鴒文様	辻村松華	一合	蒔絵	二九・〇×二一・二×一〇・七	第4期
50-22	染織繍組器褥	山鹿清華	一式のうち	絹、革、刺繍、綴織		第4期
50-23	二曲御屏風　各種工芸扇面色紙	島田佳矣ほか	二曲一双	木製ほか	各総一九九・四×二〇三・〇	第4期
51	太陽の暦石の文鎮		一点	一九二三年頃	銅、鋳造	D一六・〇、H一・二	第3期
52	宝相華文胡蘆瓶		一対	中国・明時代（十五～十六世紀）	七宝	各D四二・〇、H九三・〇	第3期
53	切子硝子花瓶	ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場	一点	一九二三年頃	ガラス	D一七・八、H四〇・五	第3期
54	赤切子硝子花盛器	ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場、ユベール・フアルジュ（デザイン）	一点	一九二三年頃	ガラス	D三六・〇、H三九・〇	第3期
55	玻璃飾壺	オレフォッシュ・ガラス工場、エードヴァルド・ハルド（デザイン）	一点	一九二三年頃	ガラス	D二五・〇、H四四・五	第3期
56	菊銀杏文花瓶	国立セーブル製陶所、C・ピアン（絵付デザイン）	一対	一九〇八年	陶磁ほか	各D四〇・〇、H六五・〇	第3期
十一	**大正14年　大正天皇大婚二十五年（銀婚式）**						
57	双鶴置物形ボンボニエール		一点		銀製	台五・五×六・三	第3期
58	菊花形鳳凰文ボンボニエール		一点		銀製	D五・九、H三・一	第3期
59	朝陽鳴鳳之図	小室翠雲	六曲一双	大正十四年（一九二五）	絹本着色	本紙各一六一・五×三六六・〇	第1期

No.	作品名	作者名	員数	制作年代	技法・材質	寸法(cm)	展示期間
60	鳳凰之図	結城素明	対幅	大正十四年（一九二五）	絹本着色	本紙各一七三・一×七一・二	第1期
61	琵琶湖・富士図	山元春挙	対幅	大正十四年（一九二五）	絹本着色	本紙各一一七・九×三六・〇	第3期
62	智仁勇	山元春挙	対幅	大正十四年（一九二五）	絹本着色	本紙各一七〇・八×一一三・八	第3期
63	ゴブラン織暖炉前衝立	国立ゴブラン製作所	一基	一九一八年	ゴブラン織	総一〇九・〇×一一三・五	第3期

主な参考文献

●書籍等

『大禮記録』内閣書記官室記録課、一九一九年

内務省秘書課『御大礼奉祝献上品図録』内務省秘書課、一九二〇年

北浦大介編『御成婚奉祝献品図録』東京美術学校文庫、一九二九年

北浦大介編『大婚二十五年奉祝献品図録』東京美術学校文庫、一九二九年

藤井石童『昭和美術百家選　第二十三編「山崎朝雲」』美術日報社、一九三九年

正木直彦『十三松堂日記』中央公論美術出版、一九六五年

磯崎康彦・吉田千鶴子『東京美術学校の歴史』日本文教出版、一九七七年

東京美術学校篇『東京芸術大学百年史』、ぎょうせい、第一巻・一九八七年、第二巻・一九九二年、第三巻・平成九年

『図説　天皇の儀礼』（別冊歴史読本）新人物往来社、二〇〇一年

●展覧会図録等

『湖国が生んだ京都画壇の巨匠　山元春挙』滋賀県立近代美術館、一九八五年

『生誕一五〇年記念　富岡鉄斎展』京都市美術館、一九八五年

『資料は繋ぐ―名作と下絵・連作』芸大コレクション展図録、東京芸術大学大学美術館、二〇〇五年

『工芸の世紀』東京芸術大学大学美術館、二〇〇三年

●論文等

吉田千鶴子「東京美術学校依嘱制作資料」『東京芸術大学美術学部紀要』第十三号、一九七八年

吉田千鶴子「美校の経営戦略・依嘱製作事業」『藝大通信』上野の杜の波瀾万丈―第三回、二〇〇六年

祝（いわい）美（のび）— 大正期皇室御慶事の品々
三の丸尚蔵館第45回展覧会

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　野崎印刷紙業 株式会社
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年九月二十九日発行

© 2007. The Museum of the Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

祝（いわい）美（のび）―大正期皇室御慶事の品々
三の丸尚蔵館第45回展覧会

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　野崎印刷紙業 株式会社
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年九月二十九日発行

©2007. The Museum of the Imperial Collections

50-18
Sewing box and accessories
Shimada Yoshinari, Kiuchi Hanko, etc.
wood, inlay
(outer box)33.6 × 24.2 × 11.1

50-19
Cosmetic box and accessories
Shimada Yoshinari and Iwakura Kuranosuke
tortoise shell, glass, ceramic, etc.
(outer box)39.5 × 35.9 × 11.2

50-20
Western stationery set
Shimada Yoshinari, etc.
metal carving
30.3 × 15.0 × 9.5

50-21
Box with chrysanthemum and wagtail design
Tsujimura Shoka
makie
29.0 × 22.2 × 10.7

50-22
Textile mats
Yamaga Seika
silk, leather, embroidery, figured brocade

50-23
Folding screens with various fan shaped *shikishi*
Shimada Yoshinari, etc.
pair of two-fold screens
wood, etc.
199.4 × 203.0 each

51
Sun stone paperweight
c.1923
copper, metal casting
D.16.0, H.1.2

52
Pair of gourd shaped jars with *hosoge* design
Ming Dynasty
(15 ~ 16th century)
enamel
D.42.0, H.93.0 each

53
Cut glass vase
Val Saint Lambert Glass Works
c.1923
glass
D.17.8, H.40.5

54
Red cut glass flower container
Val Saint Lambert Glass Works, design by Hubert Fouarge
c.1923
glass
D.36.0, H.39.0

55
Glass decorative jar
Orrefors Glass Works, design by Edward Hald
c.1923
glass
D.25.0, H.44.5

56
Pair of flower vases with chrysanthemum and gingko design
Manufacture National de Sevres, painting and design by C.Pihan
1908
ceramic, etc.
D.40.0, H.65.0 each

Silver Wedding Ceremony of Emperor Taisho in 1925

57
Bonbonniere with pair of cranes
silver
base 5.5 × 6.3

58
Bonbonniere in chrysanthemum shape with phoenix design
silver
D.5.9, H.3.1

59
Phoenix and the rising sun
Komuro Suiun
pair of six-fold screens
1925
color on silk
161.5 × 366.0 each

60
Phoenix
Yuki Somei
pair of scrolls
1925
color on silk
173.1 × 71.2 each

61
Lake Biwa and Mount Fuji
Yamamoto Shunkyo
pair of scrolls
1925
color on silk
117.9 × 36.0 each

62
Snow covered pines and hawk
Yamamoto Shunkyo
pair of scrolls
1925
color on silk
170.8 × 113.8 each

63
Stove screen with Gobelins tapestry ornament
National Gobelins Manufactory
1918
Gobelin tapestry
109.0 × 113.5

49-14
Inkstone box with chrysanthemum design
Akatsuka Jitoku
makie
24.5 × 23.3 × 10.0

49-15
Box with auspicious bird and animal design
Rokkaku Shisui
makie
30.6 × 23.6 × 11.5

49-16
Accessories with mandarin duck and chrysanthemum designs
Morita Kaho(design) and Kozaki Eizo(craftwork)
tortoise shell
31.6 × 35.4 × 9.5

49-17
Western style metal carved stationery set
Chikami Yosai(design), Yamakawa Koji(craftwork)
metal carving
19.9 × 32.2 × 10.7

49-18
Scroll tray with wisteria and iris design
Toyokawa Yokei
raden
38.1 × 13.9 × 2.8

49-19
Scroll of contemporary genre illustrations
Matsuoka Eikyu etc.
H 28.4, L 79.1 ~ 150.5 each

49-20
Textile mats
Yamaga Seika
silk, leather, embroidery, figured brocade

49-21
Folding screens with various fan shape *shikishi*
Shimada Yoshinari, etc.
pair of two-fold screens
wood, etc.
199.4 × 203.0 each

50-1
Cabinet with crane and paulownia design
Shimada Yoshinari, etc.
lacquer on wood, *makie*, *raden*
50.3 × 150.3 × 156.0

50-2
Vase with Chinese floral design
Fujimoto Mansaku
silver, metal hammering
D.15.4, H.24.0

50-3
Vase with fruit design
Nakamura Shuto
ceramic
D.14.6, H.24.9

50-4
Child
Yamazaki Choun
color on carved wood
10.3 × 13.2 × 25.5

50-5
Vase with nandin design
Sasaki Shodo
copper, metal casting
D.14.7, H.23.4

50-6
Vase with flower design in overglazed enamels
Ito Tozan II
ceramic
D.15.3, H.23.8

50-7
Vase with Chinese flower design
Ando Juju
enamel
D.13.6, H.20.5

50-8
Inkstone box with plum blossom and character design
Uematsu Hobi
makie
26.0 × 24.4 × 5.0

50-9
Poem card boxes with young pine, lark design, and chrysanthemum and quail design
Yukio Yukio
makie
tanzaku box 39.0 × 8.6 × 4.2, *shikishi* box 23.5 × 20.7 × 4.3

50-10
Chinese children at play
Wada Koseki
carved ivory
15.2 × 18.2 × 13.5

50-11
Album of *nishiki*(brocade) and *aya*(twill), 105 types of textiles
Tatsumura Heizo
woven silk
36.3 × 30.5 × 13.2

50-12
Paperweight in shape of rabbit
Katsura Mitsuharu
silver, metal carving
16.0 × 13.2 × 9.6

50-13
Vase with butterfly design
Funakoshi Shunmin
silver, metal carving
D.15.7, H.9.5

50-14
Embroidered photograph frame, Spring and Autumn
Watanabe Shoka and Kuroda Kisson
silk, embroidery
24.2 × 18.1 each

50-15
Inscense burner with *hosoge* design
Ishino Ryuzan
ceramic
D.11.8, H.10.6

50-16
Incense caddy with pair of birds design
Tsuishu Yozei XX
tsuishu(carved lacquer)
D.7.6, H.2.6

50-17
Incense tray with fringed pink design
Tsuruta Wasaburo II
makie
24.5 × 33.5 × 3.6

39
Pine tree and hawk
Takamura Koun
1924
carved wood
53.0 × 82.0 × 95.5, (base)60.5 × 91.0 × 19.0

40
White Horse presented to the Emperor at the annual festival
Yamazaki Choun
1924
carved wood, base: lacquer on wood with *raden*
28.0 × 55.4 × 41.5,(base)38.5 × 70.8 × 11.4

41
Kamo horse race
Yamazaki Choun
1924
cast silver, base: lacquer on wood, *raden*
42.0 × 76.0 × 50.0, (base)51.3 × 71.2 × 106.6

42
Statue of Athena
Jules Coutan
late 19th c. ~ early 20th c.
bronze, metal casting
60.0 × 24.0 × 98.0

43
Their Imperial Highnesses seated
Yoshida Hakurei
1924
color on carved wood
(Prince)31.2 × 30.1 × 26.0, (Princess)29.9 × 29.8 × 24.5, (base)40.3 × 40.3 × 1.7 each

44
Flower train celebrating the Imperial Wedding
Shimada Yoshinari, etc.
1924
color on silk
29.7 × 43.5 each

45
Album, *Zuisai*(Fresh Colors)
Tomioka Tessai, etc.
3 albums
1924
color on silk
28.5 × 40.5 each

46
Peacock
Hirose Toho
pair of scrolls
1908
color on silk
177.8 × 99.5 each

47
Earthly paradise and sacred mountains
Tomioka Tessai
pair of scrolls
1923
color on paper
175.0 × 47.9 each

48
Young deer gathering
Takeuchi Seiho
six-fold screen
1924
color on silk
162.4 × 354.0

49-1
Cabinet with phoenix and chrysanthemum design
Shimada Yoshinari, etc.
lacquer on wood, *makie, raden*
50.3 × 150.3 × 156.0

49-2
Vase with crane design
Ito Masami
silver, metal carving
D.14.0, H.21.0

49-3
Vase with design of five plants of longevity
Kurokawa Gisho
silver, metal hammering
D.19.2, H.14.3

49-4
Decorative plate with design of Idyllic Persian Garden
Inaba Shichiho
enamel
D.24.9, H.2.2

49-5
Vase with flower and bird design
Itaya Hazan
ceramic
D.14.5, H.18.0

49-6
Sericulture goddess
Takamura Koun
carved wood
9.4 × 11.8 × 25.0

49-7
Dragon
Oshima Joun
copper, metal casting
16.5 × 18.5 × 12.7

49-8
Decorative jar with silver inlay design
Tsuda Daiju
copper, metal casting
D.14.5, H.18.4

49-9
Poem card boxes with rock and wave design
Koda Shuetsu
makie
tanzaku box 39.3 × 9.5 × 4.4, *shikishi* box 24.1 × 21.5 × 4.6

49-10
Incense caddy with *hosoge* design
Ando Jubei
enamel
D.6.5, H.2.5

49-11
Incense tray with rock and wave design
Tojima Kofu
makie
24.6 × 33.7 × 2.2

49-12
Photograph frames with cherry blossom and chrysanthemum design
Shimizu Kamezo and Suzuki Yoshihiko
silver, metal carving
(cherry blossom)24.2 × 18.2 × 1.1, (chrysanthemum)24.3 × 18.2 × 1.1

49-13
Vase with plover design
Katori Hotsuma
copper, metal casting
D.8.8, H.15.2

21
Crane in fine weather
Yamamoto Shunkyo
3 scrolls
1916
color on silk
130.5 × 51.5 each

22
Rooster on drum
Suzuki Morihisa, Hirata Juko, etc.
early Taisho era
silver, etc., metal hammering, metal carving, base: lacquer on wood, *makie*
15.0 × 15.3 × 36.5,
(base)34.3 × 41.7 × 23.0

23
Noh play doll, Heron
early Taisho era
color on carved wood
29.8 × 47.0 × 45.0

24
Pair of vases with landscape design
Unno Shomin
Late Meiji to early Taisho era
silver, metal carving
D.17.5, H.36.5 each

Seinen Shiki (Coming Age Ceremony of the Crown Prince, later Emperor Showa) in 1919

25
Bonbonniere in the shape of an eight-lobed mirror with crane design
1919
silver
6.3 × 6.2, H.2.5

26
Round bonbonniere with crane eating pine branch design
1919
silver
D.5.2, H.2.0

27
Set of stationery stand and inkstone box with design of poetry
Kamisaka Sekka(design), Ema Chokan(stationery stand), Kamisaka Yukichi(inkstone box)
1919
lacquer on wood, *makie*
stationery stand 37.2 × 64.3 × 13.5
inkstone box 27.2 × 28.9 × 17.4

28
Deer
Takamura Koun
1920
carved wood
28.0 × 49.3 × 51.5,
(base)38.5 × 60.0 × 13.2

29
Pair of cranes, cherry and plum blossoms, peach and Japanese plum blossoms
Yuki Somei
Set of 3 hanging scrolls
1919
color on silk
144.7 × 50.5 each

30
Sumiyoshi God
Amaoka Kin'ichi
1919
silver, bronze, metal casting
25.3 × 26.0 × 37.0

Seinen Shiki of Prince Yasuhito in 1922, *Seinen Shiki* of Prince Nobuhito in 1925

31
Box shaped bonbonniere with crane and cloud design
1922
silver
6.3 × 4.45, H.3.1

32
Box shaped bonbonniere with pine and arabesque design
1922
silver
5.15 × 3.95, H.1.9

33
Box shaped bonbonniere with scattered plum blossom design
1925
silver
5.2 × 3.9, H.2.0

34
Round bonbonniere with scattered plum blossom design
1925
silver
D.6.4, H.2.6

35
Set of stationery stand and inkstone box with chrysanthemum design
Funabashi Shumin
1922
lacquer on wood, *makie*
stationary stand
36.8 × 64.3 × 3.4
inkstone box 25.0 × 23.0 × 5.5

36
Monkey
Takamura Koun
1923
carved wood
28.0 × 39.0 × 41.0,
(base)35.0 × 48.0 × 12.0

Marriage of the Crown Prince in 1924

37
Hexagonal bonbonniere with crane and pine design
1924
wood, *raden*
4.6 × 5.3, H.3.0

38
Egg shaped bonbonniere with tortoise shell design
1924
silver
4.8 × 6.2, H.4.0

List of Works

Tairei (Ceremony of Enthronement of Emperor Taisho) in 1915

1
Bonbonniere in the shape of an eight-lobed mirror with phoenix design
1915
silver
D.6.4, H.2.5

2
Bonbonniere in the shape of a basket
silver
D.6.6, H.2.9

3
Bonbonniere in the shape of an oak leaf box
silver
6.1 × 6.05, H.2.9

4
Artificial Flower Decorations
silver
H.20.5, W.11.5

5
Decorative *tachi* sword
Shimada Yoshinari(design), Shimizu Kamezo (metal carving), etc.
1920
gold, etc., metal carving, lacquer on wood, *makie*(sprinkled picture), *raden*(mother of pearl inlay)
total L.101.5
Imperial Properties

6
Phoenix
Unno Yoshimori II
1916
silver, etc., metal carving
38.5 × 51.5 × 70.5,
(base)48.5 × 48.5 × 13.1

7
Pair of chickens
Tojima Kofu
1916
lacquer on wood, *makie*
39.6 × 83.5 × 59.5,
(base)53.7 × 97.4 × 51.0

8
Pair of cranes
Tsukada Shukyo,
Kurokawa Gisho
1915
silver, etc., metal hammering, metal carving
large crane 19.2 × 49.5 × 82.8,
small crane 17.0 × 47.5 × 51.7

9
Pair of vases with divine rice field design
1915
enamel
D.36.0, H.61.0 each

10
Pair of vases with sunrise and phoenix design
Unno Shomin
1915
silver, etc., metal carving
D.20.7, H.41.0 each

11
Pair of vases with phoenix design
Unno Yoshimori II,
Unno Kiyoshi
1917
silver, etc., metal carving
D.19.3, H.41.2 each

12
Manzairaku dance
Takamura Koun,
Yamazaki Choun
1916
bronze, metal casting, base: lacquer on wood, *makie*, *raden*
48.0 × 50.0 × 63.0,
base 57.0 × 74.0 × 15.0

13
Decorative shelf with wickerwork and ivy design
Ogaki Shokun
1914
lacquer on wood, *makie*, enamel
40.3 × 87.0 × 78.5

14
Screen of famous places in Tokyo, Manzairaku dance
Shimada Yoshinari(design), etc.
1915
wood, etc.
60.0 × 285.0 × 216.0

15
Flowers and birds
Imao Keinen
Pair of six-fold screens
1915
color on gold leaf and silk
177.9 × 381.6 each

16
Painting albums
2 albums
1915
color on silk
32.5 × 41.4 each

17
Painting album
1914
color on silk
23.4 ~ 27.1 × 30.0 ~ 33.1

18
Painting and calligraphy albums
4 albums
1915
ink on silk, color on silk
35.1 × 42.7 each

Rittaishi Rei (Ceremony of Investiture of the Crown Prince, later Emperor Showa) in 1916

19
Bonbonniere in shape of six-petal flower with mandarin duck design
1916
silver
6.0 × 6.4, H.2.2

20
Cabinet with Mt. Penglai and crane design
Rokkaku Shisui, etc.
1917
lacquer on wood, *makie*, *raden*
45.5 × 106.0 × 90.0

The Situations of Art Works Created for Auspicious Events

The art world of the Taisho era developed in various ways with the many artists asserting their views between influence from Western countries and Japanese tradition. Modernism, individualism, realism, art-deco, new literati painting , neo-classicism, and Taisho roman, are some of the terms used explaining the wide variety of art trends in this era. The designs of the works introduced in this exhibition were restricted to be traditional, because of their unique purposes to be used for auspicious events of the Imperial Court. However, within this restriction, works showing originality produced by the artists' unique styles and high quality techniques were created, and these points can be seen in the art of this era that has not been admired very much until the present. It is the era when the activity of younger enthusiastic artists began, shifting from the Meiji era artists.

Many of the works displayed in this exhibition are not only large in size, but a number of artists participated in their production. This does not mean that they were simply made by division of labor in industrial production. They are results of the unified abilities. The works were completed by the combined efforts of each person participating, in the designs, the techniques of each part, and the supervision. The most important works among them is the Cabinet with phoenix and chrysanthemum design, and the Cabinet with crane and paulownia design (no. 49 and 50), that were created to celebrate the Marriage of the Crown Prince in 1924, and took 4 years to be completed by more than 130 people participating. The other works are also the collaboration of a number of artists. As for the vases and ornaments, they each have an accompanying base with elaborate designs which were made by other artists. These bases were also important elements, necessary to complete the works. As for the paintings, the binding of albums, metal fittings, and the outer boxes were all created considering the total decorative design. This kind of composite art can be considered as the main feature of these works celebrating auspicious events of the Imperial Court.

Since the Meiji era, various artists were able to grasp their chances by being appraised at the many expositions and exhibitions. Furthermore, art schools such as Tokyo Fine Art School and Kyoto City School of Arts educated many talented students, and coordinators acted to plan and instruct the production of such works. Masaki Naohiko(1862-1940), who served as principal of the Tokyo Fine Art School for many years, and acted widely in art education and art administration, played an important part in the production of works for auspicious events of the Imperial Court. After being the principal of the Nara Prefectural Middle School, a curator of the Imperial Nara Museum, and then a secretary to the Minister of Education, he became the 5th principal of the Tokyo Fine Art School for 31 years from 1901 to 1932. Many of the works in this exhibition were commissioned to the Tokyo Fine Art School, and Masaki played a main part of them. Shimada Yoshinari acted as designer and supervisor, and other designers such as Watanabe Kogai, Kamisaka Sekka, Chikami Yosai, etc. also played an important part of these kind of art works of the Taisho era.

One more point that we focus on in this exhibition is that refined sense and high quality technique of the artists can be seen within the restriction of Japanese and Imperial Court tradition for the purpose of auspicious events.

Among the exhibited works, a surprising one is Komuro Suiun's Phoenix and the rising sun (no.59). Suiun is a Nanga painter representative of this era, and his style is a quaint ink painting with light colors. However, this work is a bright colored painting which would probably not be considered as his work if there were no inscription or seal. We do not know if the theme was chosen by the artist or the commissioner, but it is an unusual example of Suiun's work.

Yamamoto Shunkyo's Crane in fine weather(no.21)was created under Imperial order with the theme chosen for the *Rittaishi Rei*, and Shunkyo's perspective is effectively used, in a composition showing the majestic landscape around Mount Fuji. Furthermore, Shunkyo's refined sense can be seen in the traditional Yamatoe color sense, while maintaining realistic depiction, in the sky and sea among ultramarine mist, and green pines, white snow on Mount Fuji and white waves, and the red sun.

The auspicious events of the Imperial Court influenced the Taisho era art world, by creating a change in the system of art production, and brought out individuality and enthusiasm of many artists, along with new aspects. These contrived works of creative designs and techniques within tradition, show the significance of auspicious events of the Imperial Court among modern Japanese art, along with the pleasure of splendid art for celebration.

Auspicious Events of the Taisho Era and Art Production

In this exhibition, we focus on the auspicious events of the Imperial Court during the Taisho era(1912 ~ 1926), introducing art works that were created to celebrate such events, along with the situation, designs and techniques to create them. The Taisho era was only a period of 15 years, but it was an era when the Imperial Court celebrated many auspicious events. In this exhibition, we introduce the events of Emperor Taisho and his three sons, namely the *Tairei*(Ceremony of Enthronement of Emperor Taisho)in 1915, the *Rittaishi Rei*(Ceremony of Investiture of the Crown Prince)in 1916, the *Seinen Shiki*(Coming Age Ceremony of the Crown Prince)in 1919, the *Seinen Shiki* of Prince Yasuhito in 1922, the *Seinen Shiki* of Prince Nobuhito in 1925, the Marriage of the Crown Prince in 1924, and the Silver Wedding Ceremony of Emperor Taisho in 1926. The various gifts of celebration are gorgeous as well as traditional. Some are objects given within the Imperial family, but many are gifts from others. It is not clear about the details on how many art works such as painting and calligraphy, vases, or other decorative ornaments where actually presented to the Court, but much can be understood from the existing works and reference materials about their design features and artists' activities. We expect to be able to introduce more about each work after future research, but at this point, we will make an outline on the works, and consider it is a chance to reconsider the Taisho era.

Emperor Taisho and his family

Emperor Taisho was born as the third son of Emperor Meiji in 1879. He was in poor health since a youth, which was a matter worried about, but the *Rittaishi Rei* was held in 1889 where he formally became the Crown Prince. He married Princess Kujo Sadako(Empress Teimei)in 1900, and after this, his health recovered, and he enthusiastically visited the provinces throughout the country, and talked with many people. This was quite different from Emperor Meiji who had only spoken to a limited number of people, seeming like a human god, and therefore the people began to consider the Imperial Court as more amiable than before. After the royal marriage, Prince Hirohito(Emperor Showa)was born in 1901, followed by Prince Yasuhito(Prince Chichibu)in 1902 and Prince Nobuhito(Prince Takamatsu)in 1905. Emperor Taisho was a fond father and cherished spending time with the Princess and his sons. After he became Emperor, his 4th son Prince Takahito(Prince Mikasa)was born in 1915.

Emperor Meiji passed away in 1912, and the new era was named Taisho. The Ceremony of Enthronement of Emperor Taisho was held in 1915, but the Emperor's health again declined, and the Imperial Household Ministry announced that his condition had worsened in 1921. After Prince Hirohito returned from visiting foreign countries, he became the Prince Regent and carried out political affairs on behalf of the Emperor. Though the Emperor stayed at Imperial villas in Numazu and Hayama in order to recuperate, his health did not recover, and he passed away in 1926, at age 48.

Empress Teimei was born in 1884 as the 4th daughter of Prince Kujo Michitaka. She was intelligent and cheerful, and was devoted to her husband. She took consideration to various things and her attention towards the Princes can be presumed by the various left belongings, and she also spent much efforts towards the people such as leprosy relief, sericulture, etc. After she became Empress Dowager, her brave and positive personality did not change, and she continued to supported the Imperial Court. She passed away in 1951, at age 67.

The four Princes were intelligent and good brothers, and each served the country from their own positions. They all studied abroad, and developed international viewpoints.

The family of Emperor Taisho has influenced the Imperial Court and our country greatly, such as in the various systems and customs of the Imperial Court, and promoting projects for the country and the people. Naturally, the artists with great enthusiasm in the creation of art work celebrating the auspicious events of this Imperial Family of the Taisho era, produced many superior works as a result.

Foreword

Auspicious events of the Imperial Court are also joyous for the people, and this joy has been expressed in various ways. Expressions in art and craft works are among them, and designs fit for each auspicious event were chosen in accord, often gorgeous and beautiful.

There have been many auspicious events of the Imperial Court since the modern era, and during the Taisho era, many superior art works were created celebrating each of them and presented to the Court. The Taisho(1912 ~ 1926) era was only a short period of 15 years, but during it various events were held, such as the *Tairei*(Ceremony of Enthronement of Emperor Taisho)in 1915, the *Rittaishi Rei*(Ceremony of Investiture of the Crown Prince, later Emperor Showa)in 1916, the *Seinen Shiki*(Coming Age Ceremony of the Crown Prince, later Emperor Showa)in 1919, the Marriage of the Crown Prince in 1924, the Silver Wedding Ceremony of Emperor Taisho in 1925, the *Seinen Shiki* of Prince Yasuhito, and the founding of the Prince Chichibu Family in 1922. It was the era when production of art works celebrating these events was at its peak. Such celebrations had been held since the Meiji era, and gradually became splendid and well arranged by the Taisho era. Furthermore, the Imperial Court had carried out repeated foreign relations since the Meiji era, and gifts from foreign countries increased in the Taisho era because the Imperial Court became recognized by foreign countries.

In this exhibition, we will introduce the qualities of the designs, the people related with them, and the situation of the era, through the many art works created and presented to the Imperial Court to celebrate these auspicious events during the Taisho era.

We hope it will be a chance to recognize the high and interesting quality of the Taisho era art, which has not been noted much before.

September, 2007

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

Art for Celebrations

— Art Works for Auspicious Imperial Events during the Taisho Era

•

September 29 (Sat.) ,2007— March 9 (Sun.),2008

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan